スタンド使いもリリカルマジカルッ！

怪人紳士サノブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スタンド使いもリリカルマジカルッ！

【Ｎコード】
Ｎ９８６４Ｗ

【作者名】
怪人紳士サノブ

【あらすじ】
スタンド使いもリリカルマジカルしたっていいじゃない！なんてよくわからん発想から生まれたこの作品　オリジナルスタンドやらなんやらたくさん出てきます　ご都合主義もたくさん出てきます　矛盾とか誤字脱字が含まれる恐れがあります　以上を踏まえた上で閲覧してください※※※※※
オリジナルスタンド募集を感想欄ではなく活動報告の方にまとめることにしました　よろしくお願いします

それは一人の転生者から始まった（前書き）

二番煎じもあるだろう

うはこいつきめぇとか思うだろう

話についていけませんとかも思うだろう

……そりゃ深く考えず書いたもの

他の作品があるのに節操ないサノブの本作品、飽きたら回れ右すればいいさ

とりあえずお試しで短く数話作っただけ

期待しないで読んでいってね！

それは一人の転生者から始まった

辺りが真っ白な円卓のような空間

なにものもその一色しか許さない無機質な空間に突如3人の

否、3柱の存在が現れる

神々しさを滲ませた淡い光にうっすらと包まれていた彼らの表情は

優れなかった

それはある一つ問題が原因である

「これからどうしましょう…」

「どうしょうもなにもやるしかあるまい…」

「そもそもあの新入り……事の重大性がわかっているのでしょうか？」

それぞれ頭を痛める問題

それは新たに彼らの同胞に加わった後のことだ

あるときにその若き同胞は漏れだした魂に力を与えて転生させた

かつてある者が送り出した魂が突然変異を起こした混沌とした世界をあるべき道筋にただし崩壊を食い止めた話がある

それを知る若き同胞はそれを己の娯楽にせんとし、一つの世界に魂を送り出したのである

だが、若き同胞は魂に過剰なまでに力を注いだせいで魂の次元を凌駕してしまったのだ

その魂は世界の修正をはね除けてしまい、世界の次元が無理矢理引き上げられていた

これは下手をすれば数多の命が無差別に神に至ろうとしていることバランスが崩れかねない愚行を犯した若き同胞は再び格を下げられたが問題の解決法に今は彼らは悩まされているのである

そんな彼らのもとに新たに1柱…

老いが見えるが他の3柱よりも存在感が溢れていた

「ふむ…よくあつまってくれたのぅ…先にこの問題の解決法を述べておくぞい？」

「ま、待ってください！解決法があるのですか！？」

「簡単じゃぞ？破滅と秩序と楔を持たせた魂を送るんじゃよ」

「……は？え、ちょっとそんな魂を簡単に送っていいわけがないでしょう！？」

「まあ落ち着け…俺達にその詳しい説明を」

「うむ、楔は魂がそこにあるだけでよいのじゃ　これ以上の次元が高くならぬように引き止める為のをな…秩序は不安定な世界をあるべき形に落ち着かせ、元の平行世界に同調させる」

「となると…破滅は？」

「問題の魂の築き上げたものを壊すんじゃよ混沌を正すためには相手の食指を潰さねばならんからな」

「これでは以前のアレに匹敵する大事件ですね…ところで何故僕らを？」

「他の連中が忙しいのとの……実はわし慌てて既に魂を送っちゃってておるんじゃ☆」

「「「……」」」

「……まぁ、そのなんじゃ？ただわしの好み丸だしに世界を同調させてしもたし…魂がその力を生かすためにも仕方ないんじゃ」

（絶対に嘘だ）

「とにかく送ったのはいいんじゃが、１人だけで押さえられる相手じゃないのは明白　わしの好みを知るお主らの力を借りたいのじゃなに、お主らもそれぞれ力を与えてやってくれればいいんじゃよ」

「わかりました…ただ相手のポテンシャルは高過ぎて魂１つでは無理でしょう？」

「我々は複数送ることにしますよ」

「まぁ敵対して互いに潰し会うかもしれませんが魂が磨かれればそれだけ標的を倒せるかも知れませんしね」

「よかろう…では、始めるとしようかの？」

そしてまた静寂だけを残した白になる

分を超えた魂が世界を歪めてしまうのか

それとも修正力に代わり、世界を正すのか

彼らは魂がいかなる思惑を巡らせているのか把握せぬままに想いを託してしまう

それが行き着く結末は…

それは一人の転生者から始まった（後書き）

オリキャラたっぷり出ます

オリジナルスタンドたっぷり出ます

原作スタンドはたぶん出ます

とりあえず今あるだけ投稿して続きが読みたい方がいるなら続くかもしれません

話は短くしちゃうので長い話はきっと来ないかも

ああ、第5部読みたくなってきた

藤城譲一は静かに暮らしたい（前書き）

きっとこの作品に正義はないかもしれない

藤城譲一は静かに暮らしたい

かつての俺はそりゃすさまじいほど救いようのないクソガキだった
両親を早くに亡くしていた俺は寂しさの反動というか、恥ずかしいくらい被害妄想の激しい中二病まっしぐらに暴れるガキになった

気づけばお陰で札付きの不良になって恐れられた
警察だろうとなんだろうと俺を止めることなんてできやしねぇ
そう考えていた

だから俺は最悪の事態を招いたのだ
あんまりにも暴れすぎたらしくぶちギレた組長の部下が集団で俺をフクロにした

で、俺は限度ってものを知らんバカだったせいで反撃
結果一人を誤って殺害
お仲間は皆ぶちギレてさらに凶器持ち出す始末
ただの不良が勝てるわけなくあえなく俺はリアルにコンクリ詰めにされてどっかの湾に沈められた

とまあ俺は死んだはずなんだがなんかやたらジョジョ好きの神らしいじいさんによって無理矢理転生させられた

正直嘘みたいな話だが、今度は両親という厳しくも暖かい存在に大切に育てられてるんだから嘘じゃあない

だからこそ俺は決めたのだ

前世のようなアホみたいな生き方ではなく静かに、穏やかに生きるのだ

ごくごく普通の人生だ

神のじいさんがスタンドあげるとかリリカルなんたらだかの世界に送るだとかそんなことはどうだっていい

喧嘩ばかりやったりスタンドなんて貰って強くなったって疲れるだけ

そう、この何気ない平和がどれだけ素晴らしいか俺は理解したッ！

小心者の如くひ弱に腰を低くッ！へいこらするッ！

俺の琴線に触れない限り極力争い事はパスする！

あまり目立つことなく、他人を盛りたてて俺は影でこそこそちまちまするのだッ！

転生して9年、聖なんたら小学校の3年生になった俺は今日も地味に静かに過ごす

学校の名前？んなものは覚えんッ！

クラスが変わるということ…まずすべきはよりよい友人作りだろう

これに関してはクリアだ

去年の友人がそのまま居たのでいつも通りの振る舞いでいいだろう

ただこのクラス、一つ懸念事項がある

「なぁ譲一ぃ…俺、正直今年外れだと思うんだ」

「まぁ…そうですよねぇ…」

友人のおっ君とヒソヒソ話すのはある人物の話題

視線の先の席にはキザったらしく座っている少年が

窓際の方に無駄に背の高い、小学生にしてはおっかない雰囲気を出す少年

二人とも正直言って俺は仲良くなろうと思えん

キザな方は富出　庵

なんかやたら優秀で一部の女の子にご執心な変態だ

天才というのかテストは満点、運動神経も高く、ルックスも良し、
カリスマ？みたいなのがあるのかある程度の人望を持つ

態度というかいろいろと気持ち悪いというか俺は嫌いだ

他者を何処か見下したような印象が強いし、一部の女子に嫌がられ
てもへこたれない変態っぷり

というかストーカー

もう一人は矢口　亮

精悍さと幼さの混じった変なやつだが芯はしっかりしてる

不良予備軍みてぇな奴だが困ってる人とかを黙って助けたりするお
陰か地味に回りから好感を得ている

俺からしちゃぁ近寄りがたい雰囲気もあるがまぁ一番の原因は単純
に仲が悪いような感じなんだよな…

去年一回喧嘩しちまって謝らないままずるずる過ごしてきたからその罰だってか？

男子の騒ぎの種は奴らだが女子を見れば学校内で有名な美少女が揃っていてきっと厄介事に困らないな

と、見てる先でいきなり富出と矢口の喧嘩が勃発

だが矢口が逃走、追いかける富出

「はぁ…最悪です…」

俺はこのまま静かに生活出来んのか？

先行き真っ暗だ畜生

いや、小学生だから仕方ない…のか？ガキは元気に走り回れ

俺は授業が始まるまで寝ることにするのだった

「おい…おい譲一！」

「…ん？」

なんか延々と体を揺さぶられて目が覚める

いったいなんなんだと思ったらそこには先生が

回りの状況を見るともう授業が始まっていた

居眠りしていた俺に注目の視線が突き刺さり肩身が狭くなるどころかサァーと血の気が引いてしまう

俺はやってしまった…最悪の形で目立ってしまったのだ

お決まりのように席を立たせて小学生にしては難しい問題をわざと解かせようとする先生

わざと間違えればクラス中から笑いが来るし、正解を言えばなんか嫌な予感がするのだ

だが笑われるのは嫌なので俺は正解を言った言っちゃった

で、やっぱり一部の視線が強烈に痛くなるわけで

畜生ッやぶ蛇かッ！？

くそったれめ…気分が少し悪くなりながら俺は席についた

…ちょっと先生が悔しがってるのが見えたときはいい気味だったが

「…すごいね藤城君」

「ん？ああ、あれくらいなら僕じゃなくても解けますよ…バニングスさんとか」

隣にいる月村すずか女史にヒソヒソ話しかけられたので俺もヒソヒソ返す

月村とはよく話すというか俺の数少ない女友達だ

ただ話すたびに富出からすげぇ殺気のこもった視線を叩きつけられて不愉快だ…

俺が何をした？

まぁ今日もなんやかんやギリギリ平穏な日常を過ごすのだった…

「と、綺麗に終われたらすごい楽だったのだが僕の日常はあっさりぶっ壊されるのでしたまる」

「あはは…」

「「「「？」」」」

親から許可を貰って泊まりに来た友人の家

とりあえず誕生日らしかったので一泊して行ってあげることにしたのだ

友人の名は八神はやて

出会いに関しちゃ、図書館で本をとってあげたのが切欠でそこからグダグダ仲良くなった

というか仲良くなりすぎたというか、はやての前ではあまり猫を被らないぐらいか

騒ぎまくってゲームしてアホみたいにへらへら笑って寝たはずだったが突然家のなかに違和感を感じてはやての部屋に直行、気絶したはやてと４人の男女がおろおろしてた…

まさか、こんなところで厄介事に出くわすとは…

車椅子の少女、八神はやてと友人だったスタンド使いの転生者藤城譲一

俺の平穏は約束されないらしい

くそったれめ

藤城譲一は静かに暮らしたい（後書き）

どうでもいいがシグナムあたりが好きだ

ポニーテール萌え

おろおろあたふたしてくれればさらにいい、サノブ的に

もしかするとこの作品の吐き気を催す邪悪はサノブ本人かもしれない

矢口亮は考える（前書き）

こいつのヒロインはどうなってしまうのだろう

矢口亮は考える

俺の名前は矢口亮

運悪く車に跳ねられた筈だったが何だか小柄な男性に妙な頼まれごとをされて転生者だ

世界を守るというよりバカが招いた尻拭いの代行をさせられているような感覚があるにしてもだ

人間全員が神になるとか恐ろしい事態を防ぎたいのは同意する

別にいいんじゃないか？と思っていたが

「全知全能な外道が溢れるかもしれないよ？」

とのことで、転生を決意した

それに何も戦わずともただ生きているだけで充分らしい

それでもこの手に入れた力がある以上戦いからは逃れそうにないがな

他にも転生者がいるらしいがよっぽどのことが無きゃ初見は分からない

漠然と俺達と同じ力があるのは分かるのだが己の欲望むき出しで襲いかかるアホもいるから仲間を簡単に増やせないし…

何より俺は少し人見知りしやすいし、そんな性格が祟って藤城との喧嘩した後の和解が出来ないまま過ごしてきた

そんな中、俺に人生の転機がやってくる

高町なのはとフェイト・テスタロッサ

この二人の邂逅だ

確かこれはリリカルなのはの世界…ならばこの物語に問題の相手が現れるのでは？

そして読みはあたる

原作はあまり知らないがいくらなんでも奴は存在していなかった

富出　庵

高町なのはに馴れ馴れしく関わろうとしたのを見たときいつものバカな転生者かと思われたが強さの次元が違うこととスタンドが無いことに気付いた

二度目の生の為にめちゃくちゃにする奴を倒さなければならない

だからもう一人の魔法少女、フェイト・テスタロッサと協力したのだ
もしものためにと神より貰ったデバイスを駆使して何度も挑んだ

が、結果は全てが惨敗

後で友人になったクロノには何度も命を助けて貰ったな…

加えて、原作を掻き回そうとするただのバカやバカ富出がなのはやフェイトに手を出そうとする

こいつは変態だ

どうしようもないほどの

原作はなんとか俺の知る流れに進んだ

ただ一つの誤算が富出の力だ

プレシアが生存したのだ

病を治して評価をあげようという魂胆が丸見えで回りの反応は大したことがなかったのは唯一の救いだろう

しかし、ますます富出を倒せるかわからなくなってきたな…

ここは勇気を出して他のスタンド使いを引き込むしかないな…

転生者全ては富出を倒す力が宿っている…その形としてのスタンドだろう

そしてこいつは富出を倒す鍵になる…何故ならスタンドはスタンド使い以外には見えないという特性がある

一度俺のスタンドを使ったが奴は気付かなかった…

奴にも見えるのではないかと思ったがそれは以前の戦いで分かっている

問題はいかに攻撃を通すかだ

正直、吸血鬼並の頑丈さと大量に張られたバリアが生半可な攻撃を打ち消してしまう

俺のスタンドはダメージを与えるに至っていない

「ままならないものだな…」

「？どうしたの？」

「なんでもねぇよ」

「む…なによ！その態度、人が心配してるのに」

「…わりぃ」

「そうやって素直に謝ればいいのよ　最近、しかめっ面ばっかで何かあったか心配になるじゃない」

「しかめっ面って…うん、大丈夫だからアリサ　ありがとう」

……アリサが毎回突っかかってくると疲れるから嫌なんだよな

アリサによって疲れるんじゃない

心配されてるのは別にいいんだが、必ずバカも突っかかってきやがるから

「おい矢口！！」

「あぁ？」

正義感（笑）に触れたのか憤慨しながらこっちにくるバカ富出

ドン引きするアリサ

嗚呼、頭がいたくなる

「俺のアリサに色目使いやがって！死ねッ！」

「ちょっ！？」

正義感（笑）ですらないしなんなのこいつもぅ

魔力のこもった腕を振り上げてくるバカを見てギョッとする

お前、ここでスプラッタ起こす気か！？

回りの目とかちゃんと考えろクソヤロウ！

机を蹴飛ばして富出の出鼻を挫いたあと、アリサとすれ違う瞬間に小声で話す

「ちょっくら逃げてくる」

「はぁ…頑張んなさいよ」

「待てェッ！矢口ィッ！」

やれやれ、世界とか秩序とか歪みとか抜きで個人的にぶっとばしてやりたいよ

今日もいつものように富出を倒す為の計画を練りながら俺は逃げるのだった

そういえばフェイト達はどうしているのだろうか？

ビデオメールをこっそり俺のデバイスに送ってくれているが最近はプレシアに甘えてる日々のようだ

今まで出来なかったことが出来てはしゃぎすぎだろうに

クロノが根回ししたお陰で引き離されることが無くなったのもあるからか？

さて、さっさとこの馬鹿を撒いて俺は俺のすべきことをせねばな

しかし気持ち悪いくらいズルい身体能力だな

それと誰か馬鹿なスタンド使いがちゃっかり殺してくれないだろうか？

まぁ皆素通りして俺ばかりに挑んでくるスタンド使いばかりでそんなことあり得ないか

次は確か闇の書に関する話だったか？

出来れば始まるまでに奴を仕留められるといいな

その為にはある程度暗躍するしかないな

たとえフェイトに嫌われることになっても

矢口亮は考える（後書き）

譲一、亮のスタンドは決定してます

両者ともオリジナルスタンドです

後は敵キャラにオリジナルスタンドや原作スタンドをあてがってやる予定です

余談だけどはやても好きだ

シグナムと一緒にいられる彼女に嫉妬もするがそれでも好きだ

たぬきかわいい

たとえなのはとおはなしすることになったとしても譲れないのです

チンクもちっちゃいお姉さんとかもいいね

シグナム、はやて、チンク

節操のないサノブは小指を角にぶつけて死ぬに違いない

こんなカミングアウトしてるのは仮面ライダーのゲームのデータを
誤って消しちゃったからなんだ…くそがっ

富出庵ッ！俺こそがこの物語の主人公ッ！（前書き）

人は他人の物語の主人公にはなれない

富出庵ッ！俺こそがこの物語の主人公ッ！

やぁ諸君

俺の名前は富出庵！

この物語の主人公さっ！

いや、ちゃんと言えば転生者のオリ主か（イレギュラー）

かつて惰性で生きていた俺は家でいきなり強盗に襲われて死んでしまったはずなんだ

だが、神を名乗る人物にかつて神々の間に流れる話のような伝説を打ち立てたいといきなり言われて転生しないかと言われた

しかも出来る範囲でならいろいろと力を授けてくれるそうだ

これはよく二次創作のテンプレというやつじゃないかッ！？

だとしたらこの条件を飲み込まないわけがないじゃないか

転生先も自由に選べる…ならば俺はかつてないほどの幸せを手に入れるのだ

転生先は魔法少女リリカルなのは…

身体能力、魔力を最強クラスにして動体視力も人間離れしたものに

ついでに黄金律、幸運をＭＡＸにしてやる

少し俺の隠し札としての能力を２つ加えて、最後に神様謹製、俺専用のデバイスも作って貰った

さぁ、俺の物語（ハーレム）が始まるッ！

と、思ったが最初は四苦八苦した

仲良し３人娘のアリサに蹴飛ばされたり、すずかに逃げられるし…

なのはと出会い、俺も協力するぜっ！みたいになのはの頭を撫でたらまずユーノにバインドされ転がされた

で、ユーノのせいで振られた俺はフェイトと仲良くしようとした

こっそり確保したジュエルシードを手土産に行けば行けるッ！

なのにいきなり戦闘とか

あの、フェイトさんすごい強いんだけど

このチートボディがなければ5回くらい死んでた

というかアルフが本気で殺しにかかってきてマジビビったなにあれこわい

結局、紆余曲折あってなのはサイドについたのだ

俺に足りない戦闘能力をなんとか養いながらその時が来た

……なんとフェイトに悪い虫がついたようだ

フェイト、アルフと共に居ない筈の紅い少年がいた

剣のような斧のような槍のデバイスを携えているフルフェイスメットの少年が

俺と同じイレギュラー…まさか奴もハーレムを狙う転生者？

フェイトやアルフが警戒しないのはまさか奴がなにか洗脳まがいのことでもしたのだろう

だとしたらなんて外道なんだ

俺が彼女を守らなくてはならない

生憎と奴の魔力は俺には及ばない

いろいろと戦闘経験をつんだ俺の敵では無いわ

お陰で圧勝した

が、依然として正体は分からず、時間稼ぎになのはフェイトと引き離されたりなのは達を無視して俺に挑んでくる

少しずつ強くなっているが俺の敵ではない

そしてどうも奴は俺を殺そうとしていることに気が付いた

何故殺されねばならん?俺は怒りに任せて痛め付けていく

だが奴は諦めずに挑んでくる

「貴様ぁッ!やはりハーレムの邪魔になる俺を殺す気かッ!」

「ハーレム?そんなもの知るか」

槍を叩きつけてきたので負けじとこちらもデバイスを振り上げる

つばぜり合いになり腹を蹴り飛ばして吹き飛ばす

そこに大剣と銃が合わさったデバイス、カオスキャリバーで追い討ちをしようとしたときだ

何か黄色い影が紅を連れ去り、攻撃を避けられた

「大丈夫!?」

「…肋骨を折られたがまだ…」

「ダメだよっ!無理に動いたら骨が内臓を傷付ける!だから一度退こう?」

「……だが、ジュエルシードは」

「それならフェイトが手に入れたよ!こんな化け物に構ってないで早く行くよ!」

アルフも庇うように合流すると少年を労るように転移して逃げられた

馬鹿な…フェイト達に受け入れられているだと?

いや、きっと何かあるはずだ

俺の時のように異物は排除されるに違いない

やはり洗脳か…許さない…

俺はいずれ奴を殺して見せる

そのあともぶつかり合い、やがてクロノと出会う
しかしまあ紅い少年がフェイトを逃がしたのはいいがあっさり奴の交渉に頷きやがって
紅い少年を殺すチャンスを失い、奴は投降
武装は解除したようだがメットは外さないらしい
ふざけてんのかあいつは
「…君も、殺傷設定でさっきから彼を殺そうとするな」
クロノ…お前覚えてろよ？
いつかお前の未来の嫁さん寝とってやる
そしてだいたい原作通りの流れに進んだ
馬鹿な…俺達イレギュラーがいるのにこんな簡単に進むのか
……こっそり確保したジュエルシードの時は俺に対する抑止力が働いたくせに彼女らが行くと原作の強さか

そして最終決戦プレシア戦…といきたいが

通信の時は原作通りにならずになんかすんごい穏やかなんだけど？

フェイトはそれでも心が壊れかけたが、プレシアの一言に再び立ち上がった

「彼に伝えて…私は行くと…」

「ダメっ！行かせない！」

え？なにこの展開…

……あいつの仕業か！

崩れかけたフェイトを慰めてポイントを稼ごうとしたのに台無しにされた…

待てよ？まさか奴はこれを見越してプレシアを改心させたか！？

どこまで邪魔をする気なんだ奴は！？

いや、まだ俺のある力を使えば…

俺はフェイト達に続いて時の庭園に向かった

プレシアは確か病でそう長くはない…
元々はなのはが怪我で倒れる時のために得たがこんなときにも使えるとはな

「プレシア…娘を置いていくなぞ俺は許さん！」

「な、なんなのあなたは…」

虚数空間に落ちかけたアリシアとプレシアを引き上げて無事な足場に逃げる

そこで俺は俺専用の回復魔法を使う

「アヴァロン！」

名は某騎士王の鞘からとった！

黄金の輝きがプレシアを包み体を全て治して一度アースラに帰還した

アヴァロンは俺の魔力を大量に使う奇跡だ

魔法で対象の生命力と免疫力を上げで回復させる

原理は知らんがそう言う効果だ

対象は完全に回復する…死んだものは無理だが木っ端微塵になる手前だろうとこの奇跡の前には無意味よ

魔力をごっそり使ってしまったせいで眠ってしまうのが欠点だがな

……その欠点のせいで結局、最後の別れのイベントに参加できなかった…畜生

聞いた話によると紅い少年にフェイトが抱きついたとかなんとか

……次に出会ったら奴はぶっ殺してやる

全ては俺のハーレムのためにな！

さあ今日はアリサにフラグを立てようかな？

次の闇の書の前に出来るだけフラグをたててハーレム計画を推進することにした

クラスメイトの矢口がなんか紅い少年に被って見えて思わず魔力込

めてぶっ叩きそうになったのは余談だ

富出庵ッ！俺こそがこの物語の主人公ッ！（後書き）

こいつは出来れば愉快書かせたい

こいつは馬鹿にしまくってくれ強いけど

まだ悪に染まりきっていないけれど、黒く染まっていく予定

ただどこかギャグキャラ感がするんだ…なんでだろう？

こいつの性格上譲一、亮と相容れないと思います

独善的な思考があるので自らが悪と気づいてません

プッチ神父タイプかもしれません

転生者目録その1（前書き）

あまり役に立たない人物紹介

転生者目録その1

静かに生きたい転生者

藤城譲一（ふじしろじょういち）

スタンド使いであるが他人にその本体を見せたことはない

やんちゃばかりしてた日々と決別して静かに生きようとする

小学生ボディでも身体能力が高く、前世の喧嘩の経験があるため本体自体が強い

デバイスとか無いから魔法に関しては素人、原作知識も無い

普段は柔和な笑顔を浮かべて優しいしゃべり方をしているが、実際はチンピラ

作者の脳内イメージはブレイブルーのハザマに近い

若干吉良吉影っぽい

名前は城、譲でジョジョとしてるが別にジョースターの血統じゃない

でもこの作品の主人公

考え続ける転生者

矢口亮（やぐちあきら）

背が高く精悍さと幼さの混じった感じがするスタンド使い

他に大槍型デバイス、ブルーブレイズを所持

紅いのにブルーブレイズなんていうのは青い炎というより地獄って意味だから

槍は半ばからばっくり開いて相手を挟み込みバラバラに出来るというえげつない隠し機構がある

なんかフェイトとフラグをたてているのは薄々感づいて居るものの目的の為なら傷付けることさえする

きっとなのはとフェイトによっておはなしするであろう

むしろするなこいつは

合掌

弱くないんだけど富出がチートだから勝てない

スタンドの可能性に賭けるしかないね

原作知識を少し持っているが、Ａ'ｓの次があることは知らない

この作品一の苦労人になるかもしれない

名前はノリで決めた

主人公その２

主人公であろうとする転生者

富出庵（とみでいおり）

天才だけどバカ

スタンドは居ないが人間離れした身体能力、魔力チート、視力最高に黄金律、幸運ＭＡＸの変態

勘違いとかどこか考えが抜けてたり、思慮が足りなかったりと天才なのか疑わしいのだが天才なんだ許してやってくれ

まだ小学生のなのはに欲情してるかもしれない危険人物

いつか真っ黒なシスコン兄貴に切り捨てられる気がする

大剣型デバイス、カオスキャリバーを所持

剣の中心に砲身がつけられている

デカイので盾にしたりすることは可能

本人は大量のバリアと魔力が壁になっており基本的に盾にすることなんてスターライトブレイカーぐらいしかあり得ない

原作知識を持っているため大分危険

ラスボスになる…かもしれない

名前は出、庵のでいおからディオと読めなくもないというかなんというか

既に高町なのはという主人公が物語に据えられているのに物語の主人公になれると本気で信じている

見るに耐えないだろうが、とりあえず彼は生暖かい目で見舞ってやればいい

転生者目録その1（後書き）

これにて簡単なプロローグは終わりです

静かに生きたい譲一

強者の抹殺を企む亮

欲望のまま力を振るう庵

転生者の戦いは彼らを軸に動きます

続きがあれば、ですが…

で、気付いた方はいるかもしれませんが

庵が転生者した後に何故、他の転生者が物語（リリカルなのは）に滑り込めている？

という謎現象があります

話に絡まないのでここで説明します

本来は庵がただ辿る話を神々が巻き戻し、庵が生まれるのに合わせたり、庵より1、2年早く生まれさせています

スタンド使い達はバイツァ・ダストのように時を吹っ飛ばされて生まれているのです

転生者達はその事実に気付いてないので庵が生まれて間もないうちに殺すことが出来ないのです

というか神々よ、出来ればもっと前に生まれさせろよ

が、庵によって歪んだ世界は転生者達に修正力として牙を向き、結局原作の年代を生かされる羽目になります

そんなことより俺達も原作介入だうへへ

そういった転生者は矢口亮がことごとく撃退します

よって転生者達の間では亮って抑止力じゃね？なんて噂も

強さでは上位にいるので転生者達は以前よりは喧嘩を売ってないのが現状

そんなことを露知らず庵は今日もなのはやアリサ、すずかの尻を追い掛けて

譲一はおっ君こと、おくやす君と子供らしく遊ぶ…

闇の書はそんな日々を変える

そんな感じなんですけどこれ続き期待する人いるのか？

受難の始まり（前書き）

藤城譲一編？スタート

ラッシュの掛け声どうしよう？

受難の始まり

ＳＩＤＥ　譲一

突如、はやての部屋に現れた４人の男女

部屋に飛び込んできたらピンクのポニテねぇちゃんに斬られそうになったり、幼女にハンマーでぶん殴られそうになったり、はやてが気絶したり部屋の中は大混乱になった

なんとか事態を治めて居間に移動して４人を見る

その時ある一点に俺は視線が止まった

「……いぬみみ？」

「…狼だ」

いや、だってさ、ガタイのいいにいちゃんの頭に獣の耳があるんだぞ？

触ってみたいが、なにか危機感を感じやがったかさりげなく距離を

とられた

「なにアホなことしようとしとるん？まずは話聞かんとな…触るのは後や」

はやてには俺の行動がばれていたらしい

そしてけもみみ男はさらに距離を置かれた

はやてが質問していくとなにやら魔導書やらなんやら言ってたが俺にはそんなもの知らん

わかったのはこいつらはその魔導書なんてものから生まれた守護騎士、ヴォルケンリッターというらしい

こんな異常な現象を見ていてふと考えを巡らす

……確か俺が転生した先ってなんかの物語の中なんだよな？

まさか俺は結構大事な部分に頭突っ込んでるんじゃないよな？

だとしたら俺の平穏な生活に支障が出てしまう…どうしたもんかな…

「とうっ！」

「ぐはっ！？みぞおちがぁぁ……」

いきなりはやての鋭いボディーブローが突き刺さる

畜生、なかなかいいパンチ持ってるんじゃねぇかはやて

顔をあげると何故か私、怒ってますよ?という表情が

「えっと…なんかしたか俺?」

「さっきからぶつくさ考えてばっかでウチの話聞いとらんもん!」

「わ、悪い、すまんかった」

「譲一君、さっきも言ったんやけど新しい家族の為に明日買い物いこうな?」

新しい家族?ああヴォルケンリッターね

確かにさっき家族に迎え入れるって言ってたしな

はやてには両親を早くに亡くしたから彼女らの存在が嬉しかったんだな

ん?

「あの、はやてさん?その言い方だと僕まで行くことになってません?」

「そうやよ?なにボケとるん?あ、譲一君の御両親には暫く借りるって連絡したんやけどＯＫ貰ったで?」

おいまてお袋に親父!

いったい何してるんだあの二人はぁッ!?

携帯を開いて文句の電話をかけようとしたら新着メール一件と画面に映っていた

差出人は藤城譲治

「親父…ま、まさかな…」

固まった俺を見てはやてが後ろから覗きこんでいることすら気にならない

恐る恐る読んでみる

『譲一、パパとママはちょっくら旅行に行ってくるぜ!

たぶん来年辺りにゃ帰ってくるからお土産とかあったらメールくれよ

あとはやてちゃんとは末長く幸せになこのリア充野郎

追伸

孫は出来たら3人くらいほしい

』

「あのくそスケベ親父がぁぁッ!?ド畜生ッ!なんでいきなり旅行なんだ!?訳がわからねぇ!つうか孫ってなに!?小学生になに期待してるんだ!?」

有り得ねぇ、いつもながら厳しく優しい反面、頭に蛆がわいてんじゃねぇかと何度も思ったが確信した

こいつ、俺が平穏な生活を望んでいることを知っててやってるんだ

確信犯、俺の日常を脅かす敵はもっと身近にいやがった…

追伸とかマジいらねぇし

はやてが俺を借りるということは彼女の家に居候しろってことか?

そもそも旅行とか馬鹿だろあの野郎め…

いろいろと憤慨しているときに後ろにいたはやてに袖をくいくい引っ張られる

「…譲一君…

不束ものですがよろしくお願いします」

「はやてェェェーーッ!?なにいってるんだお前はァァッ!?」

顔を赤らめ、上目遣いで言う破壊力は高かった…

じゃなくてだ!

俺は貰わないからな!?

百面相を見せる俺

顔を赤くするはやて

俺の叫びにビックリするヴォルケンリッター達

場はせっかく治めた筈の混沌に再び包まれていたのだった

翌日、早朝に自宅に帰るとマジで親がいないことにメールの内容が本当なのだと理解してしまう

とにかく財布と俺宛に残された小遣い、学校の道具その他もろもろを纏める

旅行に行かれたのなら殴ることも出来ないので俺は大人しくはやての家に厄介になることにした

「はやて、これからはあんなことを言ってはいけませんよ？そもそも僕らそんな年齢じゃありませんからね」

「うー…譲一君が説教しとる…譲一君の癖に」

「とにかくまず最初は服ですね…」

ヴォルケンリッターをいつまでもあのインナーみたいな姿で生活させるような鬼畜じゃない

ましてやはやてがデザインしたあの服のままで生活できんわ

一先ず、はやての両親の服が残っていたのでポニテねぇちゃん、シグナム、金髪のシャマルはそれで事足りた

ハンマー幼女ははやてのお古を着せている

残るはザフィーラなんだが姿が見当たらない

皆で今から着るための服とかを買いにいくのにどこに行った？

「ああ、ザフィーラなら」

「呼んだか？」

「うぉぉぉ？しゃべる狼だ…」

「…守護獣だ」

ソファーの影から青い毛並みの大きな狼が現れた

しかし、ホントに狼なんだな

毛並みフサフサ撫で心地いいなおい

「ザフィーラは普段はこの姿でいいって言ってくるんや」

「ふむ、はやてのお父さんの服とかあるから問題ないのですが…」

……黒い話をするとその分お金使わなくて済むんだよねぇ

まぁ、ザフィーラはそれをわかってて言ってそうな気もする

でもちょっとかわいそうだからこっそり買っておいてやるか

「それじゃあ、買い物にいきますか…はやて、ヴィータ、ちゃんとハンカチは持ちましたか？ティッシュは？」

「持ってるで！」

「おい！子供扱いすんな！」

「向こうに行ったとき余りはしゃがないでくださいね？今からいく場所は広いので迷子になったら探すのが大変ですから」

「譲一君、まるで保護者みたいですね」

「……そうだな」

シャマルの言葉の受けごたえに変な間があったな

「シグナム？どうかしましたか？」

「いや、なんでもない」

？？変なの

ま、何はともあれちゃっちゃと買い物をすませちまうとしようかしかし、昨日はどうなるかと思ったがなんてことなかったな

はやてが気絶したときに担当医の人には遠い親戚とか大分無理して話してしまったがなんとか押し通した

変に騒がれるような真似をしたら最後、本当に平穏が終わっちまう

はやてが家族として迎え入れるならそのまんま生活してりゃなんの問題はないんだから

はやての日常が明るくなった

ただそれだけのことだ

シャマルがはやての車椅子を押してヴィータと仲良く話している

うん、はやてめいい顔で笑うじゃねぇか

暫くははやての家に厄介になるんだから彼女の笑顔を絶やさないようにしないと

そんなことを考えながら歩いているとシグナムが歩幅を小さくしながら俺の横にならんだ

「どうしましたシグナム？はやて達と話をしないのですか？」

「今はヴィータとシャマルが話しているさ…それにしてもそのしゃべり方に違和感があるぞ藤城」

「まあ、意識してこんな柄じゃないしゃべり方してますからねぇ…
他人にはさらに猫被りますよ?」

「疲れないのか?もっと自然なしゃべり方をすればいいだろう」

「僕のは他人に喧嘩を売るような汚いしゃべり方なんで、無駄な争
いを起こさないようにしてるんですよ　学校じゃ素のしゃべり方
で因縁つけられましたし」

「なんだか大変だな…余りにも違和感がありすぎて気になったのだ」

「自覚してますよ、僕らしくないしゃべり方の違和感ははやてには
素の自分を明かしたあとに笑われましたから」

あれは酷かった

指差して大爆笑とか失礼にも程があるだろうがよ普通

今でも内心笑ってそうだよなほんとに

「藤城…なにかお前のあとをつけてるような奴がいるぞ?」

昔話に和気あいあいとしてたらシグナムがぼそりと呟く

ちらりと近くのショーケースに写る街並みをみて確認する

一人の少年が何かこそこそしながらついてきているのが見えた

また、か…

「シグナム、彼は僕の友人です　先にはやてと行っていてください」

「友人なのか？」

「きっと見かけた僕をビックリさせたいのでしょう　大丈夫ですよ今からいく場所は僕もわかってますから…さ、早くいかないとはやて達とはぐれてしまいますよ？」

「……そうか、では、な」

シグナムが先に行くのを見て俺は横の路地に向かって歩き出す

そして俺は走り出した

「ついてきているな？そうだ、こい…くるんだ　思う存分振るえる場所に行ってやるからよォ」

走って走って出た場所は少し開けた空き地

回りに人の気配は無いな…ならここらでいいか

足を止めて後ろを振り向いた先には

視界を覆うように目の前をドラム缶が高速で飛び込んできていた――

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

受難の始まり（後書き）

こないだ野良猫見付けて転がして撫で回してやっつけたら靴で爪研がれそうになった

貴様、反撃かぁぁぁぁ！！！！

プロローグは短くしようとしてああなって

本編だと普通に３０００文字を越えるのか

欲張って５０００文字以上をいつも書けるようになりたいです

中身がスカスカだったら意味ないんですけどね…

次回にはスタンドバトルをば

この作品もしかしたら間違ってザフィーラの出番たくさんでるかもしれません

そのうち主人公の座をザフィーラにとられたりして

アルフとザフィーラの子犬フォームを転がしたい

オリジナルスタンドとか敵転生者とかただの日常で普通に出会う転生者とか募集します

敗北、または敗死の様子も考えてあるなら書いてくれるといいです

どうでもいいけどメタリカ使ってみたい

風景と同化するとか覗きに最適じゃないかッ！

あ、なんだかエアロスミスがこっちに飛んで……

傷だらけの青玉？（前書き）

スタンドバトルって書いてみてわかったけどすごい派手にはいかないな

というかこれはスタンドバトルじゃないな

予告しておいて申し訳ございません

前後編に分かれるよ！

傷だらけの青玉？

「どうだ？やったか？」

空き地に少年が１人

土煙の上がる場所を見守る

少年は転生者だ

神々に力を与えられ遣わされた使徒

だが、彼は己に課せられた使命など生まれたときから放棄していた

その身にある黒い想いを内包した彼は物語に介入しようと動き出した

しかし、彼はある１人の転生者と戦いになり、破れ、目が覚めたときには真っ白な天井を最初に視界に入れていた

介入することはできずに終わった――

第二の生を受けて、使命を捨てて、想いを叶えるべく奔走した彼はなにも成し得なかった

「くそっ！何が失せろ外道だ！許さねぇ…あいつは許さねぇ！」

彼は考える

己を打ちのめした相手を倒すための手段を得るために

そこで彼は気付いたのだ

「そうだ…八神はやて……守護騎士達に任せれば奴を、奴を確実に始末出来るッ！ククククッ！よし、早速行動開始だ」

だが、彼は見てしまうのだ

街の中を仲良く歩く八神はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル

――藤城譲一を

「なんだ、なんだ？誰だあいつは？いや、あいつ、確かなのは達のクラスにいた気がする…あんな地味な奴がなんで一緒にいる？……まて、なんであんなに親しく歩いていやがる？あいつはまさか…！」

シグナムが先に行き、藤城譲一は横に歩いて行った

どうする？ただのモブキャラかもしれない…あいつは帰るのかもしれない

だが彼の中の不安が譲一を追い掛けろと命じた

追えば彼の存在に気付いていたのか、譲一は駆け出す

やはり奴は転生者だ！

しかもはやて達に近付いたのはやはり欲望のままに生きようとしたからに違いない

結論付けた彼は立ち止まった譲一に殺意を沸かせた

（先手必勝！死ねッ！）

「フライングジャズッ！」

少年の傍らより現れた羽毛を生やした小さな人型が近くのドラム缶に触れると凄まじい勢いで譲一に目掛けて飛んでいく

当たる直前にこちらを振り向いていたが対処するには遅すぎるし、逃れようがないだろう

砂塵をあげるほどの轟音をたててドラム缶は落ちた

そして冒頭のセリフである

（飛んでいったドラム缶は高速を走る３ｔトラックに引かれるのと同じ威力だッ！後ろを向いていたお前が今さら振り向いて何かしようとしても遅い！だが、俺の心は奴が死んだと納得していない、さあ早く死体をさらせ！）

「いきなりドラム缶が飛んでくるなんて…怖いですね」

「！」

土煙が晴れた先には、バラバラになったドラム缶の上に座る譲一の姿があった

傷も汚れもない彼は一目で無傷だとわかる

そして余裕とでも言わんばかりに不適な笑みを浮かべていた譲一を見て少年は舌打ちした

その態度に怒りを沸き上がらせていると譲一は少年に話しかけてきた

「こそこそつけていたようですが、何のようでしょうか？」

命を狙ったのになんともまぁ白々しい奴だと不快感が走る

「…何のよう？攻撃したところからわかってんだろが」

「言い方を変えましょうか？はやて達に何か用があったのでは」

「それはお前を始末してからだ　俺の明るい未来の為にな！」

少年がポケットから取り出したのはパチンコ玉

ひとつやふたつだけでなく複数のパチンコ玉を手に彼は宙に放り投げる

これらは少年の武器なのだ

「蜂の巣にしてやるぜェェッ！フライングジャズ！」

パチンコ玉は全て高速で飛来する

その速さは人間を簡単に貫いて肉塊に変えてしまうだろう

それを見ていた譲一は

「……」

なんの戸惑いもなく、右手をパチンコ玉に振り上げた

「バカかお前は？生身のまま受けきるつもりかァッ！」

次の瞬間には右腕をパチンコ玉が粉々に粉砕する光景しか映らないだろう
彼はそんな光景しか思い付かない
普通ならばだが

視界の端に青い傷だらけの右腕が譲一の体に被って見え、気づけばパチンコ玉は音もなく砕け散っていった

「！」

「やれやれ…対話の余地もありませんね……少しは落ち着いてくださいよ」

あれだけの速さを飛んでいた筈のパチンコ玉が当たる直前に砕け散

ったなんておかしすぎる

（奴も何かしらのスタンドを使ったな？だが姿も何もなかった…情報が少ない…ただあんな芸当が出来たとしても俺がまだ無事ということは近接型か？）

少年は冷静に分析しようとする

一概には言えないがスタンド使いの戦いは自分の射程内にいかに相手を入れるかで大きく左右する場合が多い

少年のパチンコ玉は人を殺害する事の出来る破壊力はあっても実のところまともな攻撃手段がそれだけなのが問題だ

少年はまだスタンドによる戦闘経験が浅い

自分の能力をもっと工夫すればいいのだが、彼には未だに頭の中にはパチンコ玉を当てることしか考えていなかった

相手を分析しても彼は自分の攻撃手段が一つだけと考えていたから

「仕方ありませんね…」

譲一の攻撃が届くということを

避けなければならないことを

頭の中からその可能性を除外してしまった
直ぐに結論付けた為に

「スカーサファイアッ！」

「来るかッ！」

「ちょっとあなたの動きを封じさせてもらいますね」

「あ？何を言って」

少年は何か、変なものが見えた
譲一の右腕によく注目する
なにか、何か黒い線のようなものが走ってないか？
それがどんどん広がっている

「憑依型か？なら能力が強力と言うわけか！」

「まあ、自分で言うのもなんですが強力ですよ？」

譲一はこちらに駆け出す

少年は内心ほくそ笑む、自ら完全必殺の間合いに飛び込んできたのだ

外さないし、防げないはず！

腕から放たれたパチンコ玉は真っ直ぐに譲一の体に行くがパチンコ玉は何もなかったかのように消えていった

先程は砕けたはずなのに今度は何も無かった

攻撃に飛んでいた筈のパチンコ玉は一つ残らず消失したのだ

「は？え？」

「痛いのいくぞ？歯ァ食いしばりな」

目の前の現象に理解できずに振るわれそうになっている一撃に

「オラァッ！」

「ぶげェッ！？」

避ける暇なく顔を殴り飛ばされることとなった

顔に痛みが走ったと同時に地面を無様に転がる少年は奇妙な感覚がすることに気付いた

同時に何かがひび割れていく音が頭の奥に響く

「な、なんだ?思ったよりも威力が低い?」

「そりゃあ、俺の中に引っ込めて押さえたからな…さて、と」

顔を動かすと髪の毛をかきあげて、開いているのかわからない目が開かれその雰囲気が変貌した譲一がいた

いや、元の譲一に戻っていたのだ

逆立てられたような髪型に鋭い目付きは先程までの柔和な笑みを浮かべていた譲一とかけ離れている

もう勝負は決したといわんばかりに悠然に歩いてくる譲一に反撃しようとしてもがく少年

「な、なんだ?体が動かねェ?」

「テメーの体よく見てみ?」

「??な!なんだこりゃァァッ!俺の体がッ!ひび割れてッ!粉々になっているッ!?いったい何がどうなってやがるッ!?俺はッ!俺は一体どうなっちまってんだァーッ!?」

少年は己の砕けた体を見て絶叫するしかなかった

ハッとして自分のスタンドを見るもスタンドも同様にひび割れて砕けていたのだった

普通なら即死のはずが頭だけになっても生きていることに気付いた

よく見れば血も骨も内臓も全てが一切吹き出ていない

これは奴の能力が行動不能にしたのか

しかも丁寧にスタンドまで封じて

そこで少年はあることに気付く

「お、俺はただ行動不能にされたんじゃない……俺がこんな姿になっても生きているんじゃない……俺はこいつに生かされているんだ…こいつのスタンドに…俺の命はこいつが握っている…！」

「バカなりに考えたか…おめでとう正解だ　俺はテメーをわざわざ生かしているんだ　ちょっと能力を解除すればお前は文字通りここで肉塊になるが？」

生かすも殺すも俺はこいつの判断に委ねられてしまった…

あっさりと己の敗北と生死がかかったことに自分が格上の相手に挑んだのだと悟ったのだった

傷だらけの青玉？（後書き）

スタンドに関しては本格的に闇の書事件が始まる前にまとめます

闇の書事件が始まったらたぶん他の転生者はめんどくさくて事件には絡めないと思うので

事件に関係ないところとかはちょろちょろ出ますが

あとは空白期にはオリジナルの事件とラスボスを据えようと思います

あくまで予定ですが

ノトーリアス・ＢＩＧって完全撃破不能っていうけど振り返ってはいけない小道とか無限の回転とかＧ・Ｅ・レクイエムで攻略できないのかな？

やっぱり海に沈めるぐらい？

傷だらけの青玉？（前書き）

一応ジョジョなんだからラッシュの掛け声はオラオラにしました

無駄無駄も譲一には似合ってるんだけど…まぁ、察してください

オリジナルスタンド、転生者、引き続き募集します

傷だらけの青玉？

ＳＩＤＥ　譲一

弱い

その言葉が俺の頭を占めていた

いや、純粋に相手のスタンドは推理からして応用の効く便利なスタンドだ

しかもなかなか優秀なタイプのが、だ

俺が使っていたらいくらなんでもここまで盛大に負けはしないだろう

というか相手が原作に出てくるスタンドでも打倒してみせるね

そもそも普通なら自ら突然突っ込んでくる奴は相手のスタンド能力を攻略しうると判断した方がいい

もしくは能力が通用しないとも判断できるはずだ

些細なスタンド能力も使い道さえちゃんと考えりゃ強力なものになると俺は常に考えているんだが…

こいつ、まともに自分の能力の全容を把握しちゃいないどころかスタンド使い同士の戦いも理解してねぇな

強大な能力を手に入れてはしゃぎやがってアホが

間合いとかもちゃんと考えやがれ

ま、そんなことは今となっちゃ関係ない

「お前のスタンド、フライングジャズだっけか？大方、本体とスタンドが触れたものを吹き飛ばすんだろ？」

「な、なんでわかるんだ？」

「はぁ…適当に推理して鎌かけただけなんだけど？」

「なッ！」

ああ、ダメだ

こいつバカもいいとこだよほんと

自分でイエスとか言うなよ

「普通ハイとか言わねぇぞ？」

「こ、こいつぅッ！テメェこそなんなんだこのふざけた能力は！」

「大人しく言うと思うか？お前みたいな奴はスタンド使いにゃ向いてないな…テメーの持ち味も生かせないアホがいっちょまえに喧嘩売んじゃねェ」

名前も知らんガキの頭を掴み上げて俺と同じ視線に合わせる

「で？テメーの明るい未来の為に俺に始末しようとかほざいてたよなぁ？」

「う…」

「俺はな？静かに穏やかに生きたいんだよ　ただただ1人のクソガキとして平和に過ごす…だから俺は自分から喧嘩は売らねぇし、普通の喧嘩とかならこっちから額を地面にすり付けてやるさ　だがな？俺の日常を俺と同類（スタンド使い）が侵すってんなら話は別だ…」

「だ、だからなんだよ…」

「悪いがてめぇがはやてに下心丸出しなのは丸見えだぞアホめ」

「……」

……何をいきなりなぜわかったみたいな顔してんだこいつ

なんか会話するのが嫌になってきた

「いたんだよ　お前みたいに、はやてにちょっかい出そうとするドアホがな　はやては俺の友人で日常の一部だ　クソみたいな考えではやての日常を歪ませようとしてるてめぇは俺の敵だ」

「うげっ」

頭を落っことした後に面のすぐ横を殴り付ける

地面はひび割れ、陥没し、その光景に完全に顔を青くしていた

「殺そうなんて思っちゃいない…だが調子にのったら病院送りにしてやるから覚悟しな?あ、あと俺の存在を誰にも語るな　スタンド使いは引かれあうとはいえ…俺は一般人として生きたいからな　余計なことをするんじゃねェぞ?」

「は、はいぃぃっ」

とりあえず反抗したらボコボコにしてやるが今はいいか

能力を解除してやるか?俺は放置しておくほど鬼畜じゃねぇしな

散らばった体の一部が全てくっつき元の少年の肉体に戻した

「も、戻った…」

「二度と俺の人生の邪魔すんなよ?じゃあな」

まったく…余計な時間を食ったじゃねぇかよ

はやて達の向かったデパートに早くいかないと俺だけ昼飯食えなくなっちまう

はやてのことだからシグナム達以外にも自分の服とか買ってきそうだ

荷物係になるんだから腹になんか入れておきたいんだよ

昼飯といやぁ、なに食わす気なんだはやてのやつ?まさか新しい家族のために高い店とか行くんじゃねぇだろうな…

だとしたら除け者にされるわけにゃいかねー

俺はそのまま立ち去ろうとするんだが…

背後から来る怒気

まだ、立ち上がるか…わかっちゃいたんだが…なんだかなぁ

「くそっ!クソッ!くそがッ!お情けのつもりか!?自分が絶対に有利だと信じて疑ってないのかお前は!?どいつもこいつも余裕ぶりやがって!俺はスタンド使いだッ!俺はッ!俺はぁッ!」

フライングジャズが羽毛から先が鋭い触手を複数出し始める
ひょろい触手だな？スタンド自体にゃパワーは無さそうだが、こいつの飛ばすという能力で振るわれるんだろう
さっきのドラム缶やパチンコ玉を考えりゃ相当な速度で来るな

「まだやるんだな…つーかよォ、そのスタンド鳥なのかクラゲなのかはっきりしろよ　気色悪ぃ」

「この…！くたばりやがれェェーーッ！」

一気に打ち出されられる
このまま木偶の坊でいたら一瞬にして粉微塵だな
だが残念、俺のスカーサファイアにはそんなものは届かないんだよバカが！

両腕に黒い線がひび割れのように次々浮かび上がる
まるで憑依しているかのように見えるが実際はまったく違う
俺の中にスタンドを出しているだけに過ぎない
そして腕のひびから薄く、

細く小さなひびを次々に手の先に集め、
腕を全力で振るうッ！

ひびは空間を走り、触手に殺到して一瞬のうちにバラバラにした

「ば、バカなッ！」

「オラァッ！」

「うぐっ！？」

直ぐに狼狽えたバカに俺は近付いて、腕のひびが集まって出来たスカーサファイアの腕で殴る

「俺がせっかくやったチャンスをこんな下らんことに使いやがって…」

「う、うぅっ…く、来るな…」

「病院で反省しな」

「来るなァァァーーッ！！」

再び現れた触手

さっきよりさらに増やした本数は数えるのがめんどいくらいの物量で来た

ザッと１００本くらいか？

そんだけありゃマゾをシバくにゃ苦労しないな

ま、俺はマゾじゃないからシバかれんのはごめんだがね

能力を使って目の前で瞬間移動するように避けながらゆっくり、ゆっくりと近づいていく

「あ、当たらない！？時を操ってるのか！？」

「んな高度なこと出来るかよアホ…テメーは黙って殴られりゃいいのさ！」

両腕のひびを集めて出したスカーサファイアの腕を俺はほんのちょっとだけ本気出して

しかしたぶん死なない程度に振るった

「オラ

オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ

オラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ
オラオラオラオラオラオラオラ」

殴ってるとちょっと聞こえちゃいけないような音もしてるが、結局俺を亡き者にしようとしたんだ

これぐらい許容してくれるだろうよ

アッパーカットで打ち上げたあとに右腕を捻りを加えて打ち出す！

「オラァッ！！」

ぐしゃり

と、いった感じな具合に拳が顔面に決まり、盛大にぶっ飛ぶ

鼻血とか色々出してるけど、ちょっとだけ本気出したこと以外一応は手加減して殴ってあるんだから死なねぇだろうし再起可能だろう

まぁ当分は不能、だな

このまま死んでいかれても不味いから救急車ぐらい呼ぼうかね

なんか腕とか折れ曲がってるがそこら辺のチンピラにリンチされましたって言っときゃいいか

馬鹿正直にスタンドで殴られました何て言っても信じねぇだろうしな

「ふぅ…やれやれですねぇ」

テキトーに携帯で通報し、かきあげた髪をおろして痙攣してる馬鹿を尻目に俺は走り出した

はやてがへそを曲げる前にサクッと行きますか

あぁ～街中でスタンド使えばめちゃくちゃ早くつけるんだがなぁ

でもそんなことすりゃ近くにスタンド使いがいりゃ近づいてきそうで嫌なんだよな

しかもさっきのああいうバカみたいなやつが

まったく…神様よぉ

素質ばっかで魂集めんなよな…

無駄に諦めの悪いスタンド使いが騒ぎを起こしたりしてんだからしっかりしてほしいぜ

シグナム達がはやての家族として迎え入れられてなんだか厄介事が来そうな予感がしてるんだ

全うな平穏を過ごしたいよほんとに

傷だらけの青玉？（後書き）

とりあえずオラオラしてみた

なんかフライングジャズの少年は小物とはいえスカッとした

ごめんよ少年、サノブの都合で再び病院送りにしちゃった

譲一は腕や足ぐらいは出しても本体はまだ出てきません

譲一の能力も群を抜いて強力です

どんな能力かはまだ判明しません…

というより譲一が戦っている相手に解き明かしてもらいます

はやてと譲一？（前書き）

彼は、平穏のために見て見ぬふりをする愚か者である

はやてと譲一？

ＳＩＤＥ　譲一

「遅い！なにもたくさしてんねん！」

「す、すみませんはやて…ちょっと友人が鬱陶しくて…」

だいぶ近道して走ったんだがやっぱり遅かったみたいだ

あのバカの相手をしたせいで怒られちまった

以前も似たようなことで怒られてるし、どんなことがあろうとレディを待たせるのは悪いとは、はやての談

そうですよー俺は、はやてには頭が上がりませんよー畜生

シグナム、シャマルは苦笑いしてるし、ヴィータは回りの珍しさにそわそわしてるし…

ただ、昼食は皆で食べたいとはやてが待っててくれんだから仕方な

いし優しさだからな、甘んじて説教を受けるさ

闇の書なんて非日常に片足突っ込みかけてんのに守護騎士達を逆に日の当たる場所に巻き込んでんだからなぁ

家族のいない寂しさがあるとはいえほんとにしっかりしてるよ

くらべて、俺は平穏のに生きようとしてんのにこのザマだ

スタンド使いは引かれあう

どれだけなるべく地味に目立たず生活していても俺も転生者でスタンド使いという事実からは逃げられないし隠しきれねぇだろう

いつ、ボロを出すかわからないかヒヤヒヤする毎日を送り続ける

今、俺がいつまでこの平穏という足場に立っていられんだろうかね…

ん、暗い考えはやめてはやて達のために奮発しますか

「はやて、実はこないだ美味しいイタリア料理店を見つけたんですよ　昼食代は僕が支払いますから、そこにしましょう」

「お！おごってくれるんか？優しいなあ譲一君は！ポイント＋1や」

「なんですかそのポイント？」

「さあ？ようわからん」

わからんのかい

さてと、案内したイタリア料理店にいつの間にかついたようだ

値段がちょいと高いのはイタイが…

普通のガキなら支払えないそれを俺はクリアできるんだよ

ふっふっふー……悪いなクソ親父、お袋が見つけたあんたのへそくりを使わしてもらうぜ？悪く思うなよな？

小さな茶封筒に畳まれた5枚の諭吉さん！

一旦、家に帰った時に俺の部屋にもしものためにとお袋がこっそりおいていたからな

「はやてちゃん……譲一君が良くない笑みを浮かべてるわよ…」

「あれはあかん…シグナム、ヴィータの目塞いどき　良い子には、見せられへんもんや」

「わかりました」

「ちょ！シグナム！前が見えねぇ！」

あれ?なんでみんな引いてんだ?

あ、こら!離れんな!

「ヴィータ、ソースが口の回りについたままですよ?今拭いてあげますね」

「おい!自分で拭けるからいいって!んぐぐ!」

諭吉さんが2枚犠牲になって料理店から出たときに自分のハンカチでヴィータの口回りを拭いてやる

いや、やっぱりすごい美味しかったなぁ

というか店長は世界各地で修行した見たいで若いのに本当にすごい

「あれではまるで兄妹だなシャマル」

「そうですね…はやてちゃん?」

「んんー…イタリアンなのに日本人好みに味付けされとった…すごい店長さんやったな…」

「そういえばはやて、買い物の続きをするんじゃないんですか?」

「そうやったな！さ、みんないくで！」

車椅子を操るはやてはそりゃもうパワフルなこと

いろんな場所に皆は引っ張り回される形になる

あのちっこい体の何処にあんなスタミナがあるのか未だにわかんねぇー…

そしてたどり着く女性専門の服屋

男である俺は何度か外で待たなくちゃならんから暇だな

だがはやての生き生きとした姿が見れてよかった

家族を持ったことでこんなにもいい笑顔が出来るんだな

俺は前世でまともに笑った覚えがねぇからきっと昔のはやてみたいな寂しい笑顔だったろう

そんなことをぼけっと考えていると、着せ替え人形にされてきたシグナムが少し顔を赤くしながら帰ってきた

ちらりとみると今はヴィータがはやての標的になってんな

ただ、シャマルまで一緒になり始めて味方が居なくなってやがった

しっかし、結構ノリノリだなシャマルのやつ…

哀れヴィータ、合掌

「少し顔が赤いのですが、どうかしましたかシグナム？」

「い、いや…なんでもない」

なんでもないと言って胸を押さえていたらだいたいはやてが何をしでかしたか把握した

まったく…あの助平子狸め…

大変興味はあるが、セクハラになるから俺は触れない

「隣に座っても？」

「どうぞお構い無く」

シグナムが隣に腰掛けて来て、一緒にはやてを見守る

黙っていたがふと、はやてと目が合い手を小さく振った

「仲が良いのだな」

「友人でもありますが妹にも思えるんです　昔はどこか寂しい笑顔をばかりでしたが、新しい家族が出来て良かったです…」

シグナムに視線を会わせると訪ねたくなった

「まだこの平穏に戸惑うこともあると思いますが、どうですかこんな生活？これがこれからのあなたの日常になるのですよ烈火の騎士シグナム」

「……昨日の約束には驚いたし、主の考えている事が最初はわからなかった　だが昨日のやり取りと今日の主を見て素晴らしい主に出会えた…私は戦いばかりだったのだがな、今日のような日常は悪くない……いや、幸せだ」

「そうですか……」

「藤城？」

「……俺は、いつかはやてを悲しませることをするかもしれねぇ……友達だけじゃ繋がりが薄いんだ…シグナム、はやての家族として彼女を頼んだ…皆で支えてやってくれな」

「それはいったいどういうことだ？」

「……いつか、話しますよ」

そう、時が来たら

それは、やがて見えない異能を持つもの達がこぞって集まるだろうから

先刻、負かしてやったやつは、はやてに接触しようとしていたのだ

同じ異能（スタンド）を持つ俺としてはいつか、話さなきゃな

下らない考えを持っていたあいつとおんなじような奴が現れたら俺は、はやてを守らなきゃならん

血塗れの争いにはやては巻き込めない

ばれてもダメだ

俺にはある秘密がある

それがバレれば嫌われる

その時は俺は去らなきゃならねぇからな

今ある平穏をぶち壊す最大の爆弾は俺の中にある…

そのまま黙りこんでしまった

ああ、空気重い

「藤城…」

「いやぁ！買った買った！いい買い物したわぁ」

暫くして、シグナムの心配そうな声をかき消すようにはやては随分とほっこりとした顔で戻ってきた

…心なしか、ヴィータがほんの少しやつれてる気がする

「まったく…はやては自分の分を多く買ってませんよね？」

「大丈夫やって、譲一君が潰れないギリギリの量や！」

「…拷問ですか？」

「冗談やって」

少しマジな気がしたのは俺だけ？

とりあえずあとは少しの小物を買って帰りますかね

服屋からすぐ近くの雑貨屋でパッパと必要なものを買い物かごに入れているとはやてがそばにやって来た

「譲一君」

「なんですか？」

「今、すっごい幸せや　譲一君が友達になって、シグナム達新しい家族が出来た　前は親がおらんから寂しいし、足がこんなんやからなんで神様は意地悪ばっかするんか思てたけど、素晴らしいもんも手に入れたんや……まだ幸せになれる　それを知ることが出来たわ…」

「きっとはやてだからこそ手に入れられたんですよ　幸せと感じているのははやてで、その幸せははやてだけが感じられる特別なものじゃないですかね」

「そうなんかなぁ～…なぁ譲一君」

「はい？」

「これからも、友達でいてな？」

「当然ですよ」

やっと、やっとはやては笑えるようになった

これからさらにはやては笑顔になる

はやての幸せ、どうかずっと続いてくれよ

ずっとずっと…

「ところでヴィータ、それは？」

ヴィータが随分と嬉しそうに抱き締めるぬいぐるみ

うさぎのようなんだが、ヴィータはやっぱり見た目相応の性格というかなんというか…

「ヴィータ、人形がほつれたりしたら譲一君に頼むんやで？」

「なんでだ？」

「譲一君、中身がチンピラ？なのに特技が裁縫なんやで！前着けたエプロンとかミトンに、家にあった猫や子狸のぬいぐるみとかは譲一君が作ったんや」

「なんつーか、女の子っぽいんだな譲一のやつ（子狸…？）」

「女の子っぽい…ですか？」

前世からよく裁縫やってたからな…

元々暇なときにチクチクやってたら出来ただけなんだけど

というか裁縫やってたら女の子っぽいのか？んんん？

「なんか考えこみ始めたな…もしかして悪いこと言っちまったか？」

（ヴィータは何も悪ない　ただ、テディベアとかぬいぐるみのレパートリーと可愛さのレベルが高すぎる…頭んなか結構メルヘン図鑑ちゃうか？）

何故かヴィータに謝られ、はやては裁縫で食っていけるんじゃとか言われた

そんなに裁縫の技術高いのか俺って？

後、チンピラとか言うんじゃねぇよはやて…

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

はやてと譲一？（後書き）

ちょっとした交流

ダメだな…シグナムをヒロインにしたくなる

でも我慢だ

猫草飼いたい

でも我慢だ

次話にて原作に登場したスタンドを出します

いや、厳密にはオリジナルになってしまうんだけど能力が変わらないです

譲一チームが出来るみたいなもんですね

それに応じて亮チーム、庵チームが出来ます

あとはラスボス転生者が数人ですかね

ラスボス転生者の中には原作に出た強力なスタンドを操ります

ただしラスボス転生者の一部はスターライトブレイカーとかスターライトブレイカーとかスターライトブレイカーとかでぶち抜かれるかもな！ザマァッ！！

あ、恥知らずのパープルヘイズを買いました

まだ全然読んでないからネタバレしないでね！

ついでにサノブはシーラEがツボに入った

早く読まねば！

……実はクロノチームもあるよ……

青玉と金剛石と立方体？（前書き）

タイトルで原作に出てきたスタンドがなんなのかまるわかり

金剛石て…金剛石って…

青玉と金剛石と立方体？

ＳＩＤＥ　譲一

守護騎士達がはやての家族になり１ヶ月たった

皆、生活になれてきたのか随分とのびのびとしている

そんな八神家で俺ははやてを探し回っていた

「はやてー？どこですかー？」

「どうした藤城」

体がなまっちゃいかんからとさっきまで組手してたザフィーラが人間態でいた

「ザフィーラですか　今日はヴィータと散歩に行かないのですか？」

「ヴィータは近所にゲートボールをしにいった」

マジか?ヴィータのやつ老人に混じってそんなことしてんのか

なんかここ数日居ねぇときがあると思ったらそういうことなんだな

「それと、主なら図書館に本を借りに行くと言っていた」

あ～、はやて本好きだしなぁ……ん?一昨日かなり本借りてなかったか?まさか全部読み終わったって言うのか!?早すぎだろ!

……まぁ、いい

この際ザフィーラでいいか

「ザフィーラちょっと留守番を頼まれてくれませんか?冷蔵庫の食材が減ってきたので今から買い出しにいってきます　はやてが帰ってきたら伝えておいてください」

「任された」

「それでは、行ってきます」

買うのに必要な食材をメモして財布をポケットにいれていく

おっとエコバッグを忘れちゃならねぇな

そういや天気予報は晴れとか言ってたけど降りそうなぐらい曇ってやがる

これで予報が外れて雨だったら最悪だな

一応折り畳み傘を持って家を出た

「ん？」

なんか視線を感じるとそこには１匹の猫がちょこんと塀の上に居座っている

何故かよく見かける猫なんだよなぁ…この塀が気に入ってんのか？

でも今日は日向ぼっこするような日は差してねぇし…

「お前も物好きですねぇ？こんな日にも律儀に塀の上なんかにいて」

「にゃぁ～ん」

頭を何度か撫でて、気持ち良さそうな声をあげる猫

……

やっぱ猫はいいな

見てて癒されるわぁ…ってこんなことしてる場合じゃねぇや

「今日は少し、天気予報が外れそうです　お前も雨に濡れる前に帰るんですよ？」

「うにゃあ～ん」

最後にあごをマッサージしてやった後、商店街に走った

うーん、道行く人を見てりゃ皆、傘を持ってやがるなぁ

こりゃ確実に降るね、いい加減な天気予報しやがって

「痛いよぉ～ママァァァ」

「ん？」

道の途中で足を押さえて泣いてる小さな男の子がいた

ちょっと大袈裟な感じがしたから気になって仕方ねぇ

「うわあぁぁぁぁん！」

「……」

つーか道行く人もなんかしてやれよな…あんな冷てぇ大人にならないようにな

俺は近付くと、声をかけようとして

「君、大丈夫？」

「ヒック…ぐすっ…足が痛いよぉ」

「どっちの足？私に見せてくれないかな？」

なんだかポニーテールにぱっつん前髪の女の子が先に男の子のもとに来た

なんというかなのはやアリサ、すずかみたいな美少女と呼べるような容姿の女の子だ

柔らかく優しい笑みを浮かべている彼女を見て少し落ち着いたのか、男の子は押さえていた足を見せた

そこは、転んだ拍子に何処か角に刺さったのか血がだらだらと出ていた

おいおい、ありゃあ確かにいてぇぞ？

大人でも結構痛そうに見える怪我だった
流石に見てばっかじゃダメなので俺も男の子のもとに駆け付けるか
だがそこに俺は信じられないものを見た

「うん、今からお姉さんが治してあげる！」

「ぐすっ…ほんと？」

「任せて任せて！泥船に乗ったつもりでいなさい！」

「ずずっ…それって…沈みそうだよ…？」

男の子の言う通りだ
なんで泥船なんだよ大船だろふつー

「痛いの痛いのぉ～ぶっ飛んでいけ～」

「！！」

「あ…治った…」

女の子が怪我をしている部分に手をかざすと、あれだけ流れていた
血はなく、傷口はきれいさっぱり治っていた

だが、そんな異常な現象よりも俺は彼女の背後を見ていた

彼女の背後に佇む一体の人型…

首の部分には鉄のパイプのような部分が生えていた

ハートにも見える一部の装飾、一瞬にして直し（治し）て見せたその特異な力

俺は、それを認めたくないだが、だが、間違いない…あれは…

「ク、クレイジー……ダイヤモンド……」

嘘…だろ?あの原作に出ていたスタンドを使うっていうのかよ…

ヤバい、ヤバいぞあれは…

俺のスカーサファイアはダメなんだ…こいつには、クレイジー・ダイヤモンドには絶対に勝てない…

戦いどころか、接触も回避しよう

なんでスタンド使いは引かれあうなんて厄介な性質があんのか、今日始めてその事実に怒りが沸き、同時に元気になった男の子に手を振る彼女を怖いと思ってしまった

後ずさろうとして

「おい、お前…さっきのあれ見たな？いや、見えていたな？」

「ッ！」

俺の後ろからかかる声にドキリとして、首を動かすだけでその方向を見る

おいおいおい！もう一人いたのか！？

こちとら冷や汗をかきまくってるーのに！

パーカーを着た一人の少年がそこにいた

だが、目を見りゃわかる…

見た目と中身の伴っていない、眼光

「俺の姉さんのアレ、見ちまったんだよな？てーことはよ？お前、転生者だろ」

「…なんのことですか？僕にはさっぱり」

「とぼけんなよ、姉さんのはかなり強力だし、あの人は戦いもまともに出来ないような優しい性格してるてな？騙されやすいから誰かが

知れば利用するなんて目に見えているんだよ……で、テメーが見ちまったからせっかくバカどもから隠してる情報が漏れちまうかもしれねぇ」

こいつは弟か…？

確かにクレイジー・ダイヤモンドは応用の出来るデタラメな能力に加えて、スタンドのポテンシャルもずば抜けてやがる

バカども…なんかの物語のこの世界に介入したがるやつがいたからたぶんそいつらの事か？

確かにクレイジー・ダイヤモンドを味方につけりゃそういうのを出来るかもな…

勘違いされてるとはいえこいつも十中八九スタンド使い

戦いたくねぇー…なにか、なにか戦いを避ける手段が欲しいッ！

俺のスタンドを使えば遠くに転移は可能だが、クレイジー・ダイヤモンドの能力を使われれば

簡単に戻されちまう

ヤバい、詰みそうだ…下手に会話もできねぇぞ

「こら、光！人様に迷惑かけるんじゃありませんっ」

「うげェッ！？」

「…は？」

打開策を練っていると光と呼ばれた彼をさっきの女の子が頭を殴っていた

突然のことにポカンとしてたが、今この瞬間は隙だらけになった相手を見て俺は直ぐ様走り出した

「あ、こら！待ちやがれ！」

「待つのは光！簡単にガンつけちゃいけません！」

「ちょ！姉さんッ！ここ街中ッ…ぐあぁぁぁぁっ！」

……何が起こっているのかすごい気になったが、そんなものに振り返る勇気はねぇ

逃げるように俺は食材を買いに戻るのだった

ＳＩＤＥ　？？？

まったく！光ってば簡単に喧嘩売るんだから！

相手は完全に無抵抗だったのに仕掛けることないじゃない！

「ね、姉さん…わかってくれよ…クレイジー・ダイヤモンドは強すぎるんだ…下手すれば利用されたり、姉さんを再起不能にするか殺されるかもしれないんだよ？」

「大丈夫だよ！私は強いもん！光はわかってるでしょ？」

「わかってる、わかってるけどさぁ…スタンドはとてつもないくらい強力なのは皆一緒なんだよ？中には問答無用の皆殺しにする奴とか、完全撃破不能な奴だってあるんだから、迂闊に能力は使わないでよ？」

「う、でもさっきのぐらい見逃してよぅ」

「はいはい姉さん」

あ、あれ？おかしいなぁ、なんだか私が怒られてない？？

むぅ…光の癖に生意気な

姉さんに説教なんて十年早いんですからね

あ、それよりも

「ほら光！早くしないとバーゲンセール始まっちゃうよ」

「本当にわかってるのかぁ～？」

光の手を引いて駆け出す

私達、姉弟は二度目の生を受けた

いきなり生まれた矢先に親に捨てられるとは思わなかったけれど、

前世の記憶を頼りに生活することでなんとか生き長らえてきたのだ

スタンドという望まぬ力があるとはいえこれからも変わらないのだ

だけど、さっきまでいたおそらく自分達と同じだろう少年

彼に出会った事がこれからの日常を変えるのだと

「すいません、これくださ……あ」

「「あ」」

買い出しに来ていたスーパーでたまたま同じ商品売り場でもう一度

出くわした時に私、柊　由香は確信したのだった

青玉と金剛石と立方体？（後書き）

誰がサザエさんみてーな髪型だァーーーッ！

しかし、譲一が見たものが本当にクレイジー・ダイヤモンドだったのだろうか？

答えはこの後の戦いにて

今回は話を三回くらいに分けますかね

どっかの鳥かクラゲかはっきりしない小物と違って戦いは少し激しくしようかと

次回は譲一（みつる）ＶＳ光です

青玉と金剛石と立方体？（前書き）

譲一ＶＳ光

青玉と金剛石と立方体？

ＳＩＤＥ　譲一

買い物を終えた俺は少し暗い気持ちで帰宅した
そこに出迎えてくるシャマルとヴィータ
ヴィータはアイス目当てだろ

「あら、譲一君お帰りなさい」

「ああ、シャマルとヴィータですか？すみませんがちょっとこれを冷蔵庫の中に入れておいてください」

「わかったわ」

「なぁなぁ、アイスはないのかよアイス！」

「ちゃんとありますよヴィータ　ちゃんと冷やしてから食べるのと食べ過ぎないことですよ　皆の分も残さないと一週間アイス買いませんからね」

「う…わ、わかってるよ！子供扱いすんじゃねぇ！あと頭撫でんな

！」

と言われても撫で心地がいいんだから仕方ないだろ

髪の毛さらさらしてるし…今度、シグナムの髪もこっそり撫でよっかな…

そんなことよりシャマルに食材を渡すと俺は靴を履き直す

「ん？譲一お前、どっか出掛けんのか？」

「ちょいと野暮用ですかね？夕飯には帰りますから…そんな捨てられた子猫のような顔しないでくださいよヴィータ」

「してねぇよ！そんな顔！お前にはどう写ってんだ！」

「さぁ？シャマル、どう思います？」

「え？え、と…私にはちょっと…って譲一君、ヴィータで遊んじゃダメですよ？」

「譲一！」

はっはっはっ

ころころ表情を変えるヴィータは弄って楽しいんだよな

はやてに前、怒られたけど簡単にやめられるかっての

……さて

「……それじゃ、行ってきますね」

「？？お、おお」

「？行ってらっしゃい譲一君」

俺は家を後にした

歩いている間、思案する

何故、何故静かに暮らせない？俺はただ平穏に暮らしたいだけだというのに…

あいつらも戦いは望まないような性格をしている

向かった先は人気の少ない空き地

そこには今日遭遇した姉弟がいた

「待たせましたかね？」

「いいや、全然　さっき俺たちもここに来たばかりだ」

「あのですね…やっぱり別にこんなことをしなくてもいいんじゃないでしょうか？」

「無理だね、お前が秘密を守ってくれる確証は無いんだからな」

シスコン野郎め…心配性にもほどがあんだろうが

頼むから姉は見守ってないでなんかいってくれよこいつによぉ

「そもそも俺にはわかるぜ？あんたのその目…

人殺しの目だ…」

「ッ！」

「何人殺した？」

「…言うと思うか？」

髪の毛をかきあげて相手を睨み付ける

光とか言ったか？はやてにすら秘密にしていること…その一端に触れやがった

そうさ…俺は人を殺した事がある

転生して数えで１０年…もうこの両手で数えられない人数をな

仕方ないだろ？

お袋が裏で請負人のような仕事をしてきて

だから、ガキの俺が何処かの犯罪組織に何度も命を狙われたんだ

初めは返り討ちにするためだったのに、町の人間を巻き込み始めた

奴らに手加減しなくなった

そして両親を手にかけようとして来た奴らを…

犯罪組織は高町士郎なる人物が警察と一緒になって滅ぼすまで命を

狙い続けた

振り返ると日常を平和に生きようとして非日常でやりたい放題殺し

た事から目を背けてたな…

「お前は何処か危うく危険な感じがするんだよ…何て言うか勘みた

いなもんだ…平穏を望んでいるのはお互い様だが、俺はまだ信用で

きねぇ……テメーの平穏を守るから俺達の情報をくれと言われたら

あっさり渡すかもしれない」

「ちょっと光…！」

「姉さんは黙っててくれ…俺は逃げねぇ、どんなことがあろうと今ある平穏を命をかけて守る！お前は平穏を命をかけて守る覚悟はあるかッ！？平穏の為に敵であろうと他者の命を蔑ろにしないと絶対に言えるかッ！？」

「俺は…」

どうだろうか？一度数多の命を犠牲にしたのだから

俺が胸を張って絶対に言えるのだろうか？

「戦え！藤城譲一！この俺とキューブと戦い、覚悟があるか示して見せろォッ！」

光の回りに四角い立方体が大小問わず浮かぶ

あれが奴のスタンドか？

見た目ではあまり能力は分かりづらいな…

だが、俺は覚悟を示さなけりゃならねぇ

秘密と向き合い始めなきゃならねぇ

両腕にひびが入る

平穏の為に回りを蔑ろにするのはやっぱりダメなんだよ

他者から奪うな

自分が、守るんだ

両腕のひびがさらに深く、深く入っていった

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

キューブと呼ばれたスタンドは一見群体型のように見える

だが意思を持ってるように見えないしまとまった動きはない

とりあえず譲一は様子見で挑むことにした

一対一、しかも相手ははっきりいってフライングジャズの少年と違い、強い

まず適当な隙がないのだから
とにかく間合いに入って牽制を仕掛けることにした譲一は駆け出す

（血迷った…って顔はしてない…真正面から来るにはどんな能力にも対抗できる手段があるということか）

「キューブ！」

何かが軋むような音が響く
それはキューブが動くと必ずなる、いわば駆動音のようだった
手のひらに収まるような四角は回転しながら不規則な軌道を描きながら接近していく
そして急激なスピードを上げてそれらは譲一に襲いかかった
緩急がつけられタイミングも数もバラバラな立方体は足を止めてしまった譲一を攻め立てる
軋むを音をＢＧＭに冷静に避けて、無理なものはスカーサファイアで叩き落とす

（動きが早ぇ！どこから襲い来るのか、どのタイミングで突っ込んでくるのか、計算が間に合わないッ！）

「そらそら！増やしていくぞ！」

光はさらに人の頭ほどもある大きさの四角い凶器をいくつか追加していた

そしてその大きさは小さな凶器を隠すには最適だった

高速で動く物体に譲一は対応を追われているときにその事実に気付いた時はもう遅い

死角から迫る攻撃は譲一の腹部に突き刺さる

「ぐうぅッ！？な、にィ！？こいつはいったいどこから…」

一度対応を止めればどうなるか

それはかわさなければならない攻撃を一身に受けることになる

次々に譲一を蹂躙していき、痛みに悲鳴をあげたくてもあげられない

額に強い衝撃が来たかと思えば血がドロリと流れ落ち、口のなかも切ったか、血の味が広まって鬱陶しくなる

「み、光！なにもそこまでしなくても！」

「悪い姉さん、これは必要なことなんだ」

（チッ…よゆーかましやがってよォ…クソッタレが…）

譲一には元々負けず嫌いな面もある

情けなさから来ることもあったが、先程からなすすべもなくワンサイドゲームを強いられていたことが一番あったからだろう

その性格のせいでよく後悔ばかりするそれが、今回は彼にとって吉となった

譲一に、火がついた

「ッ！オラァッ！！」

1つの立方体を思い切り殴り飛ばした

狙い済ました一撃は立方体を明後日の方向に吹き飛ばしていく

そこから彼は反撃を開始した

「！？まだ元気があるかッ！」

光は立方体を再び向かわせてなぶろうとするのだが
拳を振るっても届かない位置にあるはずの立方体にはまるで瞬間移動のように瞬きひとつで近くに現れて殴り抜いた
譲一は能力の出し惜しみをやめたのだ

「オラ」

あれだけ譲一を苦しめてきた立方体はことごとく弾かれていく
ひとつの立方体が光めがけて殴り返される
それを紙一重で避けるとさらに何か黒い線が迫っていることに気付く
それらをなんとか状態を反らせることでかわし、

「ぐぁっ！？」

「光！？」

きるはずが、肩をばっくりと引き裂いた
深く裂かれることは無かったが、ある異常性に気付いた

「痛みはあった…だが、血が出ていない…？そしてこの黒い線…」

未だに残る黒い線
それはまるで

「……おいおい、こいつはなんの冗談だ？姉さんのクレイジー・ダイヤモンドもそうだが、お前これって…

空間そのものをひびを入れて壊しているのか？」

光の言葉を受けた譲一は、返事をするかのように腕のひびが浮いていた腕と背後へ集まっていく
腕だけだったそれはやがて人型へとなっていった
青い肌に様々な傷跡が刻まれている

顔にはまるで目隠しのようなベルトと鎖が巻かれていたが、鎖は砕け散り、ベルトの隙間から瞳を覗かせた

「成長…いや、元に戻ったのか……」

「いちいちグダグダと悩んで自分にとっての平穏を失うなんてバカらしい……秘密を隠すために友人達と無駄に線引きしてその実、一番平穏から遠ざかっていたなんてのもバカらしい……俺の秘密は今は友達やその家族には話せねぇ…だが、いつか話す…俺は罪を隠すのはやめた……いくぜ光とやら、今の俺は手加減しないッ！」

言って、そこには譲一は居なかった

光も由香も何が起きたかまったくわからなかった

「消え、た…？」

その瞬間すらわからない悟らせない

由香の呟きが静かに響いた

光は嫌な静寂が訪れたなと警戒する

そして、

「後ろから！」

「オラ

オラァッ！！」

「ぐぅぅっッ！！」

僅かに感じ取れた譲一の気配、そして拳の嵐が来ることを察知した光の行動は早い

自身の回りにあった立方体をすべてかき集めて白い壁が守るように固められる

拳が立方体にぶつかる音が暫くなり続け

再び静寂がやって来る

「気配が無い！？そこにいないと…ッ！」

「フンッ！！」

右、いや左、果ては斜め下から青い拳が、光に襲いかかる
今度は、譲一が光を追い詰め始めていく構図へ変わりだす

「様々な方向から、同じタイミングで拳が現れるッ！？こいつッ！
空間を移動できるのかッ！？しかも、なんの時差もなく！こいつは、
空間を破壊するのが能力なんじゃないッ！」

光はとんだ化け物を起こしてしまったと少しばかり後悔していた
なんとしても防ぐべく、拳の先に立方体を回して間一髪で防いでいく
だが、動揺と焦りが精神力をすり減らし、光はミスを犯す
ひとつの立方体が拳の一撃に踏ん張ることができずに弾かれてしまったのだ
その小さな隙間を通り、拳はついに光を捉える

「がァッ！？」

「ハァ…ハァ…外したか…今ので決めようとしたんだがな…」

吹き飛んだ光は立ち上がろうとして血を突然吐きだす

「ゴブッ!?ゲホッ!ゴホッ!…ぐ、ぁ…なんだこれは…骨は折れてねぇ…だが、全身が割られるような衝撃が来やがった……」

「ハァ…クッ…そりゃスカーサファイアは顔以外を殴っちまうと発動する筈の、相手の体を割るという効果が不発して…そのお前というひとつの空間を揺さぶったからだ…顔以外殴られっとすげぇ痛いぜ?」

「ゴホッ…どうりで遠心力を内側から受けたような感覚がするわけだ…気分悪い…」

「言っておくが…体を割るのも、ひびを入れて壊すのもどっちも本当の能力からこぼれ落ちたおまけだ」

「だとすると…あの拳を出したり、お前が消える方が本当の力か…まるで、扉を行き来するような力…空間や、お前のそのひびはその扉を壊した刃物もどきに過ぎない……参ったな……能力がチート過ぎるぜ」

光の殴られた箇所、右腕には、ひびが入ったように薄く赤い傷が走り、血を流していた

ここに来て互いは体をボロボロにしつつも五分五分になる

譲一は能力の多用により多大な精神力を消耗している

光は油断した結果、一発の攻撃が体力を奪っていった

（どうやら、空間に作用する能力はデメリットも多いらしいな…スピードもパワーもキューブと同じぐらい…これ以上の消耗を奴が望まないことは明白…ならば真っ向からの殴りあいか）

（キューブというスタンド…群体型にしちゃ手応えが無さすぎる…まるで暖簾を殴り続けてるようだ…能力を使ってもひびひとつ入らないし門も開かねぇ……絶対的な無効化能力…だが、奴は俺を見て決着を仕掛けるはず…なら小細工なしだ……ぶっ倒すッ！！）

「キューブッ！！」

立方体もまた集まり、人型になる

光もまた能力によって戦いを繰り広げていたに過ぎなかったのだ

角張った白い巨人と傷だらけの青い巨人を携えた二人の戦いは決着のときを迎える

一瞬の間を置いて

「「オオォォォォォォォッッ！！

オラァッ！！」」

二人は拳を繰り出した

拳は少年達の互いの頬を穿った

二体のスタンドも互いの頬を撃ち抜く形で

青玉と金剛石と立方体？（後書き）

ううん…まだ、まだなにか描写を追加してきれいにまとめられそうな気がするんだ…

まともな戦闘と譲一の過去をカミングアウト

光はシスコン

なかなかカオスなことになってんな今回の話…

どうしてこうなった

次回で姉弟の話は終了

そのあとから大きく物語が動き出します

で、一旦藤城譲一編？は終わり、転生者目録を挟んで矢口亮編？が始まっていくと……流れはこうなります

もしかしたら案を頂いたスタンドや転生者達を早くに使う可能性が

ありますね…

それにしてもパープルヘイズ面白かった

パープルヘイズつぇぇ…

短かったけどよかったよかった

では次回にてまた

青玉と金剛石と立方体？（前書き）

ナンテコッタイ

「ぐ…」

「あ…」

二人揃って彼らは倒れそうになり、膝に力を入れて踏ん張った

口からは血がこぼれ出す

「ハァ……く、しぶといなおまえ…」

「おまえ…こそ…な…」

虫の息なのに二人の顔にあるのは笑みが張り付いている

だが、確かに決着はついたのは分かっていた

勝敗は分からないけれど戦いは終わったのだと

「俺は…前世じゃどうしようもないクソガキだった…親もなく、ただただクソ以下の生活を過ごして……死んだ……生き返ってさ…す

っげぇ当たり前の生活が、すっげぇ幸せだったんだ……だから、小心者のように他人にへーこらしてでもバカみたいに生きてみたい……強いのは疲れるだけだ……スタンドなんてもの持ってても俺は今の生活にいらねぇ…黙って静かに平穏に生きる……そう決めた…これからも変わらない……なのにいつの間にか、誰かを排除して無かったことであれと目を背けて蔑ろにして忘れて生きようとした……汚い生き方だ…こんなので平穏に生きても、いつか、最低な人間と言われる……前世と根っこが変わんねぇ生き方をするとこだったぜ…」

譲一は息を吐き、その場に座り込んだ

痩せ我慢するのもめんどくさくなったのか光も同様に座っていた

「その根っこが変わらない生き方をしてるんだったら…俺ぁどんな手段使っても確実にぶっ殺してやるとこだぜ…」

「おっかねぇの……なんかお前に認めてもらうはずが、随分と世話になっちまったなぁ」

さっきまでの争いは嘘のように二人は長年の友人のように笑いあったのだった

そんな二人の影に忍び寄る者がいた

そして背後から現れた巨人は二人を思い切りどつく

「うごぁっ！？」

「いたぁぁっ！？」

完全な不意打ちになり二人はどつかれた箇所を押さえて転げ回る

犯人は光の姉、由香

そしてそのスタンドの仕業であるのだが

クレイジー・ダイヤモンドのパワーは非常に強い

殴れば車なんて数秒でスクラップに変えれるぐらいである

そんなパワーで、小学生ボディの、しかもさっきまで戦ってボロボロになった少年二人をどついたらどうなるか

言わずもがな悶絶ものである

何故こんなことをしたのか

答えは簡単、由香が怒っているからである

「二人ともそこに直りなさい！」

「「は、はい！！」」

しかもかなりマジに怒っていて、クレイジー・ダイヤモンドが見下ろしているのですごい威圧感である

まるでゴゴゴゴゴゴと擬音が出ていると錯覚するほどの迫力に光は涙目になりながら素早く正座を、譲一はかきあげていた髪をおろしてただの地味で気弱そうな少年に早変わりしていた

「光、あなたは私のためだとしてもやりすぎです！」

「だ、だけどこれは必要なことって…」

「私を免罪符にしない！ぶっ飛ばしますよ！？」

「ご、ごめんなさい」

「それと…」

「え？あ、じょ、譲一です」

「うん、譲一君も手加減しないにも限度があります！」

「そこは…男と男の決闘ですから…」

「そんなこと知りません！婿に行く前に傷物にしたら歪んだ形に直してやりますよ！？」

「調子に乗りすぎてすいませんでしたぁーーッ！！」

光速の土下座を繰り出す譲一

先程、低姿勢な生き方をすると聞いていた光はその素早さに少し引いていたり、さっきまでチンピラみたいな奴がここまで変わるのかと驚いていたのだった

その後の少年達はたった一人の少女に延々と説教をされる

言い訳しようものならクレイジー・ダイヤモンドに殴られるのは目に見えていたから

そんな拷問のような、嵐のような時間は過ぎ去り唐突に説教が終わる

「反省してくださいね…？一大事になられるのは嫌だから」

「「本当にすみませんでした」」

そう言って、クレイジー・ダイヤモンドで撫でる

それだけであれだけ戦った二人の傷も汚れも何一つなくなる

当然痛みなどない

この世のどんなことよりもやさしい能力と称された直す力を体験して譲一は内心感動していた

ふと、譲一はおかしなことに気付く

「……胸？」

なんか、こう、クレイジー・ダイヤモンドにはないはずの凹凸ある胸があるというか、ぶら下がってるというか、なんというか

譲一は目を擦り、しっかりとクレイジー・ダイヤモンドを視界に収める

胸だけではない

全身が女性らしく丸みを帯び、逞しさは微塵も感じられないほど何処か可愛らしい印象を譲一に与えた

そう、それは見間違いではない

クレイジー・ダイヤモンドが、女性になっていた

「……？？？？……？？」

もう一度、目を擦る

クレイジー・ダイヤモンドが、女性になっていた

「おーまいごっど……」

いきなり混乱しはじめた譲一に由香も首をかしげる

譲一が何故混乱しているのか光は気付いて話した

「それは確かにクレイジー・ダイヤモンドだが、本人（東方仗助）のとは違う姉さんのだからだよ　こいつを俺はシー・クレイジー・ダイヤモンドって名付けた」

「ああ…でもめんどいですよその名前、普通にクレイジー・ダイヤモンドでよくないですか？」

「まあな、俺も姉さんも普段はまんまクレイジー・ダイヤモンドって呼んでるし、フルネームで呼ぶ必要はないよ」

「？？」

何故驚愕を与えたのかまったく分からない由香は一人、首を傾げているのであった

そんな由香を見ながら光は譲一に話しかける

「姉さんはいろいろと甘いから、何処の誰がよからなぬことに利用しようとするかわからねぇ……しかも、俺が言うのもなんだが姉さんは美少女だから変態もにじりよってくるに違いない……絶対に、絶対に姉さんのスタンドがクレイジー・ダイヤモンドってばらさないでくれよ？」

「わかっていますよ……どんなことがあってもこの情報は漏らしませんよ」

いくら姉の為といえ、過保護すぎるのと光の鬼気迫る表情に譲一少し引くのだった

ついでに心のなかでもう、お前が変態だよと譲一は呟いたのだった

日が暮れる手前まで三人で話して友達になり、解散することになったとき光はあることを思い出して譲一を引き留めた

「譲一！」

「なんですか？」

「最近、スタンド使いに片っ端から戦いを挑んでくる紅いスタンド使いの噂を聞いてないか？」

「紅い、スタンド使い？いいえ？なんなんですかその、通り魔みたいな方は」

「何かを探してるみたいでよ、スタンド使いの強さを測るようなことをしたりするらしい」

なんて迷惑なやつなんだと、前世、自分も似たようなことをしていたせいでどれだけ迷惑か誰よりも実感している譲一は真っ先に思った

「こいつがえらく強いらしくてな？デバイス持ちで、魔法とスタンドを使って反撃する間もなく相手を倒してしまうんだ　現に俺の友達も何人か襲われてあっさり倒されちまった」

「彼らは無事なんですか？」

「一応な、再起は可能だが……話から聞くにスタンドの特徴がバラバラなんだよ…腕や足だけに襲われたとか、デカいカラスだとか、ムカデの大群だとかな……直接戦っといてスタンドのタイプがまったく分からないんだ」

「不気味……ですね」

「たぶん、転生者（スタンド使い）の中で最強かもしれないぜ…気を付けろよ」

「わかりました」

お前が心配なんかじゃないんだからな！勘違いするなよ！と正直、勘違いしたくなる捨て台詞を残して姉弟は譲一に背を向けた

一度、戦った相手を忠告（心配）するとは、光は随分と優しい性格をしている

やはり光も由香も姉弟なんだなと譲一は思い、

「由香さん…か…髪の毛…触りたかったな…」

前世から続く悪癖を漏らしてしまう

スタンドのおかげで五感が普通の人より鋭敏になっているため譲一の言葉は聞こえてしまうわけで

ボソリと聞こえたその言葉に光は姉ににじりよる変態は案外近くにいるのかもしれないと若干警戒し、その由香本人は、自分の髪を触ってそんな触りたくなるような髪なのかな？とあまり自分に危機感を感じていないのだった

ＳＩＤＥ　譲一

「た、ただいま～」

ね、眠い！

クレイジー・ダイヤモンドで傷は治せても疲労はなくなる訳じゃないというのを考えて無かった…

少し休めば平気かと思ったが、小学生でしかない俺にはまったく無意味だった

とにかく今すぐ眠りたいのだが、居間の方向より漂ういい臭いがなんとか意識を繋いでくれていた

「む、藤城か」

「あぁ…シグナムですか…」

居間に向かってあるいていくと、風呂場の方よりシグナムが現れた

上がったばっかりか、顔に赤みを帯びており、湿った髪とマッチし

て凄い色っぽい

「大丈夫か？えらく疲れてるようだが…」

「そう見えます？」

「あまりにも覇気が無いのでな」

正直ヤバイんだよね…頭が考えることがまとまらんからな

居間につくとヴィータとシャマルがはやての夕飯の準備を手伝ってるようだ

……ヴィータがいるのはシャマルが余計なことしないようにはやてに頼まれたに違いない、そーに違いない

「お、譲一君おかえり…ってなんやえらいねむそうやね？」

「…眠い」

「あはは、ならまだ出来るまで時間あるからソファーで寝とき」

「おやすみー」

「寝るの早いな！」

ヴィータの突っ込みが聞こえたのを最後に俺は一度、深い眠りについたのだった

……目を覚ましたら何故かシグナムに膝枕されてたり、そんな俺をはやてやシャマルが荒い息で写真を撮っていた

寝顔が可愛かったとか寝言が可愛かったとか焼き増しするで！とかお前らいつかひでぇめにあわせてやるから覚悟しやがれよ

シグナムも顔を赤くするほど恥ずかしいなら膝枕しなくてもよかったのに

ヴィータも今食ってんの俺のアイスじゃね？ねぇなんで目をそらすの？

あといつも思うんだけどザフィーラもドッグフード食わされてるけどお前はそれでいーのか

そのあとは何事もなく夕飯を食べて風呂に入り、就寝

今日の光との戦いが嘘のように静かに一日が終わる

俺はこれから先もこの日常が続いていくものだと信じていた

はやてが倒れるまでは

青玉と金剛石と立方体？（後書き）

ナンテコッタイ、ナンテコッタイ

譲一、重度の髪フェチ

女性版クレイジー・ダイヤモンド

これが予想できた人はどれだけいたのでしょうか

姉弟は譲一パーティに入ります

あと1話で藤城譲一編？が終わり、矢口亮編？スタートです

矢口亮のストーリーにて募集して貰ったスタンド案を少し使おうと思います

亮君はラッシュの掛け声とかどうしよう

ＷＲＹＹＹＹＹＹにするわけにはいかんしね…

約束を違えてでも（前書き）

藤城譲一編？エピローグ

そして次の矢口亮編？プロローグ

なのでぶっちゃけ短いです

約束を違えてでも

建物の屋根を渡る影が一つ

桃色の髪を靡かせて夜の町を駆け抜けていたのはシグナムだ

格好も私服ではなくバリアジャケット…騎士服になった姿でだ

彼女の表情も戦士のものに戻っている

そんな彼女はある場所に辿り着く

その視線の先には、守護騎士全員が揃っていた

いや、正史ではないこの物語の中にさらにもう一人いる

紺色のパーカーを着た一人の少年がその場にいた

逆立て、後ろに撫で付けられた髪

普段は見せない鋭い眼光を覗かせ、いつもの笑顔は微塵も面影がない

「無事に集まったな」

「……時空なんたらの目を掻い潜るためとはいえ、小学生の俺には夜中の活動は堪えるぜ…」

「譲一君、無理しなくてもいいのよ」

藤城譲一がその場にいた

時は遡る――

滅多に使わない念話という魔法を受けた譲一は学校を早退した

はやてが倒れた

ただの立ちくらみだとはやては言うが、その日以降から守護騎士達の様子がおかしくなった

変わらない日常に見えるが違和感を感じた譲一は暫くして守護騎士達を集めて問いただし、彼女らがはやてと交わしたはずの約束を破っていたことがわかったのだ

はやてと譲一の二人と過ごした日々が闇の書によって壊されようとしている

だから彼女を唯一助けられる方法を、約束を違えてでもやらねばならないのだ

それを聞いた譲一は何を思ったか

「テメーら…はやてとの約束を破ってでもとか言うけどよ…聞けば犯罪行為っていうじゃねぇかよ?それで、もしお前らの誰かが傷付いたりしたら悲しむのは、泣くのは、はやてなんだぞ?ちゃんとわかってんのか?わかってねぇよなぁ?はい正座!お前らそこになおりやがれぇッ!」

守護騎士達を全員正座させた

ついでに何故か髪の毛を触られた

ヴィータに限ってはもっと丁寧に髪の毛を洗いなさいなどと忠告までされた

話は脱線したが、譲一は少し考えた後に

「決めた、俺も共犯者になってやるよ」

「な!まて藤城!考え直せ!」

「そうよ譲一君!危険な事なのよ!?」

「譲一お前、デバイスを持ってないし、魔法だって念話しか使えねぇんだぞ！」

「いくら組手をするとはいえ、無謀すぎる」

「あぁ～そうだな…」

譲一は頭を掻くと、おもむろに服の袖を捲し上げる

いきなり何をしてるんだと皆は思うと信じられない光景を見た

ビシリ、ビシリと腕に次々にひびが入っていく

「こ、これは…」

「お、おい…譲一お前それ！」

「生憎と俺もシグナム達みたいに普通じゃねぇぞ？むしろバケモンだよ俺は」

すでに譲一の腕は叩き潰されたガラスのようなひびが入り、肌色より黒色の比率が上がっている

なんでもないように譲一は言うが異常すぎる

「い、痛くねぇのか？」

「全然痛くねぇよ?俺は空間そのものをぶち壊して門を作ることができるんだよ……ひびは見えるが、スタンドは見えてねぇみたいだな……」

ヴィータの問いにあっけらかんとしてる譲一は手のひらを上にすると、ひびの間からアイスが突き出てくる

そのアイスをヴィータにあげると腕のひびが瞬く間に塞がり、少年相応の腕に戻った

「こんな風に、俺は俺専用の空間に物を仕舞ったりもしてるんだが、そこの中に闇の書を入れておくぞ?時空…なんだかにばれても俺が取り出して持ってりゃあ、はやてが持ち主ってばれない寸法だが……どう?」

「どうって言われても……」

「……藤城は我々が思っているよりも強い…協力してもらおう」

「ザフィーラお前まで…」

「安心しろ、俺はそんじょそこいらの奴にゃ負けねぇよ」

それに…0秒の戦いをできる奴なんて魔法を使おうがそうそういないだろう?

彼の言葉に首を傾げつつもシグナムらは譲一の説教を受けつつ、ごり押しされて共犯者の仲間入りを認めるのだった

ヴィータが譲一から貰ったアイスをちゃんと食べ、正座の説教日以来髪を丁寧に洗うようになったのは完全な余談である

さらに慣れない正座にヴォルケンリッター一同、足のしびれに悶絶していた（特にシャマルが）のも余談である

夜の町並みを見下ろしながら譲一は今回の方策をそしてこれからの計画を練る

「……今の蒐集のペースじゃあちっとばかしヤバイよな…」

「藤城のいう通りだ…少し対象を増やすか？」

「それもいいんだがなぁ…そういやヴィータ、さっきいい獲物を見つけたみたいだが」

「ああ、そこそこの奴が」

「……ひとまずは蒐集するぞ？…後、蒐集の対象を増やすってザフィーラの案も検討しよう二手に別れると思うが編成は考え付いたら念話で伝える」

譲一はフードを深く被る
それを合図にするようにヴォルケンリッターが動き出す

「…平穏を侵すはなにも人だけにあらず…ってか？やれやれだぜ」

一人だけになった譲一も風が吹いた瞬間には跡形もなく姿を消していたのだった

誰もいなくなったビルの屋上にある貯水槽
その影から一体の異形が現れる

真っ黒なシルエットに背には卒塔婆を背負い、まるで生ける死者の如くゆらゆらと体を揺らしていた

「フム…ドウヤラ物語ハ始マッタミタイダナ……コチラモイソイデ計画ヲ進メネバナラナイ……大人シカッタ奴ラモ動ク…カ…」

その四肢をついたような姿勢のまま歩み寄った場所は先程まで譲一達が居た場所だ

この異形は彼らを見ていたのだ

「藤城譲一……マッタクノノーマークダッタ……スタンドノ全容ガ掴メズトモ能力ガ強スギル……ココハオレモ直接出ナケレバナラナイ……恐ラク奴ニハ流レヲ変エルホドノ力ガアル……シカモ、発展途上ノヨウニモ感ジラレタ力ダ……物語ニドノヨウナ支障ガ出ルカ読メナイナ」

異形は闇にドロリと溶け出す

影に吸い込まれるようにそれは消えていく

「藤城、譲一……フッ…サシズメ、コノ歪ンダ物語ノ『ジョジョ』ト言ッタトコロカ……ヤハリ、オマエハ主人公ノ座ニスラ座レナインダヨ富出庵」

完全に闇に溶けて静寂が訪れる

そしてその場に人気は今度こそ無くなった

物語は加速していく――

約束を違えてでも（後書き）

まずは藤城譲一のご紹介みたいなもんですね藤城譲一編？は

またスタンド使い達の原作裏でのいざこざぐらいです

まだ転生者達は小学生三年から五年くらい

大きな事件はまだ、なんです

次回より矢口亮編？なのですが先に転生者目録を挟んでからになりますね

矢口亮は強者を倒す策略を巡らしますが…果たしてどうなるのか？

フラグが立ちかかってるフェイトとの関係は？

そしてＯＨＡＮＡＳＩ☆はやっぱりされるのか？

……されるんだろうなぁ合掌

それと矢口亮編?でオリジナルスタンドの案を一部採用します

案をくださりありがとうございました

転生者目録その2（前書き）

あまり役に立たない人物紹介2

とスタンド紹介

※11月22日一部ステータス変更

転生者目録その2

藤城　譲一

主人公

色々カミングアウトしたが、実は若くしてたくさん人を殺めてた事が発覚

平穏の為に蔑ろにして、誰にも話さないように秘密にしていた光との戦いで、奪ってきた命から目を背けたまま平穏の礎にしていた自分を戒めた

実は柊由香が気になってしかたがない

ついでに髪フェチ

はやてはすでに毒牙にかかってる

小物な少年

スタンドを手にいれたことでいい気になった結果、痛い目にあった

矢口亮にギタギタにされた転生者の一人

矢口を始末するためと八神家の女性陣を自分の女にすべく行動

一緒にいた譲一にプッツンして挑んだら再び病院送りにされた

今は入院先の女性看護師にセクハラする日々を送る

再起可能でも、原作介入は諦めた

柊　光（ひいらぎ　みつる）

柊姉弟の弟

どうあがいてもシスコン

譲一同様、静かな人生を送りたい

姉と共に二人だけで生きてきた

姉に頭が上がらないように見えるが女性なら誰にでも頭が上がらない

キューブというスタンドを操るかなりの実力者

立方体（ブロック）に変えて戦うのが主なスタイル

人の目を見て内面を見ようとする癖があるが、ぶっちゃけ一種のセクハラである

姉には恋愛感情を抱いている節も

柊　由香（ひいらぎ　ゆか）

柊姉弟の姉

弟思いなだけでブラコンではない

ポニーテール前髪ぱっつん大和撫子な美少女

おっとりしてたりおてんばしてたりするがどっちなんだお前は

あたふたする様を見たいが為に譲一に弄られるようになる

やや人見知りしやすく、争いを好まない、何処か小動物っぽい、譲一曰く天使

ただ、大切なものを傷つける相手には勇敢になる

転生前はジョジョをあまり知らず、唯一知っていたクレイジー・ダイヤモンドが欲しいと言ったらマジでもらった

譲一の気持ちには薄々とだが感づいている

登場スタンド一覧

スカーサファイア

近接パワータイプの人型スタンド、本体は藤城譲一

普段は譲一のからだの中に潜んでいる

青い肌に全身に大量の傷がある

全身の傷は譲一が前世で実際に受けた傷跡なのだが譲一は気付いてない

顔にはベルトが巻かれ、その隙間から目が覗いている

戦闘中に目を塞いであった鎖は目を背けていたために存在していた

現在は鎖は消滅している

破壊力―B
スピード―B
射程距離―C
持続力―A

精密動作性―B
成長性―B

能力

空間に門を生み出せる

門は壊すことで空間を切り裂くひびとなり、そのひびの入る方向を定めることも可能

ひびはあくまでも攻撃ではなく空間にひびが入っただけである

このひびは質が悪いことに射線上に何があろうと切り裂いてしまう

つまり防御不能の災害である

人を殴るときに顔を殴ると何故か相手の体は砕け散る（この攻撃では死なない）

さらに顔以外を殴ると不発に終わった能力の行き場を失ったエネルギーが衝撃となって体内から襲う（ダメージの加減は可能）

能力の性質上、クレイジー・ダイヤモンドが最大の天敵

門も厳密には空間を壊して作ったものであり、ひびも直せてしまうため

フライングジャズ

意味不明型のスタンド

本体は小物な少年

鳥のように見えるがクラゲのようにも見える

全身は羽毛だらけでもふもふしている

先端に刃のついた触手を隠しており、その数は本体も把握できない量

破壊力―無し
スピード―無し
射程距離―∞
持続力―A
精密動作性―C
成長性―A

能力

本体、スタンドの触れるものを飛ばすこと

本体がダメダメだったのでその真骨頂を発揮できなかった不遇のスタンド

飛ばすものは何も触れるものでなく自身達を飛ばせ、扱いがわかれ

ばフェイト達並の高速戦闘をも可能

さらに飛ばす能力の恐ろしいところは相手の空気を飛ばして真空状態にしてやることも可能という点にある

気付かなかったというか能力を理解しきれていない少年は宝の持ち腐れもいいとこである

キューブ

近接パワータイプの人型スタンド、本体は柊光

初登場時は能力によって全身を立方体（ブロック）にバラバラになった姿

実際は白い角張った人型の姿をしている

破壊力―B
スピード―B
射程距離―C
持続力―B
精密動作性―A
成長性―C

能力

立方体になる

全身を大小様々な立方体に変えて操ることができる

空中の足場にしたり、盾にしたり、突撃したり応用が効きやすいのでもっぱらこの立方体の姿である

この状態のキューブは一切ダメージもスタンド能力も通さないので防御に非常に特化している

この性質を使った防御力はスターライトブレイカーでさえ防いで見せるたぶん

人型時は、殴った箇所を立方体で閉じ込めることが可能

心臓を殴れば血が供給されなくなるのでえげつない戦いかたになる

姉、柊由香を守りたいという想いが防御に比重を置いた能力になった

非常に強い想いが形になったが姉弟の過去に何があったかはいつか明かされるかもしれない

シー・クレイジー・ダイヤモンド

近接パワー、人型スタンド、本体は柊由香

スタンドというものをあまり知らない由香がたまたま知っていたクレイジー・ダイヤモンドを望んだ

が、本人（東方仗助）ではないためにクレイジー・ダイヤモンドが女性化した

命名は光、ただしめんどくさいので大抵はクレイジー・ダイヤモンドで通している

見た目は非常に変わっており、可愛らしくなっている

クレイジー・ダイヤモンドの面影はほんの少ししか残っていない

ステータスも能力もクレイジー・ダイヤモンドのまま

感情が何かしら高ぶると歪んだ形に直してしまう点も一緒である

転生者目録その2（後書き）

最近忙しくなってきた…

更新はもともと不定期でしたがさらに不定期になりそうです

そんな不安を抱えつつ今日も今日とてモソモソ書いてます

リリカルなのはにいかに人間讃歌を入れようか模索中ですのでもっと自由な時間が欲しいものです

強者へ挑む者（前書き）

時は遡って矢口亮編？スタート

強者へ挑む者

ＳＩＤＥ　亮

大きな一軒家の一室に転移してくる

そこでバリアジャケットを解除してデバイスをベッドに放り投げる

「クソォッ…！！何故だッ！？何故勝てないッ！？何故、倒せないんだッ！？」

何度も何度も俺は壁を殴り付ける

今回こそはと挑んだ

相手は作戦にはまり、死んでくれるはずのものを余計な闖入者によって無駄にされたのだ

「高町なのは…何故…庇った…？人の死ぬ姿を見たくないためか？」

トラップにかかった富出庵をあと一歩で首をはねることが出来たのに
横から現れたアクセルシューターによってそれはなされなかったから
だ

「どうして!?今、非殺傷設定を解除して斬ろうとした!貴方に何があったのかわからない!けれど簡単に人を傷付けちゃいけないよ!」

「どけ!高町!どんな理由があれ、そいつは倒さなければならないんだ!」

「どかないよ!そんなことさせやしない!」

「く!高町なのはァァッ!!」

はぁ…結局俺は彼女を退かせることもできなかった

紅い魔導師、その正体をなのは達は知らない

だからこそ、たった今届いたビデオメールを見て胸が痛む

『なのはと、戦ったんだってね…あのね…私には何があったかわからないけれど、あまり、無理、しないでね』

フェイトは、正体を知っている

アルフ、プレシアも知っているんだ

富出庵を殺害しようとすることも

早速、フェイトを悲しませてしまったな…

暗い気持ちに落ちる俺は携帯を開いて日付を見ると6月1日になっていたのに気付いた

「もうすぐ、6月4日……間に合わなかったな…」

それはある少女の誕生日

そして物語が再び始まるきっかけ

出来ればその前に富出を亡き者にしてやりたかったんだがな

とにかく、なのはとの戦いと復帰した富出の攻撃で傷付いた体を治さなくては…

「マスター…」

一匹の山猫がベッドの上に座っている
さっきの声は彼女が発したものだ

「…リニスか」

「少しはお休みなさってください…何度も怪我を負われてはたまりません」

「善処しよう…」

やはり、個人では限界がある
プレシアの事件に紆余曲折あって俺の使い魔になったリニスのバックアップだけでは無理がある
なら、俺の仲間を増やすしかない…か
スタンド使いの仲間をな
スタンドには可能性が多くある
奴がスタンドを知らない、見えないというのは最大のアドバンテージだ
それを生かしてバリアを抜き、察知されないまま倒す

難度は高い…が、この札を今切るしかない
確か、学校にはスタンド使いが何人か入っていたな…そいつらから選別するとしようか
その為にまずはリストを作るとしよう

「リニス、少し手伝って欲しいことがある」

「なんなりと」

俺は紙を取り出すと作業を始めるのだった

暫く役に立ちそうな人物のリストを上げているとデバイスに連絡が入る
相手はクロノからだった
内容はミッドチルダで騒がしていたある事件の犯人が地球に逃げたということだった

「……デバイスイーター事件…」

犯人と思われる、浮浪者のような人物

その写真を見続けていた

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

６月５日

夜の街の中をこそこそと歩き回る浮浪者が一人
全身をボロ布を何枚も纏って、擦りきれた靴をならしてよろよろと歩く
隙間から除く青い瞳はまるで何かに怯えているように忙しなく動いている

とりあえず、浮浪者は休める場所を探していた

一文無しの浮浪者は路地裏に曲がり、奥へ奥へと進む

少し開けた空き地に出ると回りの目を気にしながら何故かバラバラになっているドラム缶を過ぎて廃材などの置かれたビニールシート

の場所に腰を下ろした

「やっと…やっと帰ってきた…でも、どうしよう…」

ぼそり、ぼそりと紡ぐ言葉には不安が混じっている

その瞳からは今にも涙が溢れそうな程に

「……ミッドチルダから逃げ出して、よくもまあここまで逃げおおせられたなデバイスイーター」

「…っ！？」

顔をあげるとそこには顔をフルフェイスメットで隠された紅い少年が巨大な槍を肩にかけて佇んでいた

こんな近くになんの気配も無く現れるのは異常だ

いや、気付けば回りが結界に覆われている――

（こんなことにも気付かないなんて……いや、気付けなかっただけか…）

「ふむ、もう逃げる算段をたてているか…それとも、こいつを喰う

算段の方をたてているのか？」

「……」

「……だんまりか？何かアクションぐらいしてほしいんだがな」

紅い少年が肩を竦めると同時に少年は咄嗟に後ろにバックステップをとる

そこには大量の魔力球が撃ち込まれたからだ

立ち上っていた土煙が、少し晴れると浮浪者は座ったままだが手をあげると次々に魔力球が増えていく

「おいおいなんだこの魔力球の数は？冗談であってほしいんだがな」

もはや幾百もあるその球が並んでいくその光景は圧巻ではあるが、動こうとすると身動き一つ出来ない

何事かと見れば大量の多種多様なバインドが少年の足を縛っていたのだ

それだけでなく腕ごと槍にも地面から伸びるチェーンバインドが絡み付いて振るうことが出来ない

その動けない様子を確認した浮浪者、デバイスイーターは魔力球全

てを叩き付けた

あれだけ魔力球を叩き付ければ並の魔導師では立ち上がれないだろう

（あとは…あいつのデバイスを……）

しかし、デバイスイーターには相手が悪すぎた

土煙の中から異様に細く、巨大な腕がぬうっと延びたかと思うとデバイスイーターの小さな体を鷲掴みにした

さらにもう一本現れた腕が虚空を掴む

「か…はっ…こ、これは……」

「……暗闇は俺の影を強くしてくれる……」

はっとデバイスイーターが声のする方を見るとそこには少年が埃を払うしぐさをしながら歩いてくる

彼は身動きが出来ない状態であれだけ魔力球を浴びたのに無傷だったのだ

「魔力球の数は見事だったが種類も構成も威力もバラバラだったな？あんなものでは俺は倒せない……それにしても」

デバイスイーターをとらえていない腕に妙な生き物がいる
目と思われる部位は渦を巻いたような目をしており、手なのか足なのかわからない部位がぶらぶらしている
デフォルメした何かの怪物のようなそれの一番の特徴はギザギザに裂けた大きな口だ

「…たしか、何も居ないところからデバイスが何かに喰われていくという証言だったか……残念だったな?俺にはこいつは見えている」

「そん、な…」

「次々にデバイスを喰らって、魔法を学習…転移魔法を覚えて地球に来たということか…被害にあったデバイスは６７機、違法改造されたものや廃棄されたデバイスを合わせれば何機になることやら」

「く、うぅ…クリエイトブルース…！」

デバイスイーターが最後の力を振り絞るように呟く
その時に捕まえていたはずの珍妙な生物は口を大きく開いたかと思うと中からたくさんの杖が現れる

そのそれぞれの先端に魔力が集まっていく
デバイスイーターがやっているのは、曲がりなりにもなのはの魔力収束に似ていたのだ
放たれたのは巨大な腕に

「ぐっ！？」

少年の腕にも衝撃と痛みが伝わる
拘束の緩んだ腕から落ちてきたデバイスイーターは地面に叩きつけられながらも這いながら脱出しようとしていた
しかしそれすら叶わない
デバイスイーターを挟むように何かが地面に縫い付けた
その時にいくらかボロ布が破けてしまったが少年はお構いなしだろう
少年は痛みを我慢しながら槍を彼女に投擲していたのだ
しかも槍は４つの爪に半ばから別れてデバイスイーターが身動きできないように

「収束砲何てものを使うならせめて非殺傷にしてくれっての…」

文句をいいながらやって来るその姿にさらに恐怖を感じたのかデバイスイーターは、クリエイトブルースを動かそうとした

しかし、なにも反応を示さないことに顔をあげると撃ち落とした腕がクリエイトブルースの口が開かないように押さえている

「やめておけよ　お前はもう詰んでいるんだ…余計な真似をすればお前をこのままバラバラに出来るんだぞ?」

ガリガリと地面を裂きながら迫る爪を見てビクリとするデバイスイーターはもう敗北したのだ

「ところでお前を捕まえといてなんだが、このまま管理局に引き渡されるのと俺と一緒についていくの…どっちがいい?」

雨が降りだした中、少年は訳のわからないことを訪ねるのだった

強者へ挑む者（後書き）

フルフェイスメットって正直不審者感バリバリだよね

亮そのうち通報されそうだ

亮のスタンドはたぶん次話で紹介すると思います

デバイスイーター事件なんてオリジナルですが、正直都市伝説みたいなもんですね

被害者も管理局員じゃないです

こちらは本編を進ませます

亮達やなのは達から見た譲一を見ることになりますね

ついでに言っておくと矢口亮は腹黒いというか灰色な人間です

冷徹になりきれないのに冷酷であろうとする

善人にも悪人にも成れない中途半端な最低な奴なのかどうかわからん変人

そんな彼はどんなことをやらかしていくのか

あとは矢口亮にはサポートとしてリニスを連れてます

たぶんキャラ崩壊しますすんません

デバイスイーター？（前書き）

前後編に分けました

生暖かい目で見守ってください

デバイスイーター？

普通の年相応の男の子の部屋と分かる中に場違いな者がそこにいた

ボロボロの布を纏ったデバイスイーターだ

デバイスイーターは今現在どうしてこうなったのか訳がわからない

あのフルフェイスメットの少年がした選択

前者が嫌だったから後者にしたのだがなんの拘束もなく、転移に次ぐ転移で連れてこられたのだ

デバイスイーターはてっきり地球まで裏の組織が自分を狙ってきたのだと思っていたのが…

キョロキョロとしていると部屋に人が入ってくる

「そんなに俺の部屋が珍しいか？至って普通だと思うんだけど」

一匹の猫？と共にラフな格好をした少年が現れる

フルフェイスメットの下の精悍さと幼さの混じったその顔を見てさ

っきの選択といいとことん変な奴だとデバイスイーターは思った

「うーん…いつまでもその格好は悪いな…」

「？」

「というか、俺は顔を見せたのにお前は見せてくれないのかよ？」

「……」

「まぁいいか…ほら、着替えあるからそっちを着なさい」

「！」

ボロ布を捕まれた瞬間必死にボロ布をとられまいとするデバイスイーター

だが少年、矢口亮の方が力が強いのかあっさりとそれは剥ぎ取られてしまう

しかし、それがいけなかった

「あ」

「…は、…あぅ…っ！」

手入れの一切されてないボサボサの膝まで届きそうなくすんだ金髪
あまり日を浴びてないのか病人のように肌が白く腕は細い
そして

服どころか下着も一切身に付けていない産まれたままの姿
言ってしまえば、裸だった
しかも少女の

「～～～ッ！！」

呆然としている亮を他所にボロ布を引ったくったデバイスイーターは体を隠すように纏った

亮も見た目は少年でも中身は前世と合わせればおっさん手前のいい大人である

だが、精神は身体に引っ張られるというのであろうか

男の子相応にその裸体をマジマジと見てしまったわけで

「……お前……女、だったのか……」

「……」

デバイスイーターの少女の少し隈のある青い瞳は羞恥からなのか怒りからなのか、わからないが今にも涙が溢れんばかりに潤ませている

顔も同様に真っ赤に染まり、恨めしそうに亮をにらんでいる

……この沈黙が痛い

亮は亮でどうすればいいか思考停止している

カチコチと進む時計の針の音がはっきりと聞こえるほどその場は静まり返っていた

「……」

「……」

「……ヘンタイ」

「っ！」

「……セクハラ」

「っっ！」

「……ロリコン」

「それはないだろ！？」

「…マスター？」

「ハッ！？違うんだリニス！これは何かの間違いなんだ！！」

ドスの利いた声が亮を呼んだ

錆びて壊れた人形のようにギギッと首を動かしてそこを見るといつの間に人の姿になったリニスが、鬼がいた

がっしりと襟を掴むと部屋の外に連れていかれる亮

「……ドナドナ」

その様子を見ていたデバイスイーターはそう呟いた

その直後になにかを引っ掻いたような生々しい音と、亮の悲鳴が聞こえたのだった

SIDE　亮

「さっきは済まなかった」

「もう別にいい……」

顔に残る引っ掻き傷をリニスに治療されながら、未だにボロ布を纏うデバイスイーターの少女に謝る

というか女の子なんてわかんなかったんだよこっちは…なのにリニスときたら本気で引っ掻くなよ

ジロリとリニスを見ればやり過ぎたのをわかっているからか苦笑い

俺が悪いのはわかっているけどやられたこっちはたまったもんじゃないっての全く

「……っくしゅん」

「……服、着替える前に風呂入るか…リニス、風呂を沸かしておいてくれ」

「わかりました　マスター、さっきみたいなことしちゃいけませ

んよ？」

「わかってるよ」

部屋を出たリニスを見て、改めてデバイスイーターを見る

随分と布を大切にしているみたいでぎゅうっと抱いているな

しかし細い、細すぎる

まともな食事すらできてないのか

「デバイスイーターなんて通り名じゃなくて名前、教えてくれないかな」

「サリィ…サリィ・マレイヤ」

「うん、俺は亮、矢口亮」

「あ、きら？」

「そう亮、よろしくサリィ」

クロノから貰ったデータの詳細はこうだ

元々、クロノが別の事件を起こした犯罪組織を追っていたのが奇妙なこの事件の始まり

クロノが他の局員と一斉に検挙しに行ったときに何故か連中の持っていたはずの違法デバイスが根こそぎ無くなっていたのだ

クロノは隠したのだと思っていたが、組織の構成員はデバイスを見えない何かに喰われたと証言

そんなことあるわけないと思っていたが、クロノと同じ捜査チームに入っていた一人の局員がデバイスが何かに喰われるという流行りの都市伝説みたいだと漏らした

クロノは気になったのか独自に調査

結果、これまでにさまざまな場所でデバイスを喰われている場所が固まっていることと決まって喰われる時間が決まっている

都市伝説で片付けることは可能だったが、試しに現場を特定してみたところ、一人の正体不明の浮浪者が関わっていたのが分かる

映像も洗い直してみると確かに何かにデバイスが喰われている映像を発見した

直接追ってみたが捕らえることが出来ない

そして正式に被害届が出たことでデバイスイーターは指名手配になり、これは都市伝説ではなく『デバイスイーター事件』となった

それを勘づいたのかどうかは分からないが転送ポート等がある施設付近にて目撃情報多発

そしてついに違法な転送ポートのデータを改竄し使われた形跡を発見

監視カメラにどうやってか侵入してきたのかまでは分からなかったが、件の浮浪者は転送ポートを使用したのがバッチリ映っていた

詳しい座標は分からずとも地球に飛んだという記録だけを残して

こっちには転送ポートが無いのによくもまぁ無理矢理転送してきたなサリィは

クロノがもっとも気になったのがデバイスが喰われるという現象

彼は、クロノ・ハラオウンは、プレシアの事件で俺が使って見せたためにスタンドを知っていた

見えなくとも起こる不可解な現象

レアスキルにしては片付けにくいこの能力を

「サリィ、君にはこいつが見えるだろう?」

俺の影からずるりと這い出てきた細く巨大な右腕

これが、俺のスタンド

「うん、見える」

これで確証を得られたな

ミッドチルダにもスタンド使い達は生まれているという事が

「こいつの名はアンブラ、君のクリエイトブルースと同じだよ」

「この子と？」

サリィの後ろから覗くように現れる珍妙な生物

この小さなスタンドがたくさんのデバイスを喰っていたとは見かけによらずとんでもない能力を抱えている

しかしこの子、この様子じゃスタンドのこととか知らないんじゃないのか？

「こいつらはスタンドと呼ばれるものだ　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｍｅ（傍らに立つ者）とかＳｔａｎｄ　ｔｏ　ｕｐ（立ち向かう者）って意味なんだが…わかんないか」

「？？」

「まぁとにかく、俺は君が起こした一連の事件が気になって保護し

たんだ」

「わるいことなんてしてない……ただ、かえりたかった…お家、さがさないと」

「ミッドチルダ出身だろう?だったらなんで」

言いかけて、口を閉ざした

スタンド使いは転生者だ

ミッドチルダではなく地球に帰りたいというのは前世に暮らしていた家を探しているんじゃないか?

考えが幼い、ということはこの子の前世は、まだ幼いままに亡くなったんじゃ…

神様め、本当に節操なく転生させやがって…

どう説明すればいいんだかなぁ

元々、利用してやろうという考えだったがこうも幼いとそんな思いは霧散してしまう

「とにかく、これまでデバイスを喰ってきたそうだけど」

「かえるために、いろいろ知らないといけなかった……だから食べ

た」

「知識の吸収も可能、というわけか」

デバイス要らずなスタンド能力なこと

……仕方ないな、クロノには悪いが勝手に事件解決にさせておくかな

「でも、食べてたら黒い男の子においかけられた……とってもこわかった」

「クロノ…」

「あの子もヘンタイさんなのかな……？」

「……」

なんだか俺の友人がロリコンだとか一瞬考えてしまった

仕事熱心なのは分かるんだけど、なんだかなぁ

「サリィは何にも悪いことしてないって、俺が皆に言っておくよ
それと君の家探しも手伝うよ」

「ほんと！？」

「ほんとだよ」

「もうこわいことない？」

「ない」

サリィは目を潤ませながら唐突に俺にダイブしてきた

不意討ちだったんで頭を打ったがとりあえずサリィの頭を撫でる

この子はミッドチルダのスラムを一人で生きてきたんだ

そのせいでどれだけ寂しい思いをしたのだろうか

クロノとこっそりやり取りをしていたんだが、どうやら親は管理局員で両者殉職、家や財産を親戚に奪われて追い出されたらしい

それが前世の家探しのきっかけになったと見ていいか

とりあえずサリィは俺の保護観察下に入れることを申請した

それにしても家探しか

俺も全く気にしてなかったな……前世の家があるかどうか俺も探してみるかな

「マスター、お風呂の準備が出来まし…た…」

ガチャリと開いたドアの先にいたリニスが俺の状態を見て固まった

持っていたバスタオルなどがバサリと落ちていく

何を固まっているのだ、と思ってハッとする

自分の今の状態は全裸の少女を抱き締めるような形になっているわけで

サァっと一気に顔の血の気がひいて冷や汗が出る

リニスを見れば無表情で見下ろしてるわけで

「あの…リニスさん?これは深いわけがあってですね?」

次の瞬間、俺の目の前に使い魔の人影がそのまま飛びかかってきたのが見えた

「ちょ!?なんで飛びかかってくるんだお前は!?やめっ…やっ……アッー!!」

デバイスイーター？（後書き）

亮はロリコンじゃない

たぶん

そしてこいつも女性には強く出れないのか

譲一共々情けない奴め

シリアス固めしないでほのぼのできる話をもっと入れなくては

本作品のスタンドの由来は3部の傍らに立つ者と7部の立ち向かう者どっちも混ざったようなもんですね

意味合い的には柊由香、デバイスイーターは3部、譲一、亮は7部みたいな

亮編は本編のどこまで進めようかな…

あ、富出庵編とかそんなもんありません

富出は図々しく両主人公の話に割り込ませます

富出だから勝手に仲間が増えてったりするんでしょうね

ろくでもない手段で仲間を増やしそうですが

デバイスイーター？（前書き）

情に流されやすい男、矢口亮

デバイスイーター？

ＳＩＤＥ　亮

「もくもく」

「……」

「もくもく」

「……」

「もくもく」

「……」

「もくもく」

「……」

「……おかわり」

「……」

「アキラ？」

「あ、あぁはいはい、ちょっと待ってて」

今日は親の帰りが遅いのでリニスと二人で夕飯の準備をした

ただ、いつもの二人分ではなく三人分だが

少し癖のあるくすんだ金髪を後ろに束ねて、サイズの合わないブカブカなシャツを着る少女

デバイスイーターこと、サリィ・マレイヤ

風呂から上がった彼女はお腹を盛大に鳴らしたので俺達もと飯を作ったわけだ

やっぱりスラム時代はろくに食べてなかった見たいでご覧の有り様、あっという間にご飯を食べていく

ちょっと後で両親の分を作り直さなきゃな

しかしなんなんだこの可愛い生き物は

いちいち一生懸命頬張る姿にハムスターとかリスとか小動物を彷彿とさせるのは

「ま、マスター…お味噌汁あっついです…」

で、視線をずらせばリニスが熱々の味噌汁をチロチロ飲んでいる

ああ、猫舌か

なんなんだろうこの癒しの食卓

サリィはサリィで同様にチロチロ飲んでいる

大きなお友達の皆はきっとこの光景に萌えとか言いそうだ

というか俺も言いかけた

今ならその気持ちが分かってしまうなぁ

と、一人で和んでいるとリニスとサリィの箸が一つの唐揚げに当たる

その時になにやら思うことがあるのか動きを止め、にらみ合いを始め出す

「これは…サリィの…」

「…これは私が後で食べようと、とっておいたものです」

「む…」

「むむっ」

そして弾き飛ばされる唐揚げ
それをとろうと箸でチャンバラし始めてしまった
箸と箸のぶつかり合いで宙を舞い続ける唐揚げ
というか急にお行儀悪くなったね君たち

苦笑いを浮かべながらサリィの分をよそったご飯を置いておく
その時にサリィの目が一瞬輝いた気がした
素早くリニスの箸を弾くと宙の唐揚げに箸を突き刺す…！
って箸でそんなことしちゃいけませんから…サリィなにドヤ顔決めてんだよ
だが勝ち誇ったサリィは気を抜いてしまったのがいけなかった
そのままリニスが食い付いたという光景が目の前に広がったから
……リニスお前、そんなに食い意地張ってたっけ？
まさか自分の箸に刺さった唐揚げをそのまま食べられると思わなかったのか、サリィは愕然とした表情で咀嚼される唐揚げを見つめていた

「……はぁ、サリィ、俺の唐揚げ食べていいぞ」

「！」

「マスター」

「ただしリニス、テメーはダメだ」

「な、何故ですか！」

「だって大人げなかったもん　反省しなさい」

…リニスが何故か俺の揚げる唐揚げが好物になったのは分かってたけど、子供相手に本気で奪いに行くのはいただけない

思わず俺は笑い、つられて皆笑いだしてしまう

そういえば、フェイトとアルフの家でもこんな感じだったな

短かったがあの日々も心から笑えた

大切にしたいな、この思い出に今の新たな日々を

食後、サリィがバラエティー番組に食い入るように視聴し、そんなサリィの髪を整えていたリニス

さっきのチャンバラと違って普通に仲いいなお前ら…

それはさておき、俺はサリィの元にあるものを持ってきていた

サリィも俺が何を持ってきていたか見て顔を明るくした

「洗濯してみたんだが意外と上質な生地で出来てんなこれ」

「ん！」

それはサリィが身に纏っていた布

いざ洗濯してみると赤や青に紫、水色、オレンジと様々な種類の綺麗な布だった

ボロボロになっているがそれすら気にならないくらい手触りがいい

サリィに渡すとすぐにそれにくるまって気持ち良さそうに頬擦りしている

嬉しそうな様子から見て相当思い入れがあるみたいだな

ジッと見ているとサリィと目があった

「キレイにしてくれてありがと」

「どういたしまして、とよっぽど大事なんだなそれ」

「うん、これだけはおじさんから守った……ママとパパがくれたもの」

親戚に全てを奪われた…というわけではなかったんだな

二度目の生の親との最後の繋がりか

「サリィ、せっかくだから今度それを直しに行くか？」

俺もちょっとブルーブレイズで裂いちゃったからな…大切なものを傷付けた謝罪を兼ねてだ

「うん」

布にくるまりながら幸せそうな顔で頷いた

だとしたら予定を空けなきゃな…

富出を倒すために利用してやろうとしたつもりが思いがけない拾い物になってしまった

だが、張りつめた心が少しだけ癒された

この子は戦いに巻き込ませるのはやめるか

サリィの頭を撫でていると船をこぎ始めているのに気付く

そういやこの歳で目元に隈があったのを思い出す

何処かの執務官様に追われたせいでまともに眠れなかったのか？

と、遂に夢の世界に飛んじゃうサリィ

「もしかしたら相当の疲労がたまっていたのかもしれませんね」

「だろうな…クロノが原因臭いけど」

「何を言っているんですマスター　あなたも彼女と戦ったのも原因ですよ」

「うっ……すんません」

アンブラで絞め上げちゃったりしたからなぁ…その様子を見ていたリニスに具体的なことは分からずとも絞めていたのは分かるだろうし…

だからジト目で見るのはやめてくださいリニスさん

とにかく彼女を寝かせるとするか

布を離さないサリィをお姫様抱っこして自分の部屋に連れていく
ベッドで寝かしてあげると俺はサリィをリニスに任せて一度キッチンに戻った
両親もヘトヘトで帰ってくるんだろうしな
と、噂をすればドアが開く音が
「亮ぁぁ～飯～」
「ほら、しっかりしてくださいよあなた…」
「お帰り、母さん父さん、残念だけどまだご飯は出来てないよ」
「「な、なにィィィーッ!?」」
なんだかこの世の終わりのような顔をされた
本当に大丈夫なのかこの両親
「あら?リニスちゃんはどうしたの?」
「ああ、ちょっとね　後でその事含めて話があるから、ほら着替えてきなよ」

放っておくと玄関で泥のように眠るからな
さっさとご飯作って話して眠らせよう

で、サリィがミッドチルダからきたとかそういうことは伏せて話を通す

子供好きだから別に構わないだろうと思っていたが…

「大変だ母さん！亮が女の子を助けたぞ！今夜は赤飯だ！」

なんでだよ父さん、意味不明だぞ

しかも母さん料理出来ないの知ってるでしょうが

「女の子……ならどんなお洋服を着せてあげようかしら？」

あ、母さん服のデザイナーだから、サリィ着せ替え人形にされるかもしれん……程々にしてもらおう

「でも、フェイトちゃんが亮にいるでしょう？まさか浮気なの亮？」

「あぁッ！母さん！僕たちの亮がッ！この歳で亮がッ！不良を通り

越してプレイボーイにッ！」

「なってねぇよッ！？あとフェイトとはそんな関係じゃないからな！？」

暴走し始めると会話がどんどんおかしくなる…

フェイトか…

あのビデオメールを思い出すから今はあまり聞きたくないのかもしれないな俺は

親の馬鹿な話に振り回されること一時間

疲労で仲良く夢の世界に飛び立った両親を見てから自室に戻る

「マスター」

「リニス、お疲れさん…サリィは？」

「よく眠ってますよ…それで…彼女なんですが…」

「……考えが変わったよ…彼女は戦わせない」

サリィの頭を撫でながら俺はリニスが聞いてくるであろう問いに答えた

正直、ここまで強力な力はものにすれば凄まじいだろう

だが、他の転生者と違って本当に子供である彼女を富出にぶつけていいものだろうか？

なのはやフェイトと違って意志が固まっているわけではない

無理強いをするとか誘導してやるとか、そんなことは純粋な彼女を兵器にしていくような気がしてならない

リニスを見ればホッとした表情を見せていた

冷徹にならなければいけない俺は複雑だが…これが、正しい選択のはずだ

この家庭ならサリィは大丈夫だろう

富出を倒すには他のスタンド使い達を当てにしようか

「んぅ…」

サリィの手がガッチリと俺の服を握ってしまう

これは……脱出出来そうに無いなぁ

リニスと苦笑いして俺はサリィの横に寝そべる

「こうして見ると、同い年とは思えないな」

「マスターの妹か娘に見えますよ」

「ハハハ、娘は言い過ぎじゃないか？」

「ふふふ、そろそろ寝ますか」

「ん、そうだな…リニスも一緒に寝るか？」

「ご冗談…と、言いたいところですがお言葉に甘えて」

ベッドで3人、川の字に眠りにつく

リニスはきっとフェイトとアルフを思い出したのかもな

とか言って俺もＰＴ事件のフェイトのことを思い出してしまったり

心から安心して眠るサリィの姿にフェイトがダブって見えてしまったからな

俺も眠気が襲ってきたからアンブラを出して部屋の電気を消した

なんだか今日は久し振りにいい夢を見られそうな気がした

デバイスイーター？（後書き）

デバイスイーター、サリィを書いてるの結構楽しかった…

亮はサリィを戦いに参加させないつもりのようだけれど果たしてそのままで居続けられるのか？

スタンド使いは引かれ合うということを少し甘く見ている節があるんですよ彼は

そもそもデバイスイーターとの接触もそれによるものと気づいていないのだから当然のこと

次はA-s本編、ヴォルケンリッター襲来、ただしスタンド使いたちの舞台裏です

そして亮VS譲一へ…

譲一の本気を垣間見せれたらいいなぁ

サリィ、リニス、そしてまだ再会していないフェイトは亮サイドの癒しに出来たらいいと思ってます

今さらリニスなんで生きてるん?という疑問については、亮が優れたサポート要員として無理矢理再契約しました

つまり退場済みの人物で富出討伐に利用してやろうという気満々でしたが、やっぱり冷徹になりきれずに家族同然の関係になりました

ちなみにリニスは消えたと皆思っているため、まさか復活しているなどとフェイトはもちろんプレシアすら気付いてません

フェイトらは出会う機会は来るのだろうか…

事件の始まり（前書き）

台詞はないがある人物が久方ぶりの登場

ついでに今話は荒木飛呂彦先生の作品、デッドマンズＱ　のネタが含まれています

事件の始まり

ＳＩＤＥ　亮

『フェイトは嘱託魔導師になったわ　私はまだまだだけれど、もうすぐそっちに行くと思うの…その時はフェイトをよろしく頼むわ』

今朝届いていたプレシアからのビデオメール

フェイトが来るのか…

物語が始まるまであとわずか――

学校のない休みのある日、違法駐車されてる自転車の隙間を縫いながら一人の少女とはぐれないように手をしっかり握る

膝まで伸びに伸びたくせのある髪を揺らし、修繕された布をマントのように体に巻き付けたサリィを伴って俺は街中を歩き回っていた

何も考えなしに歩き回っている訳じゃなくてサリィの前世の家探し

中なのだが…

まあ、サリィと寄り道し放題の散歩なんだよね今

花屋の前で3分ほど花の香りを嗅いでみたり

本屋に立ち寄っていたりしていた

「鼻をなくしたゾウさん……どうやって草を食べたり、シャワーを浴びたりするんだろう?」

「買って読んでみるか?」

「ん……別にいいや」

別に売れてそうもないような本だしなぁ…中の話に好奇心は持ったが…

今は適当に中を見て回っている

この間にも仲良く手を繋いでたりするのだが、何か微笑ましい目で見られて恥ずかしい

こんなときにクラスメイトに会わないことを祈る…

「あれ?亮じゃない」

出会いました畜生

バッタリとアリサに

で、当然、俺の隣にいる見知らぬ女の子のサリィに目が行くわけで

「亮、また女の子をたぶらかしたの？しかも外人の」

「違うわ馬鹿、この子は遠い親戚で家で預かってるだけ」

「ふぅん…フェイトが聞いたらどうするつもりなのかしら？」

「なんでそこでフェイトが出るんだよ」

いかんな、このままではアリサにいじくり回されてしまう

と、サリィが俺の後ろに隠れてしまった

チラチラとアリサの様子を俺の影から覗いている

なんだこの可愛い生き物は

「……亮、ホントになんなのその可愛い生き物は」

ブルータス、お前もか…じゃなくて

「この子はサリィ・マレイヤ　よろしくしてあげてくれ」

「よろしく……」

「で、こっちはアリサ・バニングス…俺が通う学校のクラスメイトで、こう見えてお嬢様だ」

「こう見えてってどういうことよ」

どういう意味でしょうね？

とまあ、俺としては見知った顔のいないサリィの友達とかになってくれればいいんだけど

アリサなら問題ないだろう

彼女なら面倒見がいいから仲良くなってくれればいいな

俺の意図を察してくれたのかアリサは笑顔で話しかける

「サリィね、よろしく」

「あ、あぅ…」

人見知りしやすいのか、恥ずかしそうにもじもじし始めてしまうサリィ
顔も赤くなって余計に俺の影に隠れてしまった
ま、少しずつ仲良くなっていけばいいさ
アリサもサリィのそんな様子に苦笑いしている

「私はこのあと直ぐに用事があるから、またね」
「おう、また今度な」
「サリィも、また会いましょう？」
「ん」

小さく手を振って本屋の外にいくアリサを見送っていたから、ちゃんと友人になれるだろうな
友人か…父さんに相談してサリィも学校に通わせてみるか？
考えていると袖を小さく引っ張られた

「アキラ」
「ん？」

「変なのがいる…」

「変なの…？…げ」

サリィの視線を追うと電柱の影から覗く一人の男子

というか富出だった

アリサと一緒にいたのを見られたか…というかサリィを見る視線が怖い

「…なんであんな面倒なのがいるんだ…」

「アキラ？」

「あんなのを気にしちゃいけない、行くよサリィ」

気付かれてないと思っているのか、こちらをずっと覗くその姿が気持ち悪かったのでサリィの手を掴んで早足に本屋を出た

俺の正体はバレてないと思うが…向こうから話しかけられることが多いからバレたのかとヒヤヒヤすることが多い

「変なのがついてきてるよアキラ」

「クソッ…あいつ早いな」

尾行下手くそなわりによくついてくるな

というかなんでついてきたんだあいつは

転移してしまおうか？

と、目の前にバスを見付けて閃く

「サリィ、バスに乗ろうか」

「ん」

サリィの手を繋いで俺はバスに乗り込み…直ぐに降りた

人混みをかき分けて、近くのコンビニに入る

サリィはサリィで？が一杯頭に浮かんでいる

「バスの方見てみ？」

「あ」

そこには発車したバスに乗り込んでしまった富出が俺達を見て何か

言っているのが見えた

バスの運転手さんには悪いことをしてしまったが、富出が乗ったあとにドアが閉まる寸前にすぐ出てやっただけだ

人をストーキングしてくれたんだ、次のバス停まで行って僅かな無駄金を使ってくれ

いつも追いかけ回すもんだから今回は少しだけ胸がスッとした

「知ってるひと？」

「知りたくはなかった奴だな、いいかサリィ？あいつにもし話し掛けられるような事があったら直ぐに逃げなさい　ヘンタイさんだからな」

「そうなの？…こわい」

事実、嘘は言ってないからな…俺も正直あの変態ぶりは怖いと思うとてつもなく強いからなお悪い

うん、サリィは絶対にあいつにぶつけちゃ駄目だ

教育によろしくない

これから先もサリィは街に出るだろうから、気を付けないとな

今日は初日ということもあって家は簡単には見付からなかったが、
サリィは楽しそうに笑っていたから良しとするか

「サリィ、そろそろ昼食にするか」

「ん！」

昼飯は牛丼を食べに行くとしますかね？安くてガッツリ食べられる
なら

「アキラ」

「んー？」

「また、散歩に行きたい」

「おいおい、家探しはどうした？」

「家も探す……でも、今日は楽しかったから…ダメ？」

「普段は学校だから無理だけど…時間が空いたら行こうか」

「今度はリニスも」

「ああ、そうだな」

笑いながら手を握るサリィに俺は握り返してあげるのだった

そして運命の時間が訪れる

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

街中に舞う黄色い閃光

それを追うは、剣光閃く炎

結界に覆われた街を光が縦横無尽に飛び回っていた

弾ける火花はそのいかに激闘かを物語っている

「はぁぁッ！！」

桃色の髪を靡かせ剣を振るうのは烈火のシグナム

「くぅッ！？」

その一撃は対峙していたフェイトのデバイスを切断して吹き飛ばすほどだ

一方でオレンジ色の毛並みの狼、アルフが青い狼、ザフィーラに翻弄され、苦戦している

かつて一人の少女に力を与えた少年、ユーノは鉄槌を振るうヴィータの猛攻に二の足を踏み続ける

結界外に転移を試みようとアルフと念話で絶えずやり取りしていた相手が恐るべき実力者と正体不明の魔法を使うことに戸惑いながらもＰＴ事件を乗り越えた彼女らはなんとか拮抗し続けた

各々が戦いに明け暮れるなか、一人の紅の少年が電波塔の上でその光景を見ている

「……リニスのおかげでどうやら富出の参戦は免れたか…」

その体格に似合わない巨大な槍型デバイス、ブルーブレイズを肩に担ぎながら、物語が無事に進んでいくのを見届けていた

（出来れば流れがこのまま行けばいい…このままだ、このまま…）

無意識にフェイトを視界に捉えながら余計な闖入者が現れぬことを祈るように

だが、最後の守護騎士の位置を確認したところであるものを見付けてしまった

それを見て少年はフルフェイスメットを被り、駆け出したのだった

目指すは癒しが領分の守護騎士の傍らに立つ紺色のパーカーを着た少年――――

「シャマル」

「何ですか？譲一君」

「どうやら余計な奴がいるみたいだぜ？俺が相手をしてくるから別の場所でやってくれ、転移のルートも変えておけよ」

「わかりました…気を付けてね」

シャマルが転移したのを見届けると紺色のパーカーを着ている少年、藤城譲一も音をたてずに跡形もなく姿を消したのだった

そして

「よう、不審者…そんな格好して、何処の仮装パーティーに行く気だ？」

「…！」

ビルの屋上、目の前に突如彼は現れた

フードの影から覗く獰猛な目付き

彼は逃がす気が無いのは分かっている

やることは簡単だ

「藤城、譲一だな？」

「！なんで俺の名を？」

「答える義理は無い…ただ…お前のスタンドがどれ程の力を持っているか…」

紅の少年、矢口亮は槍を構え、影から巨大な腕が這い出てくる

それを見ていた青の少年、藤城譲一は自らの背後に傷だらけの巨人を出して身構えた

「絶対強者を打倒しうるのか、歪みに太刀打ちできるだけの力があるのか、俺に見せてみろォッ！！」

正史とは違う、別の思惑が絡む物語の影でまた一つの戦いが始まった

事件の始まり（後書き）

わかるひとならわかるデッドマンズＱ

短編集も面白いんです

たぶん短編集のネタはそのうちに他にも使うと思います

富出も今回は早々に退場しましたがちゃんと出番があります

ＶＳ原作キャラはいつになるやら

赤と青、邂逅（前書き）

第一次主人公バトル

赤と青、邂逅

譲一は相手がただ者でないと直ぐに勘づいた

デバイスを持っているため魔導師なのは分かるが、こいつはそれだけでない

スタンド使いだと直感している

そして紅い少年の影より現れた腕がスタンドであろうと

（小手調べと行くか？）

譲一は相手に向かって走り出した

既に両腕はひびがまんべんなく入り、一度振るえば空間を引き裂くだろう

対する亮も槍を構え、牽制の魔力弾を撃ちだし始める

譲一を狙ったそれらは全てスカーサファイアが殴る事で弾いていく

亮はそれを見て数を増し、さらに誘導弾を混ぜた

高町なのは程の精密さは無いがそれでも厄介な動きをするそれを見て譲一は眉をしかめ、舌打ちした

若くして数多の死線を越えた譲一だが、そもそも彼は魔導師と戦うのは始めてだ

ヴォルケンリッターにどういったものがあるのか聞いてはいるが実際に目にすれば話は違う

しかも相手はなのはやフェイトに匹敵する相手

そこらの雑魚などではない

「せめてスタンドが速けりゃ対応が間に合うんだが…ここまで厄介なのか魔法って奴は」

紙一重、スカーサファイアが弾いて譲一が避ける

彼の歩みは少しずつ速度が落ちていた

魔力弾でさえ、てこずり出す譲一

その様子を見ていた亮も動きだす

「アンブラッ！！」

影の腕が譲一の影を、足を掴んだ
その時に譲一はビクリと動きが止まる

「な、なんだ?足が動かない?」

ハッと顔をあげると一息に槍を構えて亮が飛び込んできていた

「スカーサファイアァッ!」

避けることが出来ない譲一は自らのスタンドでアンブラを殴り付ける
が、アンブラは影に溶け込んで消えて見せ、拳はむなしく空振りする
そして槍は譲一に突き刺さった…

「なッ!?」

ように見えるがスカーサファイアの門を通して譲一にダメージは通らなかった
虚空の何かを通り、別の出口から切っ先が出ている

しかもそのまま槍は抜けないのだ
すかさずスカーサファイアは亮に殴りかかる
拳があと少しで亮にあたる
大の大人でも簡単に吹き飛ばす威力を持ったそれは亮のメットを容易く砕くはずだ
だが可笑しなことに気付けば直前にスカーサファイアは宙に吹き飛んでいた
いや、吹き飛んでいたのは譲一だ
別の影から出た腕が、彼の服を掴んで放り投げたのだ
「くッ！う、うぉぉッ！！」
ビルの屋上から投げ出された譲一は空中にひびを入れてそれに腕を突き刺す
肩が外れそうな感覚に襲われるも、地上に叩き付けられるのは回避して見せた
その間に亮もバリアジャケットを展開したまま、槍を待機状態の紅いネックレスに戻すことで虚空から槍を引き抜いた

顔だけを向けて再び相対する

宙にぶら下がっていたはずの譲一はビルの屋上に再び帰ってきていた

「テメェのスタンドが大体どんなのか分かってきたぜ…全てはテメェの影から始まっている！月明かりや他のビルから漏れる光だ！その影に自らの影が入ればお前はどの影だろうとその腕を出せる！」

「こいつ……あの短い戦いにそこまで見抜いたのか……（学校の普段のあの態度といい、目立たぬように生活していたときといい…一度その才を開けばこれか……前世の経験なんて関係ない…何て奴なんだ）」

譲一はどれだけ情報が少なかろうと相手のスタンド能力を推理し、ひもといて見せる

今回は初めに亮のアンブラが本体の影から出たのを確認したから影に関する能力だろうと踏んでいた結果が先の発言である

（もっとも…全てを知ったわけではないみたいだがな）

譲一はアンブラの影を掴んでくる能力を警戒していたために影が近くに無い場所に来ていた

だからこそ亮はデバイスを待機状態にしたままにしている

そこから亮が何かしてくると感じた譲一は腕を振るった
何も譲一はスタンドで直接殴るだけが攻撃ではないのだから

「オラァッ！」

バキリ

空間を、そんな音を出しながら大量のひびが走った
壁や地面を裂いていくそれらを見ていた亮を後ろから出た腕が掴んで射程から逃れた
その場所は唯一、譲一に近い貯水槽の上に降り立つ
月明かりを浴びて亮の影が大きくなり、譲一の影を呑み込んだ
そして譲一を左右から腕が忍び寄る
それは先程よりも二回りも巨大になった腕だった

「！このッ！！」

スカーサファイアですかさず左右から掴みかかろうとするアンブラ

をしのいでいく

魔力弾より手数の少なくスピードの無いそれをスカーサファイアが捌けないことがない

何よりも自分の影が相手に呑み込まれているせいで掴まれることがないのだ

そして、アンブラに反撃を――――

「ぐぁぁッ!?な、なにィッ!?これはッ!?影から足が出ているッ!?」

油断しきった譲一は突如現れた巨大な足に蹴り飛ばされた

スカーサファイアでガードしていた為に大事に至らなかったが、完全に今は油断していたのだ

（不味い…スカーサファイアでガードしちまった…！）

その間に譲一の腕をアンブラが掴み、足にはチェーンバインドが絡み付く

影から足が更に一本現れ、今か今かと譲一を蹴り砕こうとしていた

「てっきり腕二本の遠距離操作型かと思ったが…こいつは驚いた…足が出てくるなんてな……普通もう一本、二本の腕じゃないか？」

「人間に三本目や四本目の腕が無いだろう？なんたって影法師（アンブラ）なんだからな　さぁ行けッ！！」

「それもそうかよ！スカーサファイアァッ！」

巨大な蹴りと拳によるラッシュのぶつかり合いが始まった

激しくぶつかり合うその一撃はアンブラに軍配が上がりかかっている

アンブラにスピードはなくとも、パワーの面においてはスカーサファイアを上回っているからである

アンブラに掴まれた腕、その手の甲は次第に裂けていき血が滴り落ちていく

自分が不利になっていく中で譲一は何故か冷静でいられた

四肢を封じられ、目の前の攻防も劣勢に追い込まれているのにだ

（何故、今この俺の腕を握り潰さない？奴は、舐めているわけではないようだが、まさか本当に俺を試しているのか？自分が俺より上のように思っているようだがそれはテメーの勘違いだぜ…！）

「ガッ！腕が…スタンドは離れているはずなのに……！」

今度は亮の両手から血が滴り落ちた

亮が譲一のスタンドを引き離したその判断は正しかった

譲一の腕のひび、譲一本体がスタンド能力を行使するためにはスカーサファイアがそばに居続けなければ使えない

だからスカーサファイアとアンブラのラッシュでそばより離したのだ

アンブラの両手をひびで突き刺すことなど出来るわけが…

そこまで考えハッとなる

……突き刺す？これは、ひびじゃない…！

「藤城譲一…お前は今、何を持っているんだ！？」

「ナイフだよナイフ　ひびの中に俺はナイフをいつも仕込んでいるの、さッ！！」

そう言って手のひらの果物ナイフをアンブラから引き抜く

それを見せつけるように弄んだあとにラッシュを繰り出していた足のアンブラに投げ付ける

動きの止まった足を守るために腕のアンブラが弾くために動いた
その間にスカーサファイアを一度退かせて、チェーンバインドを手
刀で切り落とす

「影の中にいちゃあ不味い…外に出なきゃ…ってうおぉッ!?」

亮の影から逃れようと光のあるところに走り出したが譲一は突然盛
大にすっ転ぶ
見れば足から影が伸びて亮の影と繋がっているのが見える

「俺の影はお前を捕らえる檻だ!逃げれるわけが無いだろう!」

だがその言葉は譲一に発するべきではなかったと亮は直ぐに後悔す
ることになる
スカーサファイアが、下に向けて拳を下ろそうとしているのが見て
しまったからだ

「ヘッ!こんなショボい檻なんかで俺がおとなしくなるか!バラバ
ラにぶっ壊してやんよォッ!!スカーサファイアァッ!!」

譲一はひたすらに殴り続けた

まさかビルの中に逃げる気か？

譲一が何をする積もりかわからないが黙っているわけにもいかない

アンブラが譲一を殴ろうと動きだす

「今さら何をしても遅ぇんだよ！オラァッ！」

最後の一撃が入ったときにガクリと亮の視界がずれる

そしてビル自体が振動をおこし始めた

「な！？まさかお前！？このビルを！？」

ビルに、大量のひびが入る

己の重さに耐えられなくなったビルはバラバラに砕け始めた

当然、亮の影という檻は崩れてしまう

それどころか亮の影そのものが無くなっていた

「くそッ！？影か暗闇さえあればいいが、ここまで影が安定しなければ俺はスタンドが出せない！しくじったか！！結界内とはいえ、

ビルを倒壊させるとは何て奴なんだ！！」

デバイスを出して槍へと変えると自分に当たりそうな瓦礫を次々に払い落としていく

ここまで思いきったことをしてくるとは思わなかった亮は譲一の分析が足りなかったと後悔していたのだった

崩れるビルの中、亮は一点を目指して駆け抜ける

そこにはスタンドの力で隣のビルの屋上に逃げ込んだ譲一が見えた

追い付いた亮をスカーサファイアが殴ろうとしたが亮は突然待ったをかける

「藤城譲一…お前は、富出庵を打倒出来る可能性が高い…！ならば戦いの経験を積ませ、僅かでもその力を高めさせなければならない！お前は知らないだろう譲一！既にお前は富出の敵となっていることを！その芽を摘まれないように成長を促してやるのが、闇の書の物語における俺の役割だ」

「お前……一体何を言ってやがるんだ？富出が敵って……」

「俺達スタンド使いというイレギュラー…なぜ転生したのか、神々の目的を忘れたか？」

「……世界の波長に合わない高次元の魂の排除…まさかそれが富出だって？」

「もう既に物語は歪んだ　奴のは俺達のような介入ではない、改竄だ　世界が進化し続ける富出の存在に耐えきれないからな……お前は静かで平穏な生活を望んでいるんじゃなかったのか？」

「！？お前まさか、うちの学校の誰かか！？」

「富出庵はこの世界に生きる人間全ての命を見下している　お前はこのままでは静かで平穏な生活をするなど到底出来ないだろう」

亮はそう言うと視界の端に桜色の閃光が結界を貫いたのが見えた

譲一はヴォルケンリッターの誰かと念話したのか離脱しようとしている

今回はここまでのようだと悟った亮は踵を返した

突然の様子に譲一は何かを言いたそうにするも言葉を紡げない

「富出は巨大な剣型デバイスを持っている」

「あ？」

「もし、戦うようなことがあるなら全力で挑むことだ……次に会うまで死ぬなよ…さぁ行け、まだ管理局に捕まりたくあるまい」

譲一は首を傾げたあと、その場から跡形もなく立ち去った

亮は、なのは達が居るであろう方向を見たあとに転移したのだった

赤と青、邂逅（後書き）

風邪引くわ熱が出るわで頭が朦朧としながら書いた今回のお話

赤と青シリーズの話は対に青と赤シリーズを作る予定です

富出がラスボスみたいなことを言って譲一を脅した亮

果たしてこの行動が吉と出るのか凶と出るのか…

さて、次回か次々回辺りで募集してくれたオリジナルスタンドを出そうかと思います

それにしても熱がッ風邪がッ鼻水が酷いッ！

次回の更新が遅れるかもしれません……

少し療養します…

迫る刺客？（前書き）

熱に苦しみながら書ききった！

３話構成、亮チームに新たな人物参加、募集スタンド使わせていただきます

迫る刺客？

今日、転校してきたフェイト・テスタロッサは溜め息を漏らしていた
かけがえのない友人となったなのはやビデオメールのやり取りしか
なかったアリサ、すずかと出会えたのは嬉しかった
しかし、彼女はもう一人の人物と再会できるのを心待にしていた
彼ともう一度会いたいと思っていたのに

「フェイトちゃん、溜め息ばっかりついてるけど大丈夫？」

「なのは…うん、大丈夫だよ、大丈夫」

「どうしたんだいフェイト、悩みがあるなら俺に相談しなよ」

「何勝手に会話に参加してんのよ！アンタはどっか行きなさいよ！」

「アリサちゃん…ちょっと言い過ぎじゃ」

そんな原作組＋異物を遠目から見る地味目の少年とちょっと小学生
らしからぬ兄弟達

「あれが富出か…ホントにウザいな」

「虹村先輩…ズバッと言いますね…」

「あれ？今日は矢口の奴いねぇな？」

「ほんとですね？どうしたんでしょう」

普段通り、もうひとつの穏やかな顔を見せる譲一は矢口が居ないことに怪しみながらも富出の存在を警戒するのだった

ＳＩＤＥ　亮

「ごめん…亮君…手伝ってあげたいのは山々なんだけど、私だって長く生きたいの」

「そうか…」

「でも、何かあったら私も手伝うよ」

「わかった、ありがとう」

また一人、転生者が戦いから遠退いたか…

誰しもこの原作の登場人物と接点を持つことはあっても、ある一点により介入をためらってしまう

言わずもがな富出庵の存在だ

スタンド使いでないにも関わらず圧倒的な強さを持つ奴を相手には誰しもが戦いを避けたいから

そりゃスタンドを通り越して本体を瞬殺出来るのだから自殺行為もいいとこなのだろう

そんなやつに何度も挑む俺は何て物好きな奴なんだか

誰かに強制された訳じゃないけれど、富出の本質を知ったからにはなんとしても倒さなきゃならないと自分の心に素直に従っているだけだ

道は険しく、まだまだ彼方の奴に刃は突き立てれていないが、いつか必ず……

さて、聖祥内にいるスタンド使いはよくも悪くも己の欲望や野望に忠実なやつが多い

中でもヤバい奴は三割ほど再起不能にし、それ以外は再起可能程度

に病院送りや脅しに脅しまくってやった

他の転生者は藤城譲一の如く平穏に生きようとしている

俺としてはこの柊姉弟を引き込みたかった

弟、光のキューブの防御力には目を見張るものがある

姉、由香もスタンド使いらしいが…正体を一度も見ていないんだよな…

接触したところで門前払いされてしまったから諦めるしかないが

はてさてどうしたものだろうか…学校をサボってまで街中をうろつき回っていると先日家族になった人物を見つけた

「あ、アキラだ」

「よ、なんなんだその格好？」

シュタッと片手を小さくあげながら本屋から現れたサリィの元に行く

何故かサリィの格好は黒いドレスのような、たくさんのフリルのついた服を着ていた

近いもので言えば黒ゴスのような感じだ

ただ母さんは全く別物と言っていた覚えがある

何処が違うのか俺には見当もつかないのだが…このドレスってフェイトにプレゼントするとか言ってなかったか母さん？

それの上に色とりどりの重なった布をマントのように包まれていてどっかの不思議の国に出てきそうな印象を与える

しっかし相変わらず不健康な顔色してんなあサリィは

隈も取れてないし大丈夫だろうか

頭をグリグリ撫でながら適当に二人ならんで歩いていた

このままじゃ不味いんだよな…ずるずる時間が流れてしまう

俺のスタンドがもっと成長すればいいんだが…そんな無い物ねだりしても好転する訳じゃないし…

サリィを連れ立って歩いていたら公園にたどり着いていた

適当に自販機で買った缶コーヒーを開けながら近場のベンチに座る

サリィにはオレンジジュースを持たせてやった

「……犬…」

「犬？」

サリィが随分と熱心に見る犬

それはオレンジ色の毛並みの可愛らしい子犬が…

「ブゥッ！？ゲホッゴホッ！？」

「アキラ？大丈夫？」

「あ、あぁ平気だ平気…」

び、ビックリした！あれどう見てもアルフじゃん！

あれ？今、みんな学校だよね？なんでアルフがいるんだ？

「触ってきてもいい？」

「あ、ああ…構わないけど…」

子犬フォームでいるってことは別の誰かが散歩に連れ出したってことか？一体誰が？

そんなことを考えていると黒を中心とした服を着た少年が隣に座った

ああ、そういうこと

「わざわざこんなとこに来てどうしたんだ?執務官殿、仕事で忙しいんじゃなかったのか?」

「ああ忙しいさ、今も仕事で地球に滞在してるよレッドマン」

隣に座ったのはクロノだった

わざわざ会いに来るとはめんどくさい奴め、デバイスのやり取りにした方がいいだろうに

「君は今は学校に行っている時間じゃないのか?」

「サボった　やらなきゃならないことがあるからな」

「そうか…で、彼女が…」

「ああ、件のデバイスイーターだよ　一般魔導師キラーな能力を抱えてる…おまけにスタンドがデバイスの代わりを果たす何ともデバイスいらずなスタンド使いさ」

「君のといい、随分と滅茶苦茶なんだなスタンドと言うものは」

「スタンド使い同士が戦えば必殺の応酬だったりするのはよくあることさ　一見大したこと無さそうな能力が頭使えば反則技になったりするからな」

クロノの嫌そうな顔に肩を竦めることで答える

一部のスタンドを除いても大抵のスタンドは普通の人間には見えない

見えない点に関しても魔導師も例外じゃない

何度か戦ったクロノはその嫌らしさが分かるのだ

アンブラだってかなり弱点だらけのスタンドだが、いくら露骨に弱点をさらしても見えないのだからただの魔導師にはかなりの脅威になる

なんたってスタンドとの戦いに重要な射程を一切計れないのだからま、見えないながらもアンブラを攻略して見せたクロノは例外だが

クロノにスタンドの存在を教えてあるのは、様々なスタンド使いを見て危うい人間も多くいたからだ

とにかく今は皆ガキだろうが、いずれ犯罪をおかす奴が出ることを俺は危惧している

この脅威は富出に並ぶ問題だ

サリィがスタンド使いとわかったのだから他世界にもいる

いずれ、管理局にもスタンド使いが入局するにしても管理局員にも

スタンドに対抗する手段が欲しいだろう

そこでクロノと俺監修の元にスタンドの視認化のシステムを作っている訳だが…

闇の書事件が始まってこりゃ頓挫してるかな

「彼女の保護観察の申請が通ったよ」

「そっか…悪いな無理効かせて」

「元々都市伝説に片付けることが出来た案件だ　被害者には新たなデバイスの発注をしたし、彼女のお陰でまさか芋づる式で犯罪者を検挙できたよ」

「あらそれはまた」

「ある意味借りを作られたかな…？」

「そんな執務官殿ですが、デバイスイーターにヘンタイさんと認識されてるんだこれが」

「おい…まさか君は」

「待て待て、お前があの子を追いかけ回したせいでそう認識されてんだよ」

いつかのアースラでのなのはを見て顔を赤らめていたからロリコン疑惑がかかっていることを思い出したのか盛大に俯いてしまったクロノ

悪いな、一応俺は同い年なんでロリコンじゃありません

とにかく適当に雑談し続けてると学校が終わったのか聖祥の制服を着た子供の帰宅していく姿が見えた

「さて…一度俺は帰ることにするよ」

「そうか…君がさっきコーヒーを吹き出したのは愉快だったよ」

「…忘れてくれ」

アルフと戯れているサリィの元に歩いていく

『亮…』

『……ごめん、今はまだフェイトに会うわけにゃいかないんだ』

殺害未遂の俺を心配して念話をしてきたアルフに謝りながら俺は帰宅した

一人で特に何もするでもなく夕焼けの照らす街中を歩き回る

たまにはなんにも考えずにボケッとしていたい

次の俺がしなければならない事も再検討する前に息抜きも必要だ

「ん…？」

そんな気分で歩いていると、人気の少ない通りで何かに追い詰められてる聖祥の生徒がいるのを見つけた

それを追い詰めるように迫る上級生らしき人物

何か頭の奥にチリチリとした感覚が走る

感覚からして二人ともスタンド使いか？

「知らないって言っているだろう！？」

「嘘つくなよ…いいからフェイトの家教えろよ」

なんでフェイト？と思うが、それ以前に上級生からはどうしょうもない悪というのを感じる

なんでそんなのが感じるかわからないが、あまりよろしくないな

フェイトの家を嗅ぎ回ってるっていう点からあまりいい気分はしないな…

……首を突っ込ましてもらうか

迫る刺客？（後書き）

なんとか間に合わせた…しんどい…

まだ募集スタンドが何か判明させていませんが、実際どれも採用したくなるんです

敵でも味方でも友人でもおいしいです

そろそろ富出も活動が活発になります

なんたって富出は変態ですからッ！

ちなみに富出そのものにスタンドステータスを当てはめると全部Ａになります

スタンド相手にタメはれるとか全くキモいですね

なんたって富出は変態ですからッ！

サリィに関してはチームではなくその他に分類ですな

サリィは亮の義妹、嫁に欲しくば鬼畜義兄＆山猫を倒してからにしなさい

仗助とトニオとジョルノだけでも殆どの怪我も病も治せる気がする

今日この頃

迫る刺客？（前書き）

熱が下がらない…

迫る刺客？

ＳＩＤＥ　亮

「後輩いびりとは感心しませんね」

「ああ？なんだお前？」

俺は上級生らしき人物から庇うように何処かおどおどした印象を与える少年の前に立った

しかしなんだこの上級生、聖祥にこんな柄の悪い奴がいたのか？

小学生でチンピラ、ヤンキー通り越してゴロツキとかすげぇんだけど

前世はどうなってんだろうこいつ

「なんかテメェも怪しいな…お前、フェイトって奴の家知らねぇか」

「大丈夫か」

「え？あ、はい」

「立てるな…ほら、もう絡まれないようにしろよー」

「おい！シカトすんじゃねぇッ！」

なんか見た目そのまんまのやかましい奴だなぁ

「俺は暇じゃないんだ！ふざけてると病院送りにすっぞ！？富出ってガキにレッドマンっていう奴をシメて連れてこいって言われてるんだからな！」

レッドマン…完全に俺の通り名じゃないか

しかも富出だと？俺に対する刺客ということか…？

スタンドの存在を知ったって事だろうか…とにかくこいつから色々と聞かなきゃならないようだな…

「何をいってるのか意味がわかんないけど、出来もしないこと言わんでくださいよ」

「こいつ…！まとめてぶっ飛ばしてやる」

頭が足りなそうだからとりあえず挑発

顔を赤くして腕に何かを纏わりつかせ、殴りかかる相手から離れた

憑依系のスタンドか？なんて呑気に考えながらまだ逃げてなかった
近くの恐らく同級生を連れて走る
つかんだ腕が随分とひょろいな…見た目女の子みたいだし

「ひい、ひぃ…す、すみません……もう、走れな…」

「ちょっ！体力無さすぎだろ！」

で、いきなり息切れですかい畜生

ぜぇぜぇと息切れし始める少年に何かを言おうとすると突然爆音が
聞こえた

何事かと後ろを見ると何やらバイクのロボットみたいなスーツを着
た奴が全身のマフラーを噴かしながら突撃してきていた

「この俺のトンアップボーイズから逃げれると思うなよ！」

「暴走族、ねぇ…見た目がゴロツキだしピッタリか」

「な、なんでそんなに落ち着いて…」

「慌ててりゃ、逃げられん　落ち着かなきゃ、戦えん！」

「戦う気なんですか！？」

「勝手に喧嘩売ってきたのはあいつだからな」

さて、あいつはどうやらスーツ一体化型のスタンド

下手にこそこそやって見極める必要がない

しかし、なんてスピード

足にある車輪がとてつもない速度を生み出しているのか

ガキの走りじゃ無理臭いな

「アンブラッ！」

「ッ！？うわッ！うわわッ！」

アンブラを建物の影から出して、俺と少年の服を掴んで引き上げた

その直後に奇声を上げながら拳を振り上げて突撃するゴロツキ小学生

目の前にあった自販機が横真っ二つなる

「はっはっはー…あいつ殺す気満々かよ」

「笑ってる場合じゃないですよ！」

どうもオツムの弱い奴も転生してるっていうのも考えものだな

所詮人間だから神々は転生させるときに何にも思わないのだろうけど、よくこんな奴を転生させようと思うよ全く

富出を挫くはずの存在を逆に利用されるとか本末転倒もいいところだ

とにかくこのゴロツキ小学生を倒すしかない

「アンブラッ！奴の足の影を掴めッ！」

「ぬぁッ！？足が動かないッ！？」

今はデバイスを使うわけにはいかない

俺の情報が、どこで漏れるかわからないからな

念話も傍受される可能もあるから魔法の一切は使えないと見ていいか

アンブラだけに頼ることはしたくないんだが、そうはいっていられないのがこの状況か

ゴロツキ…あいつのスタンドのパワーは強力すぎてアンブラで防ぐのはアウトだ

自分から腕か足をはねられに行きたくはない

「飛べッ！」

「うぉぉぉぉ……！」

相手の影から腕を出して右足を掴んで宙に投げる

そのまま空中キャッチしたあとにぶんまわして遠くに投げ飛ばすッ！

爆音

「やりすぎじゃないですか？」

「スーツ型なら死なないだろ…たぶん」

空地に隕石でも堕ちたか、飛んでもない勢いで陥没した……そこまで本気で投げてないんだけどな……

俺達は奴の反対側に降り立つと再び走り出した…のだが…

「君もつまんない喧嘩に巻き込んですまなかっ……って居ないーッ！？」

ハッとして後ろを見ると

「はぁっ…はぁっ……あぁっ……あぅっ…」

ヘロヘロになって走る少年が

目は潤み、顔も朱に染まってパッと見、エロいことになっている

走り方も何処と無く女の子っぽいし、乙女かお前はッ!?男だけどッ！

「待ぁぁちぃぃぃやぁがれぇエエエーーーッ!!」

ドルルルンッ

そんな重いエンジン音が響く

次の瞬間には陥没地帯が吹き飛び、ゴロツキ小学生が、ＴＵＢが出てくる

これまたとんでもない速度で突っ込んでくる奴を見て驚いた

マフラーが数本折れてる点以外、無傷なのだ

あんな派手に飛んだのに

「くそがッ！マフラーが折れちまったじゃねぇかぁぁぁぁーーーッ！！」

走りながらも鉄のフェンスをむしりとり、吸収していった光景にギョッとする

それに応じて折れていたマフラーは直り、さらに増えていく

全身から煙を排出しながらスピードをあげてきた

「自己再生かよ！デタラメな！」

このままじゃ俺も少年も追い付かれてしまう

あんな華奢な奴じゃパンチ一発で粉々になりそうだ

あぁもうめんどくさいッ！

俺の影から出る腕で少年を捕まえると影の重なっている歩道橋の影から伸びるもう一方の腕に掴まる

歩道橋の上に飛び乗り、スレスレで突進をかわした

あまりの速度に肝を冷やしたぞ…

「しっかし…なんだこれ……」

「人がいませんね…」

いつの間にか大通りに出たんだが人気が無いどころじゃない

人が、いない

空を見上げるといつの間にか結界が張られていた

ヴォルケンリッターの誰かが？

いや…管理局に正体が知られ始めた今、こんなことするわけ無いはず

……まさか、富出の仕業か？

ふざけやがって…なんだこの広範囲結界…

いや、あいつまさか街中の魔力保有者を洗い出すためにこんな真似をしたんじゃないのか

転生者には魔法を使う為のリンカーコアは備わっている

「なんつー強行手段……そんなに支配したいっていうのかこの物語（世界）を……」

奥歯が砕けかねないほどに歯軋りする

やっぱり、お前を許すわけにはいかない

まずは、あのＴＵＢを倒す

「なぁ、君もスタンドを使えるんだろ？」

「え？あ、はい！でも、戦いに向いてない能力なんだ…」

「なに、能力は使いようだ…あいつのスピードをなんとか出来ればそれでいい」

少年には悪いが俺のわがままに付き合ってもらおう

俺はこの程度の障害で立ち止まる訳にはいかないのだから

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

まるでバイクが人型になったような少年は道路を駆け抜け、飛び上がった

歩道橋にはさっきの逃げた少年と影から腕を出す少年がいるはず

「そこから引きずり出してやるよぉぉぉーーーッ！！」

彼はそのまま突撃する

歩道橋に向かっていく弾丸のごとき体当たりは、甲高い激突音を上げた

もはや当初の目的を忘れている今は手加減の一切がない

実際、彼はただスタンドの力を振るって暴れられればいいという思考に満たされていたから

体当たりで折れたマフラーを直すべく鉄の部分を吸収しながらひしゃげた歩道橋の中を覗いた

しかしそこには誰もいない

「おい！俺達はこっちだ！」

「！」

声に反応した方を見るとビルの上に亮たちはいた

亮は、相手を観察するような目で見ている

自分をこけにしているのかと少年は亮の方へ向かった

その車輪付きの足は、ビルの壁面すら走破することができる

彼は直ぐにその澄ました顔を変形させてやろうと考えながら登り始める

しかし、亮はただ見ているだけだ

だからその異変に気付かなかった

突然、足がずるりと滑ったのだ

「んなッ!?なにいぃぃッ!?」

壁からずるずると滑り、少年はそのまま落下していき、小さなクレーターを歩道に作りながら落下した

しかし、マフラーが数本折れるだけでＴＵＢは無傷なまま

「く、クソがッ!足を踏み外したか!」

彼はガードレールに捕まろうとして
盛大に転んだ

「？…？…なんだ？今何が？」

立ち上がろうとするが、何もない歩道で足を滑らせたのだ
何度も立ち上がろうとするが足が地面を踏み締めることが出来なかった

そんなときに目の前に人の頭ほどの正八面体が浮いているのを見つけた
それぞれの面に口のついた物体
口の隙間からは長い舌が覗いている

「クリズガム…その舌はあらゆる摩擦を舐めとる…か」

「摩擦の与奪、それだけしか出来ないけどね」

「いや、十分さ…ありがとな、えっと…」

「真吾、赤坂真吾です」

「俺は矢口亮だ　君のスタンド能力に救われたよ」

亮は真吾に礼を言って少年を見下ろした

這いつくばりながらも、金属のある方へ近付くＴＵＢ

その様子に彼は攻略の糸口になりうる道を見付けた

何故、いちいち折れたマフラーを直していたのか

ＴＵＢの足をアンブラで捕まえてその歩みを止めてやった

その時に亮の手には熱が伝わる

「そうか、邪魔臭そうなそのマフラーをわざわざ直しているということはただの見た目通りの機能じゃないということだな？だったら！」

「！よ、よせッ！やめろォッ！」

アンブラが、影から現れた両腕が次々にマフラーを破壊した

反撃しようにも立ち上がることもままならないＴＵＢはされるがまま

全てのマフラーを破壊した時にそれは起こった

「う、ウグゥァァァッ！！熱いぃぃッ！！熱いぃぃぃぃーーーッ！！ギャァァァァーーーッ！！」

「さっき、スタンド越しにかなりの熱が伝わってきた　お前の身体中のマフラーはそのクソ重いスタンドを高速で動かした時に出るあらゆる熱を逃す排熱機だッ！自己再生もマフラーを真っ先に直していたッ！つまりそれがお前の弱点！」

「うぐぐぐ……！」

身体中の熱に堪らなくなった少年はスタンドを解除した

軽いやけど状態の少年は逃げようと必死になる

しかし、亮はそれを許さない

「悪いがテメェは再起不能にしてやる……己の力に酔う破壊的な思考ッ！その根底を打ち砕くッ！」

「この俺がッ！こんなガキにぃぃぃーーーッ！！」

自分に迫る腕を見て少年の顔は絶望に染まった

「アリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリアリア
リアリ」

一気に拳のラッシュが少年を滅多打ちにする

そして

「アリーヴェデルチ（さよならだ）」

「ぐ、げぇ」

顎をはね上げて、意識を刈り取る

真吾はその光景に思わず眼を背けてしまうが、自分に降りかかった
災難が払われたことで内心ホッとする

「アリーヴェデルチなんて借りてみたけどしっくりこないな…別の
台詞にすりゃ良かったよ」

亮は亮で頭を掻きながら痙攣している少年をみてそんなことをボヤ
くのだった

迫る刺客？（後書き）

気付いたらドリフターズ2巻を買っていた

首置いてけ！

ああいうテンションの漫画は大好きなんですよ

とりあえず募集スタンド第一段はクリズガムに決定しました

赤坂真吾という男の娘が本体ですみません

真吾は亮チームに参加、亮の補佐をしてもらいます

ゴロツキ小学生はあっさり撃破

あと迫る刺客編が終わって二話にいったら主役は譲一に戻します

迫る刺客？（前書き）

転生者側がキャラ濃すぎないかとたまに思う今日この頃

迫る刺客？

藤城譲一は、シグナムは、焦っていた

管理局の出現により、無人世界での原生生物からの蒐集をすることに決め、シグナムと共に無人世界の下見をするはずだったのだが

「ふむ…まさか、他にも原作に介入している奴がいるとはな……しかもお前だとは思わなかったな藤城」

人払いをして、いざ転移をしようというときを狙ったかのようにある人物が現れたのだ

目の前にはコートに鎧をあわせたバリアジャケットを着た富出庵がそこにいた

シグナムが何者か問い詰める間も無く巨大な大剣、カオスキャリバーを譲一に降り下ろそうとする

それにシグナムは一瞬で反応、レヴァンティンで弾き返し、一気に一触即発な空気に転じた

（なんだ今の速度……反応出来なかった…シグナムが居なかったら

斬られていた…！）

「貴様…」

「なんだよ…地味な面の割にはシグナムをオとしたのか？」

「……何をいってるんですか？」

「いや、はやての方をたぶらかしたのか…あるいは洗脳、刷り込みか…ま、とにかくだ」

一体、一体何をいっているんだこいつは

あの紅い魔導師の言っていたこいつが歪み？

「心やさしい人がね？はやてに下心をもって近付いている奴がいるって聞いたんだ…これは俺の物語なんだ…だからこれ以上はやてたちに近付かないでくれないかな…？」

一瞬、巻き散らかされた魔力

その桁外れの量に譲一とシグナムは顔をひきつらせた

こいつは勝てない…

蒐集出来ればどれだけいいかなんて心の隅で思う

そして譲一は心で理解する
――こいつは俺の敵だ
何がなんでも倒さなくてはならない――
紅い魔導師に言われて警戒していたが成る程、自分より遥かに強い
神により力を注がれた少年、富出庵
俺が挑もうとしているのは、神なのか
はたまた化け物か

「人の交流関係を貴方にとやかく言われる筋合いは無いんですが？」

自分が特殊な人間とバレていても、もうひとつの自分で言葉を交わさなかった
そちらの自分では、富出に感じている恐怖を漏らしてしまいそうだから
何より普段と違う富出の眼を見たときにどうしてか怒りを感じた
シグナムも、強くレヴァンティンを構え直して富出を睨み付けている
ダメだ、手を出してはいけない…譲一はシグナムの手を握り締めて
能力を発動した

「!?なにっ!?消えただと!?転移の瞬間が早すぎる…ふざけやがって……大丈夫、はやてもヴォルケンリッターもリィンも俺が助けてあげるからな」

譲一はなりふり構わず転移をし続けた

いつの間にか張られていた結界を越えても

シグナムの手を引っ張り、走っては転移を繰り返す

「もういい藤城…」

その言葉にようやく足を止めた譲一は崩れ落ちた

一気に身体中から汗が吹き出る

シグナムの手が震えてるのか、自分の手が震えているのか…そのどちらもか

「大丈夫、か」

「その言葉、そっくりそのまま返すぜ…」

「……正直、私はあのまま斬りかかっていっても自分が斬られる光景しか浮かばなかった……初めて勝てないことに恐怖した…」

「俺だってその光景が見えたさ……シグナム…あいつの目、見たか？」

譲一の唐突な質問にシグナムは首を横に振った

確実に譲一を殺そうとしていた相手に反応できるように精神が摩り切れかねない状態で警戒していたのだ

そんな余裕は譲一にしかなかったからシグナムは訪ねる

「いや…お前は…何を見た？」

肩で息をしている譲一がシグナムを見ながら口を開いた

「俺の友人に、人の目を見て内面を知ろうとする奴がいる……そんな簡単に知れるわけがねぇ、無理な話と思ってた…だけど俺には見えた！あいつの目、その内面を知った！

あいつは、俺達を命あるものと一切見ていないッ！！あいつは全てを自分の悦楽を、快楽を満たせるかどうかしか見ていないんだッ！！自分中心に全てを回そうとする、根っからの化物ッ！！」

（確か物語が舞台の世界…奴は、障害になるなら全て都合のいいように塗り潰して壊し尽くせる……それこそ神だろうが世界だろうがその意思を否定できる……もう一度紅い魔導師に会う必要があるか…）

譲一はそこまで考えて、先程恐怖の中に感じた怒りが、きっと富出のその内面を知ったが故の本能的な怒りだと理解した

あいつは、必ず倒す――

幾分か落ち着いてきた譲一はシグナムを見る

自分より遥かに戦闘経験のあるシグナムの表情が優れないところからかなり精神的に参っているのだろう

富出の存在を考えて、シグナムと譲一は下見に行く時間を変えて行くことにするのだった

「転移先が全く掴めないか……ま、どうせこの街に皆住んでるん

だし、もうちょっと脅かしてやればいいかな?俺の女（の予定）に手を出そうとしてる奴がちらほらいたから何かと思えば、転生者が他にいたなんて……こいつは俺という主人公がいかに最強か見せ付けるための試練か　フッフッフッなら有象無象の魔の手から俺が守らないとなッ!フゥーハッハッハーッ!!」

「ママぁ、変なお兄ちゃんがいるよ」

「目を会わせちゃいけません、行きますよ」

何処かの部屋の中

そこには４つの人影

二人の女性が警戒するような眼差しを１つの影に向けていた

その影と相対する男性

彼は何かを了承するように頷く

それに満足したのか、相対していた影

卒塔婆を背負う異形の人影は男性に感謝の意を述べて己の卒塔婆を叩き割る

異形の人影は何かに還るように影に消えていくのだった

ＳＩＤＥ　亮

「！結界が消えたか……」

空が元の色に戻った

それに応じて街に人の気配が現れる

「あ、あの…」

「ん？」

「助けて頂いてありがとうございます…それでですね…１つ頼みごとがあるんですがいいですか？」

「頼みごと？」

「はい……

庵を…富出庵を止めたいんです」

これは…まさか富出に自ら挑みたいって言うのか？

いや、それだけではないな…何か別の思惑があるようだ

こいつは自分の能力が戦い向きでないと分かっているのに、さっきの富出を止めるという言葉に決意を感じた

さっきの戦いで腹を括ったのか？

「事情を聞いてもいいか？」

「……彼は、前世の僕の友達だった…こんな見た目だったから前世ではよくいじめられてて、そんな僕を彼は助けてくれたんです」

「意外だな…そんな一面があるのか」

正直、過去（前世）を知れば俺は槍を鈍らせそうだが聞くのも構わないか

討つことには変わらないからな

少しだけ友達という点に富出のスパイかとも思ったが俺に向けて差し向けた刺客に襲われてたらその線は無いだろう

「なんの因果か知らないけれどこうやってもう一度生を受けて、庵

も居るって知ったときに会いに行ったんだ……だけど、彼は自分の力に酔っていて昔の面影なんてなかったんです……全てを都合のいいようにねじ曲げるようになった彼は見ていられない、だから友達だった僕は止めたいんです！」

「事情は分かったが…わかっているのか？今の富出なら確実に殺しあいになる　その時にお前はあいつを殺すかも知れないんだぞ？」

「覚悟はできてます…！」

……はぁ、やっぱり俺は冷徹になりきれない…か

説得しようという気概もある彼を俺は認めてしまっている

純粋にして潔白

なら、チャンスを作るしかないか

「だったら俺はお前を利用するぜ？あいつを止めるにはそれぐらいは平気でするからな」

「わかってますよ　僕だって矢口君を利用する腹積もりなんですから」

「あ、そういやさっきの上級生が言ってた奴な？あれ俺のことだから、ヨロシク共犯者」

「え？ええ？？レッドマンッ！？」

こうして俺は富出を倒すための仲間を手に入れた訳なんだが……

どこで見られたかわからないがなのはに彼女でも居るのかとか、アリサによる大尋問大会になったとか、すずかがやけに面白そうに質問してきたとか大騒ぎになった

そういや真吾の奴、見た目がほぼ女の子にしか見えないんだったのを忘れていた

かろうじて男ってわかるけど二人きりでいるのはあらぬ噂をたてられそうだから自重しよう

そのせいでせっかく会わないように避けてたフェイトとおもいっきり出くわしたのは余談である

フェイトが涙目で服を引っ張ってきたり、さりげなく俺のそばによくいるようになったり、やたらとフェイトがスキンシップを求めてきたり、サリィとフェイトが出会ってなんか火花が散っているのを幻視したり、母さんにフェイトとサリィ二人して着せ替え人形になったのなんてのも余談だ

暫く学校休もうかな…

で、夕方

「さてと……懲りずに向かってきたガッツは認めるが完全に再起不能にされたいようだな？」

再びゴロツキ小学生が他のスタンド使い複数連れて現れる

というのも富出の協力者を真吾に頼んであぶり出しただけだ

刺客予備軍、藤城譲一が活動しやすいように俺が完膚なきまでに叩き潰しておくとしよう

「アンブラ……

…Ａｃｔ２……」

俺の後ろの闇を見て怯え出す刺客予備軍

今出せる俺の本気

「な、なんだそりゃ…」

「う、うわぁぁぁ…」

「ひぃぃぃぃっ！」

闇に葬る

なんて、皆殺しになんて惨いことはしないが俺は徹底的にやるたちなんでな?

悪いが原作が終わるまで全員病院で健康に暮らしてくれ

何人か再起不能になるかもしれんがそこは運が悪かっただけ

目の前の阿鼻叫喚の地獄絵図を見ながら記憶操作魔法を展開する準備を始めた

迫る刺客？（後書き）

このあと二話作るはずだったけれど、一話だけにします

風邪が治らないもので…

今回は裏側の物語がちらほら出ました

そしてアンブラ、まさかのＡｃｔ２

亮はスタンドの可能性を引き出そうと努力しているからです

ＡＣＴじゃなくてＡｃｔなのはなんとなく

Ａｃｔ２の能力はまだ不明ですが、複数の人間を相手に出来るような能力ですね

藤城譲一編？にて明かそうと思います

熱が下がらないから大学休んだのは痛いなぁ…

彼女は金色の少女？（前書き）

リア充め

爆発しろ

矢口亮編？エピローグ

彼女は金色の少女？

ＳＩＤＥ　亮

デパートの中で俺は今非常にめんどくさい状態に陥っていた

右手には色とりどりの布をマントのように羽織るサリィが

左手にはついこないだ転校してきた砂金のような綺麗な金髪を揺らすフェイトが

端から見て美少女を侍らせているようにも見える格好になっていた

確実に同年代の少年たちに後ろから刺されそうな状況

どうしてこうなった？

いや、学校で大尋問大会やったあとにこうなりそうな気配はあったけど

街中でサリィと歩いてたらフェイトにバッタリ会ったときにまさかそのまま明日の買い物を約束されるとは…

と言うかデバイス越しにプレシアから『フェイトをよろしくね』とかどう返せばいいんだよ

結局流されるまま来てしまったわけで

本当なら役得なんだが…

「ねぇ亮…私あれが欲しいな」

「アキラ、あれほしい」

「「む」」

「……」

二人して同じものを指差し、にらみあう

その間にいる俺はかなり居心地が悪いです

とりあえず二人ぶんの品物を買ってあげたが、何故か二人にジト目で睨まれた

え？俺が悪いのこれ

そもそもフェイトってこんなキャラだったか？プレシアが生きてるからってこんな甘えん坊になるとか知らんぞ

誰かに甘えたりすることを抑えてた分が爆発してるような気もする

けど……

サリィも逃亡生活が終わって頼れる人間が増えたからこうなっちゃったし…

だったら二人してこんな睨み合わないよな？

どこかお気に入りの場所を取り合う、猫の喧嘩に見えてきたのは何故だろうか

「はぁ……フェイト、サリィ、お前ら細かい生活用品とか買いに来たんだろ？喧嘩するなら帰るぞ？」

「「ごめんなさい」」

謝るの早っ

しかし性格的にこの二人は合わないのかね？

俺としてはフェイトもサリィの友達になってくれればいいのだが

あ、サリィの奴は親が裏技を使ったお陰で聖祥に入るのが決定した

入るといっても来年からになってしまう

しかも学校にいっていない分、授業についていけないだろう

その為に今はフェイトとアルフを教育していた経験のあるリニスが

勉強を教えている

……デバイスに学校の授業内容を入れたものや電子辞書をクリエイトブルースに喰わせるという反則もあったが、努力するということが養われないので却下になっている

因みにこの案を提案した俺は教育を馬鹿にしてるとリニスに説教を食らった

最近正座ばっかりで正座することに苦手意識ができてしまったり、一週間高級猫缶を買う羽目になったりしたのは余談だ

閑話休題

残りは大荷物を買うことになりそうなので早めの昼食をとることにする

このときの席でもどっちが俺の隣に座るか争っていたが、丸い円形のテーブルを囲むことで争いを鎮静した

「「……」」

だからって二人して何故恨めしそうにこっちを見る？

スパゲッティやハンバーグを頼み席についているとフェイトが念話をしてきた

『ごめんね』

『は？なにが』

『今日の買い物、なんだか振り回しちゃって』

『別にいいって、それにこの後も二人のお嬢さんに振り回されるんだからな？』

『お嬢さんって亮！』

『と言うか念話で話すような事じゃないよ？そんなに恥ずかしかった？』

『う…』

『じゃあ念話切るよ』

『ま、まって亮！』

『ん？』

『……無理、しないでね』

『してねーよ、ジュエルシード素手で掴んだお前がそれ言う？』

『……そう、だね』

『……？』

なんだったろうか今の最後は

って念話に集中しすぎたのかフェイトの顔にソースがついてた

どうやら気付いてないらしい

「フェイト、ちょっとこっち向きなさい」

「？なに亮…んう！？」

こっちに上げたフェイトの顔についたソースをグリグリ拭き取る

ちょっと痛そうだが俺は気にしない

「変な顔にしたまま買い物の続きなんてしたくないだろ？」

キョトンとしてたが俺の言葉で直ぐに赤くなるフェイト

いろんな恥ずかしさが襲ってきたか、可愛い奴め

そんなときにやたらと熱のこもった視線を浴びせられる

その方向を見るとサリィも顔をソースで汚していた

……お前、さっきのやり取り見て自分で汚したな

そんなに拭いてほしいんかい

そのサリィの様子に俺とフェイトは苦笑いしたのだった

折角だしちゃんと拭いてあげたけどな

昼食を終えて、買い物を再開

ついでに夕飯の食材を買うつもりのようだ

ああ、こりゃ俺は荷物係かなぁ

クロノを巻き込んでおけばよかった

で、予想通りに二つの家庭分だけ食材やら雑貨やら大量の荷物を持つことに

「だ、大丈夫?重いなら私も持つよ?」

「女の子に思い荷物は持たせられないよ…大丈夫…これ、ぐらい、平気だ」

嘘です平気じゃないです

指がボンレスハムみたいなことになって千切れ飛びそうな錯覚を覚える

小学生のからだは不便極まりないなほんとに

せめて小6くらいの体であればよかったんだけどね

「サリィ、手伝う」

いや、無理だからね?そんな細い腕で持ったら折れるって

やんわりとサリィの好意を断りながら帰り道につくが

「……やっぱり休まして下さい…」

「あはは…じゃああの公園で休もう?」

まぁ、その公園は以前のクロノと出くわした公園なわけで

あの時と同じベンチに同じ様に腰を下ろした

ただしとなりには真っ黒執務官ではなくフェイトが座っている

サリィはサリィで犬と戯れ始めた

ここは散歩コースなのか？

「あぁ～指痛ぇ～」

「無理するからだよ」

「いや、男は時として我を通さなくちゃならんというか、二言はないというかだな」

ああ、跡がついちまったよ

血も止まってた分どくどくと流れてるような感覚がする

「言葉にしなきゃなにも伝わらない…」

「ん？」

「やっぱり、止められないの？富出君を…」

「無理だな」

キッパリと言う

そう、無理なんだよ

人の手に余る力を得たときに奴の心に悪が、漆黒の意志が生まれた

のだから

その変わってしまった心を知ってしまえば、どれだけ危険なのか分かってしまう

奴の友だった真吾でさえ殺めてでも止めなければならないとその意思を見せるほどに

「どうして、止められないの？」

「フェイトに悪い虫が付かない為かな」

「はぐらかさないでよ…私は亮に人殺しなんてしてほしくない……私はっ」

「ありがとう…俺なんかのために…でも譲ることは出来ないよ」

「……どうしてなの…」

「…俺がやらないと、他の誰かに人殺しさせちゃうんだよフェイト　俺がやらなくても誰かがその罪を背負っちゃうんだ　俺は見ず知らずの誰かにやらせて安穏と生きる真似なんて出来ないんだよ」

……半分嘘

むしろ、誰かが早く息の根を止めてしまえ等と思っている

本能的に奴の悪意を俺は許せない
消し去りたいほどに
神に仕組まれたか、本当に心の内から来るかなんてわかんない
ただ今はやらなくてはならないとだけはわかる
それだけのこと

「アキラ？フェイト？」

ハッとすると心配そうな目で見るサリィがいた
その瞳には悲しみの色が浮かんでいる
フェイトといい随分と誰かを悲しませることに事欠かないらしいな
俺は
わしゃわしゃとサリィの頭を撫でて俺は立ち上がった

「……富出が全てから手を引いてくれれば、俺は何もしない　大丈夫だフェイト、大丈夫」

荷物を持って手を差し伸べる

それを受けて立ち上がるフェイトに笑いかけて俺達は帰宅することとなった

今にも泣き出しそうな顔をしたフェイトを見たくないかのように

使命から逃げ出せばもうフェイト達を悲しませないかもしれない

この一歩を踏みとどまることが出来れば俺も皆も笑って生きていけるんだろう

でもダメなんだ

その間に富出は多くの誰かを悲しませる

中途半端なところで投げ出せれないんだよ

俺の道は昔に決してしまっている……引き返すことなんて無理だ

ごめん、ごめんなフェイト

これからも俺は、優しい優しい君を悲しませる

彼女は金色の少女？（後書き）

意味不明な話になりかけた…

そして亮の回りなんか女性の影が多いよこいつ

一人ぐらい分けてくれ

さて、次は両主人公、闇の書事件後半戦ですかね

譲一チームはヴォルケンリッターが

亮チームはリニス、真吾が

どう動くかは闇の書事件と富出庵の動きにかかってます

ＶＳなのはやクロノが待ち受けてそうだ

次は転生者目録その３

転生者目録その3（前書き）

あまり役に立たない人物紹介3

とスタンド紹介

転生者目録その3

矢口亮

もう一人の主人公

PT事件におけるフェイトチームに介入していた紅い魔導師『レッドマン』

他にも原作を掻き回そうとしたり、悪い虫がつきそうな場合こっそりと蹴散らす

影から現れる巨大な両手両足のスタンド、アンブラの本体

物語の影から展開を見守るつもりのようだが……

冷徹になりきれず、己が本当は現状から一歩も踏み出せていないことに気付いていない

その一歩を踏み出すとき、彼は前進か、後退か

サリィ・マレイヤ

ミッドチルダ出身のスタンド使い

強力なスタンドに目覚めており、他世界にも転生者が生まれているのが判明した

前世は幼くして病に倒れた少女

今回の転生でなに不自由なく過ごしてきたが、管理局員である両親が殉職、財産は全て親戚に奪われて家を失う

前世の家を目指すことを決意

身ぐるみを剥がれたり、人さらいなどにあいかけるが、スタンドを使うことで乗り切り続けた

唯一の今世の親の繋がりの布を纏い、地球に転移

最後は亮に捕縛される

管理局に突き出されるかと心配したが、亮がクロノに無茶を通して保護観察に

以降は亮と一緒に前世の家探しをしたり、矢口母の着せ替え人形になったり、リニスと勉強会に勤しむ

犬や猫が好きすぎて、見かけるともふもふしようとする

何故かフェイトをライバル視、亮と仲良くすると拗ねる

纏っていた布はサリィの服作りに使われた時の余りを気に入ったのが始まり

両親が亡くなるまで余ればもらっていた

赤坂真吾（あかさかしんご）

聖祥に通う転生者の一人

男装した女子に見えてしまうほど男の娘

だが男だ

いちいちしぐさも女の子っぽい

だが男だ

趣味も女の子っぽい

だが男だ

前世は富出庵と友人だと言う

変わり果てた富出の暴走を止めるべく活動するも自分のスタンドではどうしようもないので、誰か協力出来そうな人を探していた

運悪く富出に利用されたスタンド使いに絡まれてしまったところを矢口亮が救う

スタンド使いを退けた後に協力関係を結び、亮チームに

亮のサポートを務める

貧弱だけれどその覚悟は本物

リニス

プレシアが飼っていた山猫を素体とした使い魔

契約を終えて消えたはずだったのに亮の使い魔にされた

本人もどうやって復活させてくれたのかわからない、真相は亮しかわからない

退場した身であるため、プレシアやフェイトを影から見守っており、亮のバックアップをしている

一方で亮には魔法を、サリィには一般教養を教えていたり

やっぱり矢口母に着せ替え人形にされる

主人公

本格的に蒐集に参加

矢口と交戦するも決着つかずに撤退

魔法をヴォルケンリッターより学習中

デバイスに憧れてたりする

富出庵と対峙した際にその悪意を受けて恐怖すると共に怒りを感じた

使命を初めて意識し始める

藤城譲一

ゴロツキみたいな上級生

大体五年生辺りの転生者

上級生なのにすごい柄が悪い、大丈夫か

前世はまんまゴロツキ、鉄砲玉で自分のいた組の抗争で命を落とした

思慮が足りない訳じゃないけど絶対強者に引き込まれたせいで暴走気味に

真吾を問い詰めているときに亮に妨害され、そのまま二人に撃退される

完全に倒されなかったので一度逃亡、他のスタンド使いを率いてリベンジ……

が、もうひとつの姿を見せた亮のスタンドによって全員もろとも病院送りにされた

富出庵

地味にバス代浪費した

未だになのは達を自分のものしようとしている

どこかでスタンドを知ったが、なにそれ?美味しいの?状態

スタンドを然程脅威と思っておらず甘く見ている

スタンド使いを捕まえてレッドマン狩りをするも失敗

大して期待してないようなのでそれほど困ってない

自分以外の存在を命あるものと見なしておらず、『登場人物である』という認識しかしていない

主人公である自分は全てを思い通りに出来ると信じている

自分の行動こそ正しいと思い、悪だと全く気付かない邪悪

真吾は命に関して無頓着になるのを恐れている

登場スタンド一覧

アンブラ

影法師の名を冠する異様な遠距離操作型スタンド

ただしＡｃｔ２があるため謎が多い

本体は矢口亮

いつもスタンドの可能性を研究しているのでその成長性が未だにわからない

Ａｃｔ１

破壊力―Ａ
スピード―Ｃ
射程距離―Ａ（影を繋げば何処までも）
持続力―Ｂ
精密動作性―Ｂ
成長性―？

Ａｃｔ２

破壊力―？
スピード―？
射程距離―？
持続力―？
精密動作性―？
成長性―？

能力

Ａｃｔ１

本体の影より巨大な腕と足の影を出す

本体の影が他人の影に触れることで捕まえることが可能

アンブラが相手の影を掴むのは直接縛っているため

本体の影が建物の影に入っていたりするとその影の中を自由に行き来することが出来る

Ａｃｔ２

詳細不明

複数のスタンド使いを纏めて相手取ることだけしか判明していない

共通の弱点として、影を崩されたり強すぎる光などで影が失ってしまうと強制的にスタンド能力を解除される

本体の影を取り戻さなければその間はスタンドを出すことができない

逆に暗闇ではその力は増していく

また、何故か教会などの神聖な場所や寺などでは弱体化する

クリエイトブルース

一応遠距離操作型のスタンド

本体はサリィ・マレイヤ

寂しさがきっかけとなって発現したためか、余り本体のそばを離れることはない

渦を巻いた目に、大きく裂けた口と一見何かの怪物がデフォルトされたぬいぐるみのようにも見えるが強力な力を持っている

デバイスイーターのからくりはこのスタンドがデバイスを喰い尽くしていくため

破壊力―D
スピード―C
射程距離―B
持続力―B
精密動作性―A
成長性―C

能力

機械類を捕食し、取り込む

際限がなく、食べた物の知識を本体が得ることが可能

ただし本体にそれなりの学がなければ得た知識を完全に理解することができない

喰った機械類はクリエイトブルースの口から大量に出せる

ただし口の中までしか出せず、完全に出すと1分ほどで消滅する

サリィはクリエイトブルースの口から大量のデバイスを覗かせて魔法行使していた

大量に出すのは足りない魔法知識を補うため

因みにサリィはテレビで見たアハト・アハトや、戦車にミニガンを食べてみたいと言って亮とリニスを慌てさせた

クリズガム

遠距離操作型のスタンド

本体は赤坂真吾

人の頭部程の大きさの正八面体に口がついている

口の中には長い舌が隠れている

能力ゆえに真吾は亮のサポートに徹する

破壊力―無し
スピード―C
射程距離―A（１００m、舌は１０m）
持続力―A
精密動作性―D
成長性―C

能力

摩擦の与奪

舌で舐めた場所の摩擦を奪う、あるいは与えることが可能

摩擦を無くすことで物理攻撃を滑らせて回避するなど防御能力は高い

相手の足元の摩擦を奪い、舌で絡ませて転ばすなどといったことが主な使い方

摩擦の奪われた場所は再び舐めて返すか、本体が死なない限り奪わ

れたままになる

※クリズガムは募集スタンドです
案の提供ありがとうございました※

トンアップボーイズ

暴走族の意のスーツ型スタンド

本体はゴロツキみたいな上級生

バイクが人型に変形した物を纏った姿で、まるで特撮ヒーローものに現れるロボットのよう

身体中に大量のマフラーが生えており、足にはタイヤが備わっている

非常に重いスタンドで本来なら腕をあげるのもままならないが、とてつもないパワーで動かす

恐るべきスピードもあるせいで本来の破壊力をさらに底上げする

しかし、このスタンドを動かすと異様に熱が上がるので本体も常に

蒸し焼きの脅威にさらされ続ける

冷却できない為に排熱機能を兼ねたマフラーが生命線となり弱点となる

亮達はＴＵＢと略していた

破壊力―Ａ
スピード―Ａ
射程距離―Ｅ
持続力―Ｅ
精密動作性―Ｃ
成長性―Ｄ

能力

触れた金属の吸収によるスタンドの修復

ただでさえ頑丈なスタンドだが、もし亀裂などが入ったりしたら危険である

そのための自己再生である

基本的にはマフラーがこのスタンドのパワーに耐えきれずに壊れやすいのでマフラーの修復が主な使い道

一応マフラーを増やしてやることも可能

???

物語の影にいる謎の異形

背中に卒塔婆を背負っており様々な場所で暗躍している

スタンドだと思われるが……

この異形なんなのか正体不明である

転生者目録その3（後書き）

クリズガムの案を下さった白いサンタクロース様、ありがたく使わせていただきました

また新たにスタンド案が集まってきてます

闇の書事件ではもう募集スタンドは出さないかも知れませんが、空白期やＳｔｓの時に使おうと思います

メメタァ

はやてと譲一？（前書き）

暫くは譲一のターン

はやてと譲一？

ＳＩＤＥ　譲一

「しゃ、シャマル…」

「譲一君!?大丈夫ですか!?」

「謀り、まし…た……ね……ガクッ」

「ああっ!ダメです譲一君!目をっ!目を開けてくださいっ!譲一君っ!!誰か治療が出来る人をっ!!」

「いや、シャマル自分で出来るやろ」

とりあえず悪ふざけはここまでにしようか

死線をさ迷っちまったのは間違いじゃないが、ギリギリ病院送りにされるこたぁねぇ

まぁ何があったかと言うとだ
間違って食べちまったんだ
シャマルの料理を
学校から帰ってきたときに小腹が空いてたんだ
テーブルを見れば、はやてが作りおきしたのか美味しそうなご飯が
ちょっとばかりつまむことにした俺は怪しむことなく口にして……
ぶっ倒れた
見た目だけ完璧だったが中身がッ！中身がヤバイって！
はやてによって指導を受けているはずなのになんで入れちゃダメな
調味料とか栄養材入れるのシャマルさん
初めて口にしたが…なんでこないだヴィータとザフィーラが倒れて
いたのかよくわかった
なんとか事なきを得た俺はお口直しに下校中寄り道したある店のシ
ュークリームを食べていた
ああ、この程よい甘味が俺のイカれた舌に元の味覚を取り戻してく
れる…
「下手につまみ食いするんじゃありませんねヴィータ…」

「まったくだよ…よく生きてたなお前」

ヴィータを交えてちびちびと食べる

はやてやシャマルとも食べる予定なんだが、今はシャマル説教中だ

……実はさっきの料理

はやてが採点の為に食べるつもりだったらしい

俺が毒味役になってよかった…

説教もいい感じで切り上げたのか、はやてもシャマルもこっちに来た

シャマルが若干涙目だが変なもん入れんのが悪ぃんだろ

反省したかどうかは怪しいがな！きっといつかまた誰か犠牲になるだろ！

「おおっ！これは美味しいわぁ～」

「それは良かった　またいつか買ってきてあげますね」

美味しそうに頬張るはやてを見て良かった

今はいないザフィーラとシグナムの分を残して冷蔵庫に仕舞うとはやてたちがゲームしようと言う

初めははやての家に遊びにいくときに用意したのが、家族が増えたおかげでパーティーゲームをやったりすることが多くなった

はやてと二人でやっていたのが懐かしく思えるな

ヴィータがはやてに頼まれて入れたのはいろんな作品のキャラが入り乱れて乱闘するお祭りのようなゲーム

これ、ヴォルケンリッター達も好評だったのが驚きだ

はやてと二人でやったときは無意味に残機９９で殴りあいしたなぁ

「ふっふっふ…いいんですかそのゲームで…僕は一切手を抜きませんからね」

いつも自分が使うキャラを選んだとき

みんなの目が光った

「…あれ？なんかチーム戦になってません？て言うか僕一人！？」

「悪いなぁ、譲一君には一人で頑張ってもらうで？」

「譲一君はいつもトップにたってますからね」

「今回は泣かしてやるよ！覚悟しろ譲一！」

おのれ！八神家全員で謀ったな！？

確かにこの面子で一番強いのは俺だからサバイバルで戦っても一人勝ちしかねない

だからって酷すぎねぇか？

こうなれば気合いで全員叩き落としてやんよ！！

結果

ギリギリで俺が勝利した

危ねぇ…まさかシャマルが予想以上に腕をあげてやがるとは……思わぬ伏兵に驚いたぜ

総合成績画面では意外にも2位の成績にシャマルがいた

以下ははやて、ヴィータと続いている

「は、ハッハッハァッ！いくら三人がかりだろうと無駄無駄ァッ！ＷＲＹＹＹＹＹッ！！」

「ちくしょー…結構いい線いってたはずなんだけどなぁ」

「やっぱ、やっぱ魔王譲一を倒すにはあの人を呼ぶしかあらへん！」

「は、はやてちゃん！まさかあの人を呼ぶのですか！？」

「そのまさかや！もう部屋の前におる！カモン！」

ガチャリとドアが開く

はやてが部屋のなかに招き入れた人物…それはッ！！

「呼びましたか主」

桃色の髪を揺らすナイスバディ、シグナムと青い毛並みの守護獣、ザフィーラ！

散歩にいっていたはずなのにシャマルに頼んで呼び戻しやがったな！？

実はこの二人、このゲームで1、2を争う実力者だったりする

「ちょっ！待ってくださいはやて！流石に彼女達を相手取るなんて無理ですよ！？」

「先生、オネガイシマス」

「「まかされた」」

「はやてェェェェーッ！！」

随分とノリがいいよね皆

このあとサバイバルでやったが俺が真っ先に倒されて、シグナムとザフィーラの一騎討ち

接戦の末、辛うじてザフィーラが1位に輝いた

「最後に正義は勝つんや！」

「お、おのれ……だが忘れるな…俺はいずれ頂点に立ってみせる…ぐふっ」

「なんだこの茶番」

ヴィータの言う通りである

そのあとはゲームを変えていつの間にかプチゲーム大会になっていた

機種まで変えて格ゲーし始めた頃にはやてが図書館から借りてた本を返すために席を立った

『ああ、シャマル』

『はい？なんですか？』

『シャマルが以前蒐集した子なんですけど、ちゃんと後遺症無く生活してましたよ』

『そうですか…最後に無理してまで結界を破壊しにかかったときはビックリしましたから…何の支障がなければ安心です』

シャマルから聞いた話じゃ相手は高町なのはだった

まさかあれだけの砲撃が出来るような子とは思わなかったぜ

しかも転入してきたフェイトって子も魔導師、しかも時空なんたらの局員だった

なのはから蒐集しちまったから、時空なんたらに目をつけられたみたいだし次は相当やりにくくなる

今は無人世界で蒐集してるが、そのうち介入してきそうなんだよな…

ま、逆に餌がむこうから来てくれるとポジティブに考えるか

富出という不安要素もあるが、なるようになれってやつだ

「今日は僕がはやてを連れていきますね」

「わかりました　気を付けてくださいね」

「主を頼んだぞ」

「ほな行ってくるなぁ」

シグナムは負けず嫌いなヴィータに捕まったままなんだろうな

たまにはそのまま息抜きしてくれよ?

シャマルとザフィーラに見送られながら図書館に向けて歩を進めるのだった

「それにしてもたくさん読みますねぇ…この鼻をなくしたゾウさんなんて面白いですか?」

「面白いでぇ～最初は好奇心からやったけど読みごたえはバッチリや!」

「うぅん…興味は沸くんですが何故か読む気になりませんねぇ」

「読まず嫌いはあかんで譲一君　そうや、こないだ図書館に譲一君の読みたがっとった小説帰ってきてたで?」

「本当ですか？なら僕も今日は借りていきましょうか」

ニコニコ楽しそうに笑うはやて

なんでこの子がまた訳のわからない目にあわなきゃならないんだ

早く、早く蒐集しないと…

大分埋まってきてるがまだまだ

なのはにゃ悪かったがかなりの稼ぎだったんだよな

んー…見た感じ、フェイトもなのはクラスの保有量だったはず

再戦を望むシグナムに任せるか

俺は出来れば紅い魔導師辺りだな

富出に関しては仕掛けられたら即撤退といったとこか

当分、厳しい戦いになりそうだな

「そういやな、前にここですずかって子と仲ようなったんや」

「…すずかって…月村すずかさんのことですか？」

「そうや…って知り合い？」

「クラスメイトです　数少ない女の子の友達ですね」

これは意外

こんなとこですずかと友達になってたんだな

詳しく聞くとはやての手が届かないようなところの本をとってくれたのが始まりみたいだ

「って、数少ない女の子友達て…譲一君そんなに友達おらへんの？寂しいのう」

「ぐ、そんな言い方しなくていいだろが」

「しゃべり方、戻ってるで」

「おや、僕としたことが」

はやてのかわいそうな物を見る目にジト目を返しながら、はやての言っていた小説を取り出した

あとははやての分の本を返して新たに借りる本を探すだけか

そんなときはやては外の景色を見ながらポツリと呟いた

「クラスメイトかぁ…学校に行ってみたいなぁ」

「行けますよ、はやてなら」

「でもこんな足やし…皆に迷惑かかる」

「大丈夫、はやての足はもう一度動くようになりますから　その時に僕やすずかの通う学校に行きましょう?」

そうだ

命を救う為だけじゃない

闇の書を完成させれば動かない足だって治る

だから俺はその可能性を信じて、約束を破ったヴォルケンリッターの共犯者になったんだ

絶対に治してやる

闇の書が彼女の幸せを奪うというのなら、俺は奪われた以上の幸福を与えないとな

未だに絶望から抜け出しきれない彼女を掬い上げてみせる

「そういや譲一君、また最近新しいぬいぐるみ作ってへんか？」

「あ、わかりましたか？」

「あれだけ材料買うて来たらわかるよ？なに作ってるん？」

「今回はデフォルメしたヴォルケンリッターの皆さんを作ってますね　もうすでにヴィータとシャマルとザフィーラは完成してシグナムを作ってるところですね　なんならはやても作りますよ？」

「うーん…遠慮するわぁ…」

「あ」

「？どないしたん？」

「ザフィーラの狼形態を作るのを忘れてました…」

「ほんまになんでも作れるなぁ」

はやてと譲一？（後書き）

とりあえずほのぼの？回

色々とおかしくなったがまぁ気にしないのだ

次回はヴォルケンリッター包囲網辺りかな…

やっとまともな魔導師戦を始められそうだ

魔導師ＶＳ幽波紋使い？（前書き）

譲一ＶＳクロノ

魔導師ＶＳ幽波紋使いシリーズは空白期や3期とかにも出る予定

魔導師ＶＳ幽波紋使い？

ＳＩＤＥ　譲一

ちょうどいい無人世界が見つからない今でも蒐集の手は緩めない
最近はページの埋まり具合が悪いから急がなきゃならねぇ
そんな中、ついに管理局に包囲されたと念話が来た
不味いなぁ…今日はやての家にすずかが来るんだよ
はやては自慢の家族を紹介したがるだろうし、皆をなんとか転移させてやりたい
が、スカーサファイアの能力で連れ出せるのは一人だけ
いちいち一人ずつ連れてくとか効率悪すぎ、普通に皆転移した方が早ぇ
ビルの屋上を転移しながらいくと結界が発動したのが見えた
どうやら守護騎士を捕らえる気満々らしい

悪いが今回ばっかりはどっちにも決着をつけさせるわけにはいかねぇな

騎士の誇り云々言われそうだがはやてのことを上げて戦うのをやめてもらおう

足止めは、俺一人で十分だ

転移し続けて結界の目の前に立つ

不思議だよな、後ろ見りゃ普通に人居んのに前の結界から先は誰もいないんだから

日常と非日常の境界ってか？

つまらないことを考えながら結界に触れるとひびを入れてその中に入り込んだ

結界だろうがなんだろうが、空間そのものをぶっ壊すスカーサファイアの前にゃ意味ないんだよ

まあひびはほっとけば直るしご丁寧に直す必要がない

ビルを転々としていくと管理局員に包囲された皆がいた

おまけにシグナムが派手に登場するし

さてと…どう動くかな？

なんか話をしてるみたいだが…風の音で声が拾えねぇな
スタンドのお陰で鋭敏になった聴覚も余計な音を拾うからめんどくさい

『おい、皆聞こえるか？』

『譲一か、どうしたんだよ』

『今日ははやてのとこに友達がくるんだ　今回は適当に戦って終わりな？』

『しかしテスタロッサとの戦いが』

『シグナム、はやてをさみしがらせるなよ？』

『む…』

『俺が何人かの局員から蒐集ぐらいはやってやる』

『結界はどうするんですか』

『流石に今回ばっかりは闇の書を使え…』

『譲一！そしたらせっかく集めた魔力が！』

『ヴィータ、安心しろ　なんとか俺がチャラにしてやる　だから適当にまく算段たてておけ　ザフィーラはちょっと俺の手伝い頼むわ』

『了解した』

そいじゃ、行きますか？

どうせ俺のことはバレていそうだな

だったらこのまま俺が闇の書の主であるとガセネタの刷り込みしておくか

打てる手はいくらでもやってやるかな

ヴィータ達のすぐ近くに派手に登場しようか

俺への注目を集めることに意味がある

局員釣りといこうか？

スカーサファイアで一度ひびの中に消える

で、すぐ近くに大きくひびを入れて登場っと

「なッ！？なんだ今のはッ！？」

「なんなんだあのひびは！」

まぁスタンドのわからんやつには当然の反応か？
ただ黒いやつは一瞬目を見開いただけみたいだったのは何か違和感があるな
なのはやフェイトに何かよくわからん二人の反応が正しいはずなんだがな

「今回はたくさんの餌を用意してくれたんだなぁ？助かるぜぇ？」

「何者だ君は…」

「これ見りゃわかんだろ？」

言って、体のひびからズルリとシャマルからこっそりとった闇の書を見せびらかした

……んだよ、そんな睨むなよシャマル
あとで返すから待てってのの

「あれは闇の書！！」

「ということはあんたが持ち主ってことかい？」

「探す暇が省けたろ？だからちょっとお前らの魔力もらっていくぜ？」

もう一人の少年とザフィーラみたいな獣耳と尻尾の生えたねーちゃんが構える

俺もスタンドを…

「そんなこと、させないよ！」

ぬぉっ！？真っ先になのはがやって来やがった

それを皮切りに全員動き始める

シグナムも結局フェイトと戦ってるし、皆戦いだした

なのはが突っ込んできたもののヴィータに阻まれている

どうやら本調子じゃないようだし、少年のサポートを受けているからやっとか

『白い子と金髪の子のデバイスがパワーアップしています！気を付けて！』

「パワーアップ……シグナム達のデバイスみたいになってやがるのがか…まあいい、ちょっくらいきますか！？」

モブっぽい魔導師に近付いてはスタンドの腹パンチで済ましてやる
む、結構固いな…これがバリアジャケットってやつか？
飛んでくる魔力弾は転移しながら移動する俺には当たらず、次々に
ぶっ倒していく
品定めもしっかりしていき、近場で手頃な奴を見付けた俺は意識を
奪っていく

「……ごめんな」

はやてを救うためとはいえあまりいい気分はしねー…自分から襲っ
てることに罪の意識が増してくる
だがこんなことでへこんでる場合じゃないし、時間は限られてる
二、三人倒したあとにシャマルの言っていた通りに蒐集をしようと
するが…

「おっと！」

どこからか来た魔力弾を腕の一薙ぎで何処かに飛ばす
ゆっくりと目の前にデバイスを突き付けた黒い少年がやって来ていた

なんというか、すっげー怒りみたいなのが爆発しそうなのが見えるな

「君の相手はこの僕だ　彼らに手出しはさせない」

「おおっ！かっこいいこと言うねぇ？いいぜ？こいつらに手は出さねぇ……だけどよ…」

一秒もたたず

背後から黒い魔導師の腕を掴み、別のビルに転移

そしてスタンドで隣のビルに投げ付けた

「ッ！？」

「あの三人よりお前一人の方が早く埋められるんでな！お前の魔力をいただくぜッ！！」

衝撃音とともにビルに開いた穴に再び転移

風を切る音がビルの中に行くのが聞こえたからノックアウトしてないみたいだな

奴と入れ替わるように飛んでくる魔力弾は紅い魔導師と違いスピードがあるな…だがスカーサファイアが捌けない速度じゃねぇ

ラッシュとは違うが、高速で次々に殴って捌いていく

「！」

しかし、捌いた影からもうひとつ魔力弾がいた

しかも直線的でなく、急に下降したかと思うとアッパーカットのように顎を目掛けて飛んできた

顔を反らすことで直前まで迫ってきたそれを避ける

さらに死角から飛んできた魔力弾を自ら何処かに飛ばしてやろうとした時に形を変えて腕を拘束

立て続けに両足も地面から伸びる、ヴィータが言ってたチェーンバインドだったか？に捕まった

なるほど、魔法ってのはこんなことが出来んのか！

デバイスなんてもって無いし、念話ぐらいしかまともに使えねーからな

演算処理だのなんだのを一部肩代わりしてくれるってんならデバイス持ってないと俺が魔法を使うなんてことは無理な話だ

「やっぱ俺もデバイス欲しいなぁ…」

スカーサファイアじゃできることに限度があるからなぁ
思わずぼやいているがこんな状況じゃあそんなことしてる場合じゃないくらいに最悪極まりない
あいつ本体が姿を見せないのは遠距離から色々と仕込んできてる可能性が高い
スカーサファイアで無理矢理ぶち切ってやりたいが、あからさまな隙になる…ん？
「あいつ…スタンドの存在見えてなかったか？魔力弾に魔力弾を重ねて撃ってきやがったとき、スカーサファイアの腕が伸びきったのを計算して潜り込んでくるなんて直に見えなきゃおかしいぞ！？」
「スカーサファイア、それが君のスタンドか」
隠れていた黒い魔導師は杖を向け、距離を計りながら姿を表した
「てめぇ…スタンド使いか？」
「いいや？だが僕はスタンド使いと戦ったことがあるし、スタンド使いとの戦いかたを知っている」
「なに…？スタンド使いじゃないってなら見えないはずだ　さっき

のは、スタンドが見えてなきゃ出来ねえぞ？」

「ああそうだ　そして僕は今はスタンドが見えない」

「今は…？」

「友人にスタンド使いが居てね、色々教えてくれたよ　だからスタンドが見えないという最大の弱点を持つ魔導師（僕ら）は見えるようにするシステムを作ったのさ　それをデバイスに組み込んだからその傍らの存在を見れたんだ」

といっても今も出してる状態のスタンド

それが今は見えてない…

奴の言葉からするにそのシステムは未完成、あるいは試作…可視化に制限による何らかのインターバルか…？

だったらこの会話でしかできないちょっとした制限解除の時間稼ぎ…といったところかね

しかし反則くせーなデバイスめ

幽波紋（スタンド）の可視化ってどんなご都合主義なんだよ畜生が

システムでなんとか出来るような奴じゃねぇってのにそんなことをよくやってのけやがったな

だがスタンドが見えようが見えまいが今の俺には関係ねー

はやてのためにも俺は魔力を貰うだけだ

見せてやんよ…スタンド使いの戦いって奴をよ…！！

「！？な、なんだこの音はッ！？」

ビシリ、ビシリとひびが入る音がそこかしこからする

そして

「！！な、なにィィィッ！？」

ビルの一角を！

ひびを入れて切り離す！
奴の目の前から突然ビルの一部が崩れ落ちることなど普通はあり得ないこと！

だがスカーサファイアの力なら出来る！

そのまま投げ出される前に拘束をスタンドで引きちぎって抜け出すと、俺は崩れた一部の破片をスタンドで殴り飛ばした

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオ

ラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオ
ラオラオラァッ！！」

自分がたっていた場所も砕き、拳で飛ばす

突然の出来事で思考が止まっていたはずの奴はその光景を見てすぐ
にバリアを張っていた

結構頭の切り替えが速いところから相当スタンド使いとの戦いを経
験してるようだ

これはどうやら一筋縄じゃいかねぇか…だが！

勝つのは俺だッ！！

魔導師ＶＳ幽波紋使い？（後書き）

以前の更新速度と違うのは熱にうなされると変なテンションになって勢いで書いてしまうんです

講義とかやるべきこともあるのでゆっくりまったり進めて行きます

クロノの言ってた友人はもちろん亮のこと

まずはこの戦いを前後編に分けるか三回に分けようか悩む…

亮戦、なのは戦のＶＳ主人公と庵戦、闇の書の闇戦もなんとかぶっちぎりで入れていきたいですね

リインフォースは生存した方がいいんかね？

マテリアルっ娘達も色々と出してやりたいが…そしたら空白期まで何話いくのやら

魔導師ＶＳ幽波紋使い？（前書き）

前後編になったこの戦い

不完全燃焼

魔導師ＶＳ幽波紋使い？

破片を防がれた譲一はビルの上に向かう

クロノは直ぐに相手を追わずにあるシステムを見ていた

そのシステムはある事件では敵として出会い、そのあと友人となった人物と共に研究して産み出したものだ

魔導師のスタンドの可視化

スタンドなんてまだ知られていないからか、まともな研究ではないために人手も少なく、難航していたがようやく形にはなった

プロトタイプ、とでも言うべきそれは特殊なレーダーとサーチャーを通した立体映像のような感覚だ

しかしやはり完全とは言いがたいもので、形がぼやけて相手のはっきりとした見た目やモーションが非常にわかりづらい

（相手は人型のスタンド…これぐらいしかわからないのだからまだまだだな…）

しかもこれは見える時間が限られている

その時間を有効に扱わなくてはシステム自体が弱点になりかねない

クロノはつくづくスタンドとは厄介なものだと思い知らされながら
魔法を発動しつつビルの上へと登って行った

恐らく相手はスタンドを限定的に見えると知った以上、その隙をついて攻撃してくるはず

ならば相手を捕らえるチャンスはそこにあるはずだ

実際に譲一も限定的に見えるという点を突いて駆け引きをすることにしていた

ビルの上で待ち構えていた譲一は相手の動きを注視する

スタンドを出す瞬間等も重要だ

戦いの音が響く中、二人は相手の出方をうかがい続ける

そして一瞬の静寂

「！！」

先に動き出したのは譲一だ
ただし、クロノに背を向けて
「…は？」
戦いの火蓋が切って落とされた筈なのに何を？
というか譲一がとった行動がなんなのか数秒かけて理解した
「に、逃げたァーッ！？」
あわててクロノも駆け出して
「せいっ！」
「ッ！！」
急に向き直った譲一は回し蹴りを繰り出す
攻撃に転じてきた譲一に驚くも直ぐにデバイスでガードを
しかし半ばからそれを切り裂かれたのを視界に捉えるとクロノは後ろに飛び退く

その時に空を飛んだのは正解だった

「バリアジャケットまで裂けている…なんて能力だ」

かすっただけとはいえ綺麗な裂け目を見て相手の射程距離を把握したのか、クロノはデバイスの切断面をあわせて直すと魔力弾を放ちながら付かず離れずな距離を取り始める

さっきは相手のペースを引っ掻き回そうと画策し、敵前逃亡を図ったが冷静さを失わないことに譲一は内心舌打ちをしていた

そもそも空中より地上の方が戦いやすい譲一にとって空中の相手はやりづらい

（ああ～…地上で戦ってくれれば床に穴作って落とし穴とか出来たんだが…距離を取りながらの攻撃、移動が自由自在ってのは俺の攻撃なんてまともに届きそうにねぇ…どうやって引きずり下ろすかな）

魔力弾は避けるか弾くかしながら距離を詰めようと動く

しかし中々前進することができず譲一は押されだす

隙をうかがい続けたが弱点らしい弱点を見付けられないことに焦りが生まれる

（だめだ、集中できねぇ…0秒転移は諦めるか…せめて何かでかいアクションをしてくれれば間合いに入れるんだが…）

譲一はジリ貧になるギリギリ手前でなんとかやり過ごし続ける

バインドも加わり始めた為に能力を使ってかわしていくもいたずらにスタンドパワーを消耗するだけだった

だがこの状況はクロノにもマイナスだ

真の相手はヴォルケンリッター

誰かが敗北すれば蒐集されてしまう

なのはとフェイトの撃墜報告は無いが、アルフやユーノが苦戦することは間違いない

実力の上に豊富な経験を積んでいる相手では余程の才能か、あるいはそれを上回る経験を積み糧にした人物でなければ打破は難しい

誰かの援護に早く回りたいという想いが大きくなり、判断を鈍らせかねない

そしてクロノは決着をつけるべく魔力弾の動きを変えた

（今はこいつに集中するんだ！ミスをするわけにはいかないッ！）

「スティンガーレイ！」

「これは…！」

放たれる魔力弾は先程までと速度が段違いに速い

威力はそれほど高くはないがその速さが脅威！

譲一は何発か避けたところで腕を振るい、空間を砕く

震える空気、不快な音をたてた亀裂は残り全てを貫き返す

が、一発だけ当たっていなかった

「いや、違うッ！あの一発だけ螺旋を描いているものは確かに避けたッ！軌道を変えてひびを避けきったんだ！」

ひびとひびの隙間を潜り抜けたそれは譲一へ迫る

ならばとスカーサファイアでシールを剥がすような感覚で床を引き剥がして即席の壁にした

かなりの厚さのそれはちょっとそっとでは壊れないだろう

だが魔力弾は止まらない
眼前にひびが入りかけたのを見て譲一は床もろとも粉砕した
「スティンガーブレイド・エクスキューションシフトッ！」
「！？」
その先に見た光景は１００を超えるだろう魔力刃が宙に浮かんでいた
その切っ先は全て譲一に向けられている
（いくらなんでも非殺傷設定があっても死なねぇかあれ？）
そして襲いかかる刃達
しまったと今更ながらに床を砕いたのを後悔する譲一
手近な盾になるものが無いのだから
「スカーサファイアッ！」
（来るッ！スタンドがッ！）

システムを作動させたクロノは譲一のスタンドを捉えた

ボンヤリとしているが青い巨人が傍にいるのが分かる

そして魔力刃に向かって拳を振るったのも

「オラファッ！！」

大きなダメージを与えないであろう部位を正確に弾いていく

だが刃は譲一の体を容赦なく貫いていた

足や肩につき立つ

しかし譲一は眉ひとつ何の動きがない

「バリアジャケットも着ずに何で平然としていられる？効いていないのか…？」

次の一手を繰り出すべくデバイスを構えようとして

譲一に懐に潜り込まれていた

瞬きの間すらなく完全にスタンドの間合いに

その事実に顔から血の気が引いたのが分かってしまう

「な…」

「もっと刃と刃を落とす間隔が短ければ手数が追い付かなかった…

集中もろくにできなかったが、まあ及第点か……惜しかったな魔導師！」

スタンドの拳が放たれ、強烈な一撃が、痛みが全身を走った

身体中を振り回すような感覚に吐き気がする

コホッと口から少量の血が出る

意識を飛ばされそうになりながら、視界の端に魔力刃がひびの中に突き刺さっている手足が見えた

（まさか、あれはひびが生んだ隙間に入っただけだって言うのか！？それより体が…！だがッ！相手にも一泡吹かせられるッ！）

「ぐッ…！？テメェッ！？さっきの攻撃の中にも…！！」

譲一を背後から魔力弾が直撃する

先程のスティンガーブレイドにもスティンガーレイ同様に別のものが紛れていたのだ

スティンガースナイプ

誘導と貫通を同時にこなせる魔力弾

クロノは偽装させることで隠していた

二度も使えばもう通用しないかも知れないが

（後はブレイズキャノンを放てればいいが、さっきの一撃が流石に効いたか…！くそっ！早く動け僕の腕ッ！）

（…バリアジャケットがあってもアレの能力までは防ぎきれないみたいだな…しかしさっきの不意打ちはちと効いたか…！）

一進一退、仕切り直しになってしまった

警戒しながら譲一はちらりと腕時計の時間を見て顔をしかめる

（やっべ…時間が…蒐集は無理だこりゃ…先に守護騎士達を逃がすか…）

「ブレイズ…」

「ッ！！」

力を振り絞ったクロノのデバイスがこちらに構えられているのを見て譲一はゾクリとする

あれを放たれるのは不味いと直感した譲一は潰すべく動き、

「ぐあぁぁぁぁッ！？」

「なに？」

仮面の男がクロノを蹴飛ばしていた

突然の乱入に驚くも正体不明の第三者に身構える

だが仮面の男はそんな譲一を差し置いてクロノの行く手を阻むように立ち塞がる

勝負に水を差されて気分を害したものの、優先事項のある譲一は今のうちに逃亡した

行き先はシャマルがいるはずの場所へ

「シャマル」

「譲一君！大丈夫でしたか！？」

「俺を心配するのはいいが今は早く結界をぶち破るんだ…出来るな？」

「でも蒐集したぶんが…」

「この際は仕方ねぇ…あの結界を破れそうなシグナムやヴィータもあの様子じゃ無理だろ」

空中で激突する者達

デバイスがパワーアップしたなのは、フェイトに肉薄され始めたところを見て以前より打ち倒すのが容易でないのが目に見えて分かる

「わかりました…いきます！」

シャマルが闇の書の詠唱を始めるのを少し離れたところから見守る譲一

彼は先程の仮面の男について考えていた

こちらの味方…だとしても正体がわからないし何の目的があって現

れたのか

時空管理局以外にも懸念すべきことが増えたことに計画を練り直さなければならないだろう

「一応、皆に言っておいた方がいいなこりゃ…」

辺りの空気が変わる

そしてとてつもない巨大な力が働く感覚に思考の海から上がる

そして結界を光が貫く

なのはのサポートから外れたユーノは結界を持たそうとするが長くは持たないだろう

そんな光景を見て何故か言い知れぬ不安を覚えつつ守護騎士達と譲一は転移するのだった

魔導師ＶＳ幽波紋使い？（後書き）

盛り上がりきらない戦いを書いたのは初めてだ…

戦いを中途半端にしようとするのってさらに難しいぞ…

それにしてもクロノって何だかんだで魔力量がめちゃくちゃある見たいらしいけど…よくわからんなぁ

なんでもなのはよりやや少ないだとか

ほんとのことは自分もよくわかんないんですけどね

スタンド可視化システムはＡ'ｓでは掘り下げません

これは空白期とかに使う予定のネタがあるので詳しく書けないからと言うか書けなさすぎて微妙な表現に…

青と赤、強者乱入（前書き）

三者ついに対峙

青と赤、強者乱入

ＳＩＤＥ　譲一

先日、突然現れた仮面の男
そいつの正体を探ろうにも何の手がかりもねぇ
不確定要素に不安が募るばかりだがそっちに時間を割いている場合じゃない

一秒も無駄にしたくないのと不安を紛らわしたいからヴィータの蒐集についていった

砂漠だけしかない世界
ここは地球ではない
ヴィータと共にやって来たこの場所
俺とヴィータの回りにはこの世界の原生生物が何体も倒れていた

「オラァッ！！」

「ハァァッ！！」

スカーサファイアが何発も拳を打ち込み、さらにヴィータのアイゼンの一撃が決まる

倒れた原生生物に素早く近付き蒐集するとそのすぐそばに降り立った

「譲一…お前大丈夫なのかよ」

「……ああ、気にすんじゃねぇよ…ヴィータこそボロボロだってのに」

「ああもう、あいつら騎士服をぐちゃぐちゃにしやがって…！」

互いの無事を確認しながらさっさと次の標的を探さなきゃなんねぇ

少しだけ体が軋むが、スタンド使いだからどうせすぐ治る

二人で砂漠を歩き始めた時にヴィータが倒れた

どうやら靴の金具?が外れたようだ

「ホントに大丈夫かヴィータ」

「痛く、ない…こんなのちっとも痛くない！」

「ヴィータ…」

疲労もあるはずなのにまだまだと力強く踏み出していく姿に俺は黙ってついていくしかない

ほどなくして再び現れてくれる原生生物を次々にノックアウトして蒐集を重ねていった

そこそこに集まってるみたいだが、やっぱ前の結界を突破したのはかなり響いていやがる

くそっ…思い通りにいかねぇな…

「！」

「？？譲一？」

「…ヴィータ…先に行け…俺じゃねぇとダメなやつが出てきやがった」

突如、スタンド使いの気配がし始めた

無人のはずの世界に人間がいるはずねぇ…考えられるのは

「！やっぱテメェかァッ！紅い魔導師ッ！」

頭上に向けてスカーサファイアの腕が振るわれる

太陽の光を受けて出来た影より現れた巨大な足を殴りかえした

突然の衝撃に回りの砂が吹き飛び、視界が悪くなる

「…譲一ッ！！」

「あとですぐに追い付いてやる！だから蒐集を！！」

怒鳴るように急かすと、ヴィータの気配が遠ざかったのを感じた

入れ替わるように来た別の気配に対して俺は、自分の周囲から一気に大量のひびを生み出した

バキバキと音をたてて、触れたもの全てを問答無用で壊して引き裂く荊が回りの土煙を吹き飛ばせば、偶然生まれた安全地帯に紅い魔導師がいた

「テメェ…こんなとこまでわざわざ出てきやがって…」

「ふむ、どうやら聞きたいことがありそうな目をしているな？」

「そりゃ山程質問があるからな！」

スカーサファイアが地面を掬うように腕を振るうと砂の海を割っていく

「む！」

次第に砂漠は沈み始めて来たことに気付いた相手は直ぐにバックステップから宙に浮き始める

「例え砂漠だろうと地割れを起こすことができるッ！遠慮する必要のないここなら俺の能力は好き放題使えるぞ！」

攻撃して現れたのだから相手の目的のひとつに戦闘が含まれてるのは明白、最初から手加減抜きだ！

能力を使い、背後に現れれば相手はギリギリ反応して後ろに槍を振るってくる

首を目掛けて放たれた一閃を仰け反って避け、一歩踏み出す

そこからはスカーサファイアの射程距離！そしてッ！

「オラァッ！！」

自らひびの入った腕で殴りかかる！

スカーサファイアを影にした二段攻撃だ

小学生の小さい体だからこそできるやり方、そして俺の腕は今スカーサファイアそのもの！

アンブラをスカーサファイアが抑えることになるから手数が足りなくなるのはわかっている

だから手数不足なら俺自身が補う！能力不発のエネルギーを送り込めばバリアジャケット越しにもダメージは入るからだ！

スカーサファイアを阻むように現れたアンブラを越えて、接近する

槍を振り切った状態に地から少し浮いただけの状態

バリアを張っていたみたいだが、世界を引き裂く力の前に何の障害にもならずに紙のように切れる

そしてメット越しに息を飲む声が聞こえた気がした

「逃げ場無ぇぞオラァッ！！」

ぶっ倒して情報を聞き出して魔力を蒐集してやる

そんなことを考えていたせいか、こちらに向かってくる閃光に気付かなかった

「ぐあっ！？」

「うッ！？」

紅い魔導師も俺も横っ腹にそれが直撃し、くの字に吹き飛ばされる

互いのスタンドも消えて、砂の上に打ち倒された

「なんだってんだクソッ！！」

「この、攻撃は…ッ！」

立ち上がり、脇腹を押さえながら攻撃の飛んできた方向を見る

そこには大剣を持った奴が、富出庵がいた

込み上げてくる吐き気は、奴から放たれる邪悪のせいか

やっぱ学校とでは空気が違うんだな…あれが本当の奴なんだろうから

とたんに隣から沸き上がる殺気

紅い魔導師が富出を睨み付けたからだ

「お前は…！」

そして割れたメットから覗く横顔は俺の知るクラスメイト、矢口亮だった

「何だか最近、原作に介入できなくてなぁ？最初からお前を着けてきた…案の定、やっと俺が介入出来るとこまできたぜ　やっぱ主人公の俺がいないと物語は始まらないからなァッ！…しっかし矢口お前がレッドマンだったとは…」

「原作？介入？主人公？物語？なんだこいつ…なにいってやがるんだ」

「…お前も、転生する前に説明を受けていたろ…」

勝手に俺の肩を掴んで立ち上がる紅い魔導師こと亮

敵だからイラっとするはずだが、体の痛みが若干引いているのに気付いた

肩を掴む手を見るとシャマルのように淡く優しい光が出ていた

これは回復魔法？何で俺を…

「説明をって言っても、んなもん知るかよ…」

「ここは一人の少女、高町なのはを主人公に置いた物語の世界…介入は物語にいないはずの俺達の存在だ…お前はただ物語に沿ってるだけだが」

「沿ってるだけ…？これは物語だっていうのか？…じゃあ、俺が、俺たちが、今やってる事は物語の筋書きをなぞっているだけ…？」

「…俺も富出庵も今の状況を知っている…闇の書事件と語られる物語…故にお前が闇の書の主でないことも、真の主が八神はやてであることも、闇の書も、守護騎士も…そうなると決まっていたこと」

「何だよ…それ…ふざけんなよ……知っていたのか！テメェ！なんで、なんでわかってて！」

「下手な介入は物語を、世界を壊す、ただでさえ俺たちの存在を楔にして現状を留めているのにそんなことをしてみろ…富出庵の存在を抑えきれずに世界が滅ぶぞ」

つかみかかろうとした俺をジロリと睨みそんなことを言う

黙って、いつも通りにしていろって言いたいのかよ…

「なんだそいつ、原作を知らなかったのか？何にショックを受けているのか知らないが、俺の物語に邪魔なお前らを排除しなきゃな…

なのは達もはやて達も俺が支えなきゃならんのだから」

支える？俺が？

あの、ようやく笑えるようになってきたはやてを？

なんか、すっげぇ嫌だ

俺の存在感に感じた嫌悪より、胸のうちから怒りがふつふつと沸いてきた

「それに、何度も俺を殺そうとしてくれた矢口の魔の手からフェイトを救わないとな…そして俺が物語をハッピーエンドにしてやるのさ！」

「救う？笑わせるなよ　お前の欲望のためだけに、人々の意思をねじ曲げて都合のいい物語に壊されてたまるか…」

「ハァ？何を言ってるんだお前は、所詮物語の世界なんだ　どいつもこいつも与えられた役割、台詞しかないようなもんに情でも抱いたか？」

その言葉に俺は怒りが溢れ出した

自分の周囲に勝手にひびが入る

「…物語、物語って…ふざけんじゃねぇぞテメェッ!!意思も心もちゃんとあって生きてんのに作りもんみたいな言い方しやがって!!」

「実際に作りもんなんだよ?何怒ってんだか…だからイレギュラーな俺がちゃんとした心を与えてやろうとだな」

紅い魔力弾が奴目掛けて飛んでく

しかし、全て壁のようなものに弾かれた

撃ったのは亮だ

殺気の中に怒気が混ざり始めている

「お前にとって都合のいいように洗脳紛いの刷り込みをすることがか?」

「洗脳はお前だろう!フェイトに余計な事を刷り込みやがって!」

大剣を振るい剣圧を飛ばしてくる

凄まじい衝撃波に腕で顔を覆いながら富出庵を見据えた

「全て都合のいいことに変えようとする!富出庵!!お前は独善的なだけだッ!!フェイト達に近づけさせてやるものかッ!!」

「ちゃんと皆を見ないテメェがはやて達を支える？死んでもお断りだッ！！テメェがどれだけ邪悪かすら気付かないそのドス黒い悪ッ！！絶対にぶっ倒すッ！！」

「人を勝手に悪者呼ばわりしやがって…ふっ、俺が主人公で居続ける為の礎にしてくれるッ！！来い雑魚ども！！最強の力を味わえッ！！！」

とてつもない魔力を全身から吹き出しながら迫る富出庵に俺はスカーサファイアを出して、亮はアンブラを影から出しながらぶつかった

どれだけ相手が強くて、恐怖を抱いても、こいつだけには負けるわけにはいかないッ！！

青と赤、強者乱入（後書き）

話を5話くらいストックしようとしたけど結局投稿しちゃったっていうね

決してエクシリア楽しいなぁとか、エリーゼかわいいなぁとか、そんなことはないはず…

……意志が弱いなサノブは

譲一ＶＳ亮にしたかったけど、ＶＳなのは、ＶＳ闇の書、ＶＳ闇の書の闇を考えてＶＳ庵にチェンジしました

次回は亮のターン

クソッもっとザッフィーを使った話を書きたいッ

この思いは空白期に爆発させてやるッ

赤と青、強者に牙を剥いて（前書き）

ふうふはじめてのきょうどうさぎょう（ただの共闘）

※１１月２２日修正

赤と青、強者に牙を剥いて

サリィはリニスと勉強会をしていた

来年から学校に通うことになったのである程度はついていけるようにと

スタンドが知識も得る性質を持っていたからか真綿に水が染み込むように覚えがよく、リニスも教えがいがあって充実している

サリィも来年からの亮との学校生活のために楽しそうである

部屋時計の針が3時を指したのが見えたリニスは一度教材を置いた

「そろそろ一度休憩しましょうか」

「ん！お菓子食べたい！」

「今お持ちしますね」

区切りのいいところまでいって、一度鉛筆を置いたサリィ

甘く優しい香りもしてきたところからリニスはココアを淹れてくれたのだろう

そんなときに小さくパキリと何かが聞こえた

「??」

音の出所である台所に行ったサリィは作業をするリニスを横目にあるものを見つける

普段亮が愛用している赤いコップ

コップには僅かにだが小さくひびが入っていた

「…なんか嫌な感じ…」

ボソリとサリィはそれを見て嫌な予感を感じるのだった

ＳＩＤＥ　亮

「どうしたどうした!?さっきまで偉そうに啖呵を切ったわりに大

したことないぞ！？」

「くそがッ！調子にのってんじゃねぇ！！」

スカーサファイアの能力を使った譲一が、転移を繰り返しながら雨霰に降り注ぐ魔力弾を避けていく

大量の魔力弾、その光景はいつかのサリィの時と同じだ

だがアレと違って、一発一発が全てとてつもない威力を秘めている

誘導弾が撃てないという事実があるだけよかったが、それでも爆撃さながらの惨状に手も足も出せない

「まだ殺してはやらないが、たっぷりと痛め付けてやるぜ！矢口亮ァッ！！お前もだァッ！！」

「チィッ！！バカ魔力が、バカスカ撃ちやがって…！！」

「フゥーハッハッハッハーッ！！ＷＲＹＹＹＹＹＹＹ！！」

次々に放たれる魔力弾をこちらも魔力弾で迎え撃ち、その間に別の魔法の準備をする

「何かやろうとしているようだが無駄なんだよ、俺に攻撃なんてものは届かないのさ、無駄無駄…」

「それはどうかな？ヴォルケイノッ！！」

頭ひとつ分ほどの大きさの魔力の塊を複数目の前に発射

全てが下に向けて落ちていく

「どこに撃っている？馬鹿にしているのか？」

それを見ていた奴は首を傾げるだけ

譲一はあの塊に脅威を感じたか、離れていく

「イラプションシフトッ！！」

塊が明滅したあと轟音をたてて火柱を放つ

さながら火山の噴火の如く、それは宙にいる庵を飲み込む

「やったのか？」

「これで勝てたら苦労はしない…アンブラッ！！」

火柱から生まれた影を伝いながら、この星の原生生物以上のサイズになった腕を降り下ろした

「この程度の火など暑くないわ…ってうおぉぉぉぉっ!?」

火柱を抜け出てきた庵をバリアごと叩き潰すッ!!

スタンドを見ることのできない奴は、重力魔法か!?などと叫びながら砂の海に沈みこんだ

「うわぁぁ…」

「ボヤボヤするな、あいつはまだ無傷なんだからな」

「けっ!分かってるよ!!後で蒐集してぶん殴ってやるからな!!」

「生きて帰れたらな」

軽口を叩きながら、サイズが小さくなっていくアンブラの方に走っていく

俺は宙に浮かび、ブルーブレイズを銃のように構える

「このッ!!つまらない真似をッ!!」

「そこだァァッ！！」

やはり何の傷を負わずに出てきた庵に向かって、譲一が飛びかかる

スタンドのパワーを得ることの出来る譲一は驚異の脚力を持って、

足場が不安定なはずの砂漠で銃弾のような速度を出していた

だが、それでも奴にはダメだ

「なんだそれは？止まって見えるぞッ！」

「なにィッ！？」

一瞬

大剣を素早く振るい、譲一を切り捨て返した

まさにその言葉通りの早業

しかし、体の半ばで刃は止まった

「ッ！？斬れてないだとッ！？」

「あ、あぶねぇ…何て速さだ…下手すりゃ完全に両断されていた！

だが、これで！」

「ふんッ！だからお前は雑魚なのだ！！」

カチリと音がすると同時に爆音が砂漠に響いた

奴のカオスキャリバーに内蔵されてる銃の機能で譲一は吹き飛ばされていた

確かに、俺の時のように譲一は門で締め上げて武器をその場に固定するのはいいだろう

しかし、それは奴には不正解

相手は動揺しても冷静なままだ

奴もまた強くなり続けているのだから

吹き飛ばされた譲一の後を追うように飛び出す庵目掛けて魔力弾を放つ

なんとか足を止めてくれたようだが、俺目掛けて魔力弾と剣圧を撃ち出してくる

体に何発も掠りながら、譲一を庇うように立ちふさがって見せた

「あいつを殺させるわけにはいかない…ッ！」

「それで守っているつもりかよ！？えぇッ！？」

「黙れ！ブレイズキャノンッ！！」

巨大な極光を槍先より放つ

が、やはりあいつの何枚も張られたバリアを抜くことはなかった

甲高い音がまるで無駄だと俺にささやいているようで耳障りだ

それでもと出力を上げて押し込む

だけれどその奥にいる奴は俺を見下し、嘲笑っていた

「貧弱貧弱ゥ！こんな弱々しいのがブレイズキャノンとは笑わせてくれてるのか！？逆にこのままバリアで押し潰してやろうッ！！」

「ぐうぅぅッ！！」

ギリギリと押されていく…このままではダメだ…避ければ、後ろの譲一ごとやられてしまう…

「はぁ…はぁ…亮…」

「なんだ…！こっちはこっちで忙しいんだよ…！」

「今から飛ぶから、あのバカをテメェの影に閉じ込めやがれ…」

「いきなり何を言って…それどころじゃな、」

足を掴まれた感覚がした途端

何か、別の世界を通る感覚がした

気付けば、さっきまでいた場所にはバリアで押し込んだことによる爆発が起きていた

土煙で富出の奴すら見えなくなっている

そもそも俺は今どこにいるんだ?

「?俺は…空にいるのか?」

「あのバケモンをちょっとでいいから、取り押さえやがれ……あいつのいけ好かねぇ面を歪ませてやらぁ」

頭上にひびを入れてぶら下がる譲一は口から血を吐きながら俺を宙に放り投げた

確かに今なら奴の気配の真上にいるからアンブラで封じることが出来る…

俺では奴の防御を越えられない…だが譲一なら出来る

お前がやるってんなら、俺はお前が攻撃を通せるようにしてやるよ

「！上だと？いつの間に…」

「アンブラァッ！！」

俺の影から手が伸びる

そして俺の影が奴の影に触れよう動く

だが奴は俺の能力を一度受けていたからか直ぐ様離れた

「また奇妙な力で俺を止めようと考えたようだが…影に気を付けれ
ば大したことなど」

「まだまだだぁぁーッ！！ブレイズキャノンッ！！」

「どこを撃って…」

奴の遠い後ろに閃光が伸びる

そしてその光を受けた俺と奴の影が巨大な物へと変化していく

いくら逃げようともその大きさに流石に逃げ切れないはず

これで奴の影に！

「馬鹿がッ！この程度でッ！」

しかし、奴は俺の予想を大きく裏切るように人間離れした勢いで飛び出し、僅かな差で逃れ続ける

出力を上げて光を巨大なものに変えて見せるも変わらない

……これまで俺が戦っていた時の速さはまだ序の口だって言いたいのかよ…！

「小細工なんざ考えやがって…今からその下らないことを考える頭を吹き飛ばしてやろうッ！！」

「クソッ！あと少し、あと少し、だけ影が足りない…！ダメだっていうのか？俺では…！」

「弱音吐いてんじゃねぇ、俺がいんだろーが」

真横を何かが通り過ぎ、砂丘の頂上に突き刺さる

それは一本のナイフだ

それが日の光を浴びて、細く、長い影を生み出している
砂丘の影も相まってその影は確かに足りないはずの隙間を埋めて、
ひとつの巨大な影になっていた

「ッ！！庵ィィィーッ！！」

アンブラを即座に伸ばして奴の足を捕まえる

さらに俺はカートリッジをリロードしてバインドを発動しまくる

奴のふざけた身体能力を封じるべく、チェーンバインドが砂漠よりいくつも伸び、腕の間接部等を動かせないように幾重もバインドを仕掛けた

「うおぉぉぉッ！？馬鹿なァッ！？あんなナイフ一本にィッ！！」

「ぐっ、ぐうぅぅぅッ！！」

拘束を振りほどかんと暴れる奴に何度もバインドが砕けては新たなバインドがまとわりつく

俺はその間に何発も自分の魔力を持たせるべく、カートリッジを使用していく

自分の中にあった力の喪失感がこれまで以上なのを感じ、なんとか

持たせる

絞り出すような感覚に額から汗を流しながら未だに暴れる奴を止めようとバインドを発動し続けた

「おのれェッ！こんなものでェ…抑えきれると思うなァッ！！」

「馬鹿力がぁっ…！！あぁぁぁッ！！！」

奴が十全に力を振るえないように片足を砂の中に引きずり込ませる

すると突然の感覚に戸惑ったか僅かに力が緩んだ

踏ん張れないせいか、動きを鈍らせることに成功した俺はすかさずバインドを重ねた

そして

「うがぁぁ……ッ！」

「今だァッ！！譲一ィィッ！！」

「いくぞオラァァァーッ！！」

一瞬にして目の前に転移した譲一が、スカーサファイアが、拳を構える

「くッ！俺を攻撃しても鉄壁のバリアを抜けるはずが…」

「んなもん知るかぁぁーッ！！」

「なっ…」

譲一の拳が、次々にバリアを抜いていく

当然だ、空間を壊すという常識を越えた災厄の如き力を前にどんな壁を立てようが、壁ごと壊していく

どれだけ攻撃を当てても傷がつかないバリアを抜くとは、羨ましい能力だよ

そして最後の一枚を抜いたとき、譲一の背後にいた傷だらけの巨人が動き出した

「馬鹿な…こんなことが…俺のバリアが簡単に…！」

「俺の行く手を阻むもんがなんだろうが、全てぶっ壊してやるまでだ…！例え最強の盾だろうと！」

「ふざけるなぁ雑魚がぁッ！？」

迫るスカーサファイアの拳に気付かずに、わざわざ大剣を振るうも

僅かな動きにより紙一重で避けられた
流石に奴がスタンド並みの身体能力をもってしても限界がくる…
バカでかい上に重そうなデバイスを手にしてるせいで自分の身を守りきれていない

「グゥッ！？」

スカーサファイアの拳ががら空きのボディをとらえる
その衝撃にたたらを踏んだ奴は大きな隙を見せた
絶好の隙を逃す筈のない傷だらけの巨人は乱打の暴力を振るわれる

「オラァァァーッ！！」

無防備となった奴の体を拳が何度も殴っていく
俯いた顔からわからないが、相当な攻撃を受けたのだ

それに止めと言わんばかりに腕を一度引いたあとに渾身の一撃が奴の体を砂の海へ殴り飛ばした

赤と青、強者に牙を剥いて（後書き）

皆名前の呼び方安定しないな

それが富出庵クオリティ

今回の戦いは慢心しまくりな富出庵です

そして主人公二人の共闘

そこまでのものじゃないけどね

果たして本当に譲一＆亮ペアは勝ったのか？

それは次回に続きます

それにしてもこの戦いで思い付いたんだけど、譲一＆亮＆なのは＆フェイトＶＳ庵っていうフルボッコバトルをいつかしたいと思います

実現するかわかんないけどとんでもない惨状になりそうだ

俺は見捨てない（前書き）

思わずネタ帳でゴキブリ叩き潰しちゃった…ｏｒｚ

※１１月２２日修正

俺は見捨てない

ＳＩＤＥ　亮

乾坤一擲

まさに全ての力をのせた一撃

バインドを突き破り、飛んでいった富出は砂漠に大の字で倒れている

「グフッ…はぁ…はぁ…ざまぁ見ろってんだクソカス野郎が…ゴホッ」

「倒したのか…？」

先程のゼロ距離射撃に内臓か骨をやられているのか譲一の吐血が止まらない

足元も覚束なくなってきているのか何度も足が砂を踏み鳴らしている

流石にこれは早く治療させないと不味いな

だというのに譲一は俺を見て不敵に笑い

「さぁ、続きといこうぜ…？」

「馬鹿かお前は？」

「あん？馬鹿とか失礼だな…言っただろーが　俺は蒐集してぶん殴ってやるって」

「お前、そんな状態で戦えるわけないだろ！」

「うるせぇッ！！救えた筈の人間を物語だからって見捨てるような真似しやがったテメェのその考えは嫌いなんだよ！！ぶっ倒して蒐集してそのあともっかいぶん殴るんだ！！」

「…っ俺だって…フェイト達と会って守りたいものが出来た……だが彼女達の生きる世界に不必要な干渉は、全て歪めてしまう…介入か、物語に沿っていくことしかできない…下手に介入して改変に変われば富出の奴と同じことなんだ」

「だからって！見てみぬフリは出来ないだろ！？確かにこの世界は物語かも知れないが生きてるんだ！俺も皆もここにいる！俺は…！ゲフッゴホッ！！」

「！！譲一！！」

「あぁ！？俺の状態なんか心配してる暇なんて…」

譲一を押し退けてソレに立ちはだかる

斬撃が、深く入る

とっさに張ったバリアは簡単に切り裂かれ、バリアジャケットも破れた

視界に鮮血が飛び散る

これは、不味い…傷が…深すぎる…

立っていられない俺は膝をついてしまった

「ふっ…中々に痛かった…だが、やっぱり無駄だったなぁ？」

カオスキャリバーを振り抜いた富出がニヤニヤと、俺を見下ろしていた

「亮、お前…ッ！！」

「ふんッ！さっきはよくも好き勝手にやってくれたな？雑魚がバリアを越えただけではしゃぎやがって…」

「く…何で…」

「は？そりゃ痛くても軽いからに決まってんだ、ろっ！」

「ガァッ…！」

蹴りが傷を抉るように入り、更に血が出る

子供の蹴りとは思えない衝撃で、後ろの譲一を巻き込んで砂漠に転がされた

「ぐぅぁっ……く…なんでだ…」

譲一のスカーサファイアは本気ならバリアジャケットごと人体に穴を開けられるほどの力があるはずだ

手加減していても相当な打撃が入っているのに、効いてないのだとしたらこいつはどれだけ頑丈なんだ…

「ハハハハハッ！！無様だなぁ！？矢口亮！？」

「うぅ…」

「おい！亮！しっかりしろ！」

「結構綺麗に斬れたからな　これは剣の腕が上がったかな？」

「くッ！庵テメェッ！！」

「あー、まだお前がいたんだっけね…さっさと始末してなのは達を助けなきゃ」

砂を踏みしめる音が死神の足音のように聞こえる

まずい、俺も譲一も満身創痍だ

せめて、せめて譲一だけでも助けなければ！

「う、アァァァッ…！」

「まだ立ち上がるのか？お前も存外しぶといなー」

「うる、せぇ…！」

足に力が入らない

だが、それでもやるしかない…

「ウザいから消し炭になるといいよ」

カオスキャリバーを上に掲げると剣へとなのは張りの魔力が収束している

やがて巨大な刃となったそれは今か今かとはち切れんばかりに明滅

していた

その光景に悪寒覚えた俺は直ぐに行動に移る

あれを降り下ろされる訳にはいかない…！

「させるかァァァーッ！！」

「ぬぅ！？」

「亮！？」

ブルーブレイズを槍から四つ爪の大型のクローへと変えて相手をバリアごと挟む

アンブラの足を踏み台のように出して、俺ごと庵を遥か先へと押し出した

譲一の叫びが聞こえるがそれも直ぐに遠くなる

回りの景色が次々に流れていった

衝撃で体に激痛が走る

「うぉぉぉッ！？その傷でまだそんな力を！？」

「あぁぁぁぁぁっ！！」

挟み込んだ状態でブルーブレイズに魔力を集中させる

「お前正気か？こんな至近距離でブレイズキャノンを放ったら俺のデバイスに溜まった魔力ごと自爆するぞ！？」

「それでお前に傷を負わせられるなら…！ブルーブレイズ！カートリッジロード！！」

飛び出す薬莢、更に規模が大きくなる魔力塊を見て本気だと分かったのか、奴の顔に焦りが生まれた

「ま、待て！落ち着、」

「ブレイズ、キャノンッ！！」

魔法が炸裂する

バリアを目前に魔力が稲光のように辺りに散らばっていった

そして視界が極光に包まれる

全身を激痛が襲うと直ぐに意識を失っていった

ＳＩＤＥ　譲一

砂漠に光の柱がそびえ立つ

それは亮が庵もろともアンブラの力で飛び出した方向だった

「あの野郎…！」

自分の命に代えても俺を助けようとしやがった！

さっき自分で守りたいものが出来たとか言っといてそれか！？

ふざけんじゃねぇぞ！

お前、それじゃあ守りたいものを結局他人に押し付けてるだけじゃねぇか！

俺を一度庇って斬られてるのに勝手に無茶しやがって！

「死なせねぇ…！」

なんであの馬鹿にイライラしなきゃなんねぇんだよこの俺が
亮の奴蒐集したあと殴るだけじゃ済ませねぇからな
体が思うように動かない俺はスカーサファイアに抱えられながら転移していく

『ヴィータ…』

『譲一か!?無事だったんだな!!』

『悪い、イレギュラーが発生しやがった…直ぐに長距離転移の準備しといてくれ』

『お、おい!待てよ譲一!それよりさっきのあの光は、』

念話を一方的にかけておいてあっさり切る頃には何かの爆心地のような場所にいた
ここがさっきの光の場所か…
砂が焦げ付く程の破壊力にゾッとする

「亮何処だ!まだ死ぬんじゃねぇぞ!」

叫びながら中心に向かって降りていく

何度も転びそうになるが足を止めるわけにはいかねぇ

そんなときに砂に紅い腕を見つける

直ぐにかけより、スカーサファイアで引き抜いた

全身をボロボロの亮が出てくる

自分の血でさらに紅くしたその凄惨な姿に息を飲む

「ぅ…」

「亮!?まだ生きてるか!?」

「フェ、イト…サリィ…」

「おいしっかりしろ!」

重体の亮をなんとか持ち上げ歩いていく

こいつの近くに落ちていた槍を拾い、ヴィータとの合流地点に急ぐ

だっていうのに…

「その死に損ない、抱えて何をしている?」

「そこを…どけよ!庵!」

刃が若干かけて、体にほんの少し火傷と裂傷を負った富出庵が立っていた

「譲一…俺は今、怒っているんだ…格下も格下な奴にこんな傷を負わされて…ふざけているとは思わないか?」

「さぁ?お前が侮ってたのが悪いんだろが…ざまぁ見ろよ」

「ふん…譲一、一つ取引しないか?」

取引だぁ?

こいつ、一体何を言っているんだいきなり

そんな俺をよそに奴は俺の隣を指差す

「簡単だよ…そのお荷物を置いていけ　そしたら命は助けてやる」

「…なんだそりゃ…」

「不愉快なんだ…最強である俺を捨て身の自爆技なんかで傷つけら

れたことが…そいつが虫の息だとしても俺は未だに存在していることが許せない」

「……ガキかよお前…」

「何か言ったか？」

「いいや何も…」

亮を差し出せば命は助けるか

俺には家族がいるし、はやて達の事がある

死にたくない言い訳に使うような感じも少しだけあるが死ぬわけにはいかねぇ

こんなスタンドが通用しないような奴と戦いたくないからな

だからって、自分だけのうのうと生き残るのは違うだろ

「…断る」

「何故だ？たかが一撃を庇われた借りか？それとも意地か？」

「俺は、見捨てねぇ…ただそれだけだ…」

「そもそも敵対していたろうに…意味わかんない…まあいいや、結局、一人や二人消すのになんの問題はないし…」

大剣を構える庵をどう抜いてやるか…

確か、バリアは抜けるんだよな…

だったらあの裂傷に直接一撃を叩き込んで見るか？

「死ぬ準備は出来たか？」

「いいや？遺言がないな」

「こんな状況で軽口を…ゴブッ！？」

庵が突然血を吐血し出す

同時に体をかきむしるように強く胸を掴み唸り出した

これは…スカーサファイアの能力か…よかった…効いてないのかと思ったが…

「へへっ…無駄…じゃなかったな…しっかり食らってるじゃねーか…」

「ぐうぅぁぁ…貴様ぁぁ…！！何をしたぁぁ…！！」

ギロリと睨まれて背中に冷たいものが流れた
もしかして…ちょっとこいつはやばいか！？

「譲一ィィッ！！」

張り詰めていたその場を引き裂くような高い声がする
俺はハッとして上を見ると巨大な鉄槌が庵を叩き潰していた
突然の不意討ちに足が砂に埋まっていたのが見えた

「な、ヴィータ！なんで来たんだお前！」

「うるせぇッ！いいからさっさと離れるぞ！」

何か…すっごい怒ってね？

俺が一体何をしたというんだ

言われるがままにヴィータが飛ぶ方向に亮と共に転移を繰り返し、
あいつから大分離れたところで長距離転移した

さっきまでいた砂漠の世界ではなく何処かのビルの上に辿り着く
そのあとさらに俺が別の建物に何度か移動してようやく力を抜く

「何とか離脱出来た…まさかヴィータが乱入してくるとは…」

「お前！なんでそんなボロボロになってんだよ！心配したんだからな！」

？ヴィータが心配…
そんなこと考えてるアイゼンでぶん殴られた
凄い痛いんだけど…

「そ、それと！はやてもシグナム達も心配するだろうからなっ！」

「なんなんだ…一体…まぁいいや…先に帰っててくれ…」

「…そいつを治す気なんだろ…だったらシャマルに」

「一応敵だからな…友達に直させる…俺も服とか血塗れになってるしこのままじゃ不味いだろ」

「……」

「なんだよその目は…」

「なんで敵を治療するんだよ…蒐集でもするのか？」

「いや、こいつとは一回サシでボコボコにしないと駄目だ…それまで許せねぇからな…こいつの蒐集は二の次だ」

そう、ちゃんと決着をつけなきゃならねぇ

こいつにはちょっといろいろと分からせる必要があるみたいだからな

ヴィータと別れた後に一度俺の家に向かった

俺の部屋で亮を寝かせると、ある家の部屋に勝手に転移するのだった

俺は見捨てない（後書き）

庵戦、だいたい主人公二人は敗北ですね

スタンドのパンチを軽いですませるとか

そのうちスーパー庵タイムとかやるかもしれん

それはそうとサノブ、この間酔っぱらいに突然ぶん殴られまして

その時の酔っぱらいの意味不明な言動の「俺は見捨てない」をタイトルにいただきました

ネタとしてありがとう酔っぱらい

それにしても、唇が痛い！

あと殴られた跡から血が出て痛い！

酔っぱらいさんからビビって逃げちゃったけどあれって傷害罪で逮捕できたんじゃ…

彼女は金色の少女？（前書き）

難産ダッタノデス

「ぉわぁっ！？譲一テメェ！なんでいつも俺の部屋に転移してくるんだよ！？」

「あぁ…宿題やってたのか…悪いな光…」

「あ？お前、なんでそんな血塗れなんだ？？」

「ほんといきなりで悪いんだけどよ…由香さん…いるか…？」

ＳＩＤＥ　亮

「…ぅ…？」

閉じられていた目が覚める

閉じられていた?何故?何があった?なんだ?ここはどこだ…?

靄がかかったような思考が次第に鮮明になっていく

確か、譲一のスタンドの強化の為に戦いを挑んで…それで…庵の奴が乱入してきて…

俺は…そうだ俺はッ!

「……っ!!」

ガバリと跳ね起きて辺りを見渡す

しかし、そこは俺が戦っていた筈の砂漠ではなく見知らぬ誰かの部屋

格好もバリアジャケット姿から私服姿に変わっている

傍にはネックレス状の待機状態のブルーブレイズが置かれていた

斬られたはずなのにある筈の痛みがないのに気付き、服を捲ると何一つ傷がなかった

本当に何が起こったんだ?

『目が覚めましたかマスター?』

「あぁ…それよりここがどこか分かるか?」

『藤城譲一の自宅のようです』

「なに？だとすると譲一の部屋かここは？」

改めて辺りを見渡すと何だかデフォルメされた動物のぬいぐるみの山が見えたりしたんだが…随分とファンシーな趣味をしてるな…

「何か不都合でも？」

声のする方を見ると髪を下ろし、目を細めた、普段学校で見かける姿と変わらない譲一が扉を開けて立っていた

だが柔和な笑みを浮かべてはおらず、不機嫌だと一目で分かる

「それにしてもソレって喋るんですねぇ」

「あ？ああ、そういうデバイスだから…」

「ふーん」

羨ましそうに見ているがもしかしてデバイスが欲しいのか？

だが視線をこちらを戻した彼はズンズン歩いてくると拳骨をかましてきやがった

……庵程で無いにしろ小学生とは思えない力で殴られたからか涙目になった

というかいきなり何故殴るんだ

「守りたい者が出来たとか抜かしておいて、自分の命を捨てるような事をした罰です」

「罰って…お前…」

「怪我もきれいさっぱり治しましたのでさっさと帰りやがってください　如何な理由であれ、あんなふざけた真似をした貴方を見ているとラッシュを決めたくなってきますからねぇ」

そう言って背後に腕を組んだ傷だらけの巨人を出した姿はかなり迫力があった

ベルトに覆われた顔から覗く瞳が怪しい光を放っていたのは見なかったことにして

「何故、助けた？俺とお前は一応敵同士だぞ」

「……とっても不愉快なのですが…そう、ほんっっっとに！不愉快なのですがッ！貴方は悪い人間ではないのだと勘が告げてるんです」

正直ボコボコのギタギタにして病院送りにしたいんですがねッ！！
と続く彼は俺に向けて中指を立てていた

少し呆気に取られていた俺を見て、頭をガシガシと掻いていた彼は
続けて言う

「守りたい、何て言うならそれは貴方にとって大切な人でしょう？
それに貴方の帰りを待つ人もいるはずなのにその人達すべて残して
逝くつもりですか？」

「俺は…」

「死んでも守るなんてのは僕は反吐がでるほど嫌いです…死んだら
結局そのあと守れない、誰かが自分のように守ってくれる保証なん
て何処にもないのに、そんな自己満足で守った気になるなんて馬鹿
のすることです」

「…それは言いすぎじゃ…」

「そもそも貴方の守りたい者…その人の何を守るつもりなんですか
？」

「何を、守る…」

「僕は笑顔を取り戻したはやての世界を守りたい　自分のように静
かで穏やかな平穏が望めるように…その為なら幾らでも拳を振り上
げれますよ僕は」

「譲一…」

「彼女の世界、自分の平穏に命を賭けることはあっても死ぬ気はありません　僕もまたはやての世界の一部で、はやては僕の平穏の一部だ…始めから死ぬなんて守りたい人を悲しませて後悔しますよ」

脳裏に浮かぶ一人の少女

初めて会った時は、ただ庵を倒すことしか考えて居なかったけれど…

そうだ…俺は…彼女を遺して…死ぬ気だった

命を捨てるつもりでやるのではなく命を賭けるべきだった

庵に勝てないせいでネガティブになってたか

悲しませてでもやらねばならない、なんてのはつまらない言い訳に聞こえてくる

短い期間、共に過ごして、見ていられなくなって、気付いたら深入りして

自分が甘い奴だとは分かっていたし、そのせいでリニスやサリィまで守ろうとしてる

自分でそうやってやってきたことを使命の為にぶち壊してやる必要はない

譲一の在り方が眩しく見えた

「と、とにかく！こんな恥ずかしいこと言わせないでさっさと帰りやがりください！」

「自分から言った癖に…」

「あーあー！きーこーえーなーいー！間違ってスカーサファイアの拳が…」

「はいはい、お邪魔しましたお邪魔しました」

譲一とすれ違うときに小さくありがとうと呟いて俺は玄関にいく

「最後に、庵はどうなった？」

「深手は負わせました　が、生きているでしょうねアレは」

「まだ終わっていない…か…」

「…それと…次に会うときには決着つけますから」

「……分かっている…次は全力で相手をしてやる」

なんて殺伐とした言葉も交わして

「それにしても…本当に痛みがないな…」

街をゆっくりと歩きながら体をさすり呟く

かなり深く斬られたはずなのに外傷も何もなく、ヒビが入ったり損傷していただろう骨や内蔵も治癒しているようだ

魔法でもここまでは瞬時に出来るわけないし、一体どんな治療を施したんだろうか？

譲一にそんな力はないし、かといって闇の書で治療したわけじゃないだろうし…なんだか不気味だなぁ

「亮！」

「ん？」

声がした方向を見ると何処かの帰り道か、フェイトがいた

アルフも居ないようだし、どうやら彼女一人らしい

小走りで走ってきた彼女に追い付かれてふと、譲一とのやり取りを

思い出し、なんかいろいろと申し訳なくなってきた

世界を守るためからフェイトを、そこからきっかけに皆を守ろうとして来た自分がいる

だってのに俺は自分から守ろうとしたのに関わらず投げ出すような真似をしてしまった

「……なんて未熟なんだか」

「？どうしたの？」

「ん、何でもないよ…今度はちゃんと守るからなフェイト」

「え？えぇっ？」

「あ、いや、変な意味はないぞ？ほら、最近嘱託魔導師になって忙しいみたいだし、それに俺の奴が絡んでくるからさ…フェイト達に何かあってほしくないんだよ」

「……」

フェ、フェイトさん！急に黙らないで！

ああもう大丈夫か俺の頭！？

何を俺は焦ってるんだ！？

こういうときは素数を数えて落ち着くんだ俺…

「ふふっ」

「な、なんだよ」

「何だか、一緒に過ごしてた頃の亮に戻ったみたいだから…ビデオメールの返事、いつもの元気もなかったし…」

「…そうだったか？」

「そうだったよ？何だか辛そうだった」

「むぅ…」

「そういえば」

「？」

「いつも学校じゃ話してくれないよね」

「う、ほら、男子達の注目が酷いからさ…」

「…ナルシスト？」

「ちげーよ、お前が可愛いからそのせいで妬みを買う…っ」

「可愛っ…」

「だぁぁーっ！何を話してんだ俺らは！」

二人して会話が下手くそというかなんというか

街中でおろおろしては、道行く人に何だか生暖かい目で見られてしまった

はぁ、恥ずかしい…

結局黙って並んで歩いている

ホントに何やってんだか俺は

いろいろと情けない状態なのに右手を握りしめてくる感覚

顔が少し赤くなってるのとか俺は見てないからな

握り返しながら歩いて、気付いたらフェイト達の住む家の近くまで来ていた

「着いちゃったな」

「着いちゃったね」

ふと、ひとつの事が思い浮かび訊ねた

わかりきったことだけれど、それでもちゃんと聞いておきたい

「フェイトは、このまま管理局に入るんだよな」

「うん…亮はどうするの？」

「…そうだな…うっかりフェイトが悪い男に引っ掛からないか監視するかな」

「わ、私はうっかりじゃないよ！？」

「悪い悪い…そうか、管理局か…」

守る…なら今のままではいられないな

まだ入るつもりはないが、今の闇の書の物語を完結させ、使命を果たさなければならない

事が終わったら、俺も入るか…

そういや俺、先のこととか考えていなかった

そのせいもあって命を捨てようとしてたのか

考えれば考えるほど、使命ばかりにとりつかれていた気がする

守りたいものがある今はなおさら盲目になっていた…無茶してまでやるもんだから心配をかけたな

かといって使命を投げ出すわけにもいかないが、流石に計画を少し見直そう

もう俺の正体がバレたからなのは達に知られるのも時間の問題…なら、表舞台に立つとしよう

そう考えてくると何だか気が楽になった

「よくわからないけど、吹っ切れた？」

「分かるか？」

「いつも難しそうな事を考えてるような顔してたから」

「…そういうお前はもっと笑えよ」

「ちゃんと、笑ってるよ　なのはやアリサにすずか、アルフ…母さんも亮もいるから」

そう言ったフェイトは、出会った頃には見られない優しい笑みがあった

無表情ばかりだった娘には思えない微笑み

「そっか…これからも頑張れよフェイト」

頭をポンポンと撫で、踵を返す

今なら譲一がどうしてあれだけ守りたい思いが強いかよくわかった

家に帰ろうとする俺の背にフェイトの声がかかる

「亮！」

「ん？」

「また明日、会おうね」

「…ならなのは達と一緒に学校行くか」

「うん…！」

使命も大事だが…もう少し自分の想いを大切にしておかないとな

また、命を捨てるような真似はしないためにも

もっと長く、彼女の笑顔を見守りたいから

片手を振るフェイトに片手を振り返して家路へと歩き出した

「……ところで、あれだけ近くにいたのに声すらかけてやらないの

かリニス」

「あの子達の元気な姿を見られれば私は幸せですから」

物陰に隠れていた子猫に小声で話しかける

全く…そんな会いたくて堪らない顔してたら説得力ないぞ？

「頑固だな…もういい、いつか絶対に引き合わせてやるから覚悟しとけ」

「ま、マスター…！」

彼女も、幸せになっていいだろうに…

リニスに追いかけられながら帰宅するのだった

彼女は金色の少女？（後書き）

これは書き直すかもしれん話、仕方ないね

フェイトとイチャイチャさせたいんだがな亮

全てはＯＨＡＮＡＳＩするために

とりあえずリアルが忙しいのと自宅が外より異様に寒いせいで頭が回らないです

このままじゃ自分がＯＨＡＮＡＳＩされそうだ…助けてユーノ君

しかし思ったよりＡ's編が長いな

キングクリムゾンしても４０話超えるかも…

というかＶＳなのはが入るか不安になってきた

僅かな休息と来るべき運命の日へ（前書き）

キングクリムゾンッ！

僅かな休息と来るべき運命の日へ

ＳＩＤＥ　譲一

「なぁ…譲一…」

「なんですか？ヴィータ」

「このまま蒐集をして…闇の書を完成させて…それで本当にはやてを救えるのかな」

「…どういうことです？」

「シグナム達にも言ったんだけど…何だか大事なことを忘れているような気がしてさ…」

風呂上がりのヴィータの髪を乾かしてあげてる間、そんなことを話しかけられる

その表情には何かを思い出せずにいるせいで不安に彩られていた

「まだ完成していないのに結界を簡単に砕く力を持つのならきっと

大丈夫ですよ　はやてを絶対救うんでしょう？」

「そうだけどよ…」

「ほら、そんな顔しない　大好きなはやてが悲しみますよ」

辛気くさいもんだからアイスを引っ張り出してヴィータの首筋につけてやった

そうすりゃ小さな体がビクンと震えて顔を真っ赤にして睨み付けてくる

口をパクパクして魚かお前は

「な、何すんだよテメーッ！」

「ちょっと景気付けに」

「ふざけんなバカ！それとお前はどうなんだよ」

「は？何がです？」

「蒐集、手伝わなくたって良かったのに物好きにも程があるぞお前…その、はやての事が…す、すすす…」

「ああ、それはないですないない…ただ大切な友人を助けたいだけですから　それに僕はシグナムみたいな人が好きですねぇ」

後ろで飲み物を飲んでいたであろうシグナムが噴いた気配がした
が、この際無視してみよう
なんか面白そうだし

「凛としていて、クールでいて、真っ直ぐ、意思の強い瞳！引き締まったあの抜群なスタイルに綺麗な髪！醸し出される大人の色気に多くの男性が振り向くでしょう！僕ならあれだけ綺麗な人を街中で見掛けたら口説きます！」

「なんだその評価…お前何歳だよ…」

「十歳です　キャピキャピの」

「お前絶対年齢詐欺してるだろ…」

ヴィータの突っ込みを聞きながらちらりと横目でシグナムを見ると顔が赤くなっていた
可愛いやつめはっはっはー、なんか楽しいなシグナム
さて、目の前のチビッ娘を見やる

「それに比べて、ヴィータは……ふっ」

「て、テメー…なんだその笑い方…」

「いえいえ…その…絶望的…と、思いましてね…ヴィータの将来が」

「よし、ぜってー事が落ち着いたらぶちのめしてやるからな…」

「大丈夫ですヴィータ…あなたのような娘を好むその手の層の人間が居ますから、安心してくださいい」

ニカッと爽やかに笑ってみたら思いっきり殴られそうになった

だがお前のパンチなんざ当たらんわ

シグナムを盾にこそこそ逃げ回ればシグナムは戸惑っている

「ただいま帰りましたー」

と、夜遅くにシャマルの声が

なんでこんな時間に?それは今ははやてが家に居ないからだ

はやては、今入院している

だから最近は守護騎士達は気を張り詰めることが多くなった

こうやってふざけるのは少しは気を休ませてやらなきゃならん
道化は趣味じゃねぇんだがこの際はなんだってやるさ

シャマルに関しては蒐集で疲れている他のメンツに代わって夜食を買ってきて貰った

出来りゃ外食がいいんだが、そんな暇が皆には無いしな
お陰ではやての作った料理が恋しくなる

「うぐっ！」

「うぐ？」

足になんか躓いた

視線を下げれば狼の姿なのに苦悶の表情を浮かべていたのが分かるぐらいのザフィーラがいた

ごめんよザフィーラ！お前がそこにいたのは気付かんかった！

「隙ありぃッ！」

「ちょ！グーパンっ…」

バランスを崩したところを殴り飛ばされた
地味に痛い！
そしてそのまま後ろに倒れた俺は頭を机にぶつけた

「お、おおぉぉ…いたいぃ…」

「だ、大丈夫か？」

流石に心配したのかさっきの怒りは収まったようだ
そんな俺にシグナムも黙って手を差し伸べてくる

「いくらなんでもはしゃぎすぎだぞ？我らを思ってのことは分かるが」

「すみませんねシグナム…ちょっと馬鹿やり過ぎまし、たぁっ！？」

「っ！？」

立ち上がろうとして、頭を打った衝撃でふらついてた足がもつれてしまった
すると前につんのめってしまうわけで

シグナムを巻き込んで倒れこむ

「あ…」

「…ッ！？／／／／／」

「……」

「……」

「さっき大きな音がしたんですけど何かあった、んです…か…」

シグナムの上に覆い被さるように乗っていて、ああ、なんかいい臭いがするなあとか柔らかいなあとか現実逃避してみる

今しがた入ってきたシャマルも皆も固まった

今この瞬間時が止まった

そして時が動き出した時には両頬に真っ赤な紅葉が出来ていた…

「何だか、夢を見ていたような気がしました…」

「見るな馬鹿者…」

「というか何故ヴィータまで…」

「うっせーバーカ」

なんでこんな馬鹿馬鹿言われなきゃならん

あれは事故なのにこの仕打ちはひでぇや

シャマルは苦笑いしてザフィーラからは憐れみの視線を感じた

一応小学生のガキをシバくこたぁないだろうに

「ほら、明日の為にも飯食ってさっさと寝るぞ！」

こないだはシグナムが以前馬鹿富出と戦ったあの無人世界でフェイトって転校生から蒐集してみせたそうだし、もうすぐなんだ…

はやての病室になのは達が見舞いに行っていたのには冷や汗ものだ

ったが、守護騎士達がバレてないようでほっとした
家主がいないこの団欒じゃない、はやての幸せをもう少しで取り戻せる
…だっていうのになんでか胸のうちに何か不愉快な感覚が込み上げる
闇の書の完成につれてそれは次第に膨れ上がった
実のところ、ヴィータのさっきの言葉がどうしても頭から離れないでいる俺がいる
どうかこの胸の胸騒ぎが杞憂であってほしい
不安を圧し殺しながら弁当の蓋を開ける
ふと、カレンダーの日付が目に入った
「そういえば明日はクリスマス・イブか…そうだ、皆さん折角だし明日ははやてのところにいきませんか？」
ＳＩＤＥ　亮

「～～♪」

「サリィちゃんずいぶんとご機嫌ですね」

「ああ、明日はクリスマス・イブだからな…サンタからのクリスマスプレゼントが楽しみなんだろうな」

お茶を飲みながら目の前でそわそわし続けているちっこい生き物がいた

そのまま歌い出しそうな姿には思わず笑顔を浮かべて

とはいえ、明日は一緒に居てやれないことに申し訳ない気持ちが沸き起こる

クリスマス・イブの日…12月24日は闇の書との因縁に決着をつける運命の日だ

俺はフェイトを守るべくその場に行く

……何が起きても、事を進めるために俺は居なければならないのだ

それに、富出庵がまた現れるに違いない

「今回ばかりは、リニスにも直接出向いてもらわないと不味いかもしれないな？」

「恐らく、介入させまいと妨害してきたせいで第４の介入者が居ることに勘づき始めているかと」

「そうだろうな…もしかしたらお前にも危険が及ぶかもしれないが…」

「大丈夫ですよマスター、私は強いですから」

「…悪いな」

「二人して何話してる？」

「ちょっとした秘密のお仕事の話だよ」

「むぅ…混ぜてほしい…」

「あはは、サリィが大人になってからだな」

「アキラだって大人じゃない」

膨れっ面になったサリィの頭を撫で回して、俺はあるものを取り出した

水色の包装紙に包まれて小さな可愛らしい黄色のリボンのついた箱

それを見ていたサリィはパァッと明るい笑顔を見せた

「早いけど、俺達からのプレゼントだよ」

「ありがとうアキラッ！」

抱き付いてきたサリィを受け止めて、このプレゼント選びの時を思い出す

両親がああでもないこうでもないと騒ぎながらプレゼントを探し、リニスはリニスで大分暴走していた親の空気に飲み込まれたか一緒になってたな…

本当に回りの視線が恥ずかしくて痛かった

少しは迷惑とかも考えてくれよ父さん母さん

このプレゼント自体には、明日は一緒に居てやれない申し訳なさもあったりする

一応、明日は真吾の家で遊んでもらってから迎えに行く予定…なんだが、やっぱ無理っぽいかも…

ちゃんと埋め合わせしてやらないとな

…埋め合わせで思い出したが、なのは達の分も考えないと不味いか

も…

明日は色々とこそこそやって来たのが露見する日でもあるんだ

特に譲一とか庵…最悪フェイトや俺をよく知るクロノにリニスによる大暴露大会をやられそうな気がする

問い詰められる…お話？いやＯＨＡＮＡＳＩ…？

ハイライトの無い目で俺を見やり、デバイスを向けるなのは…

『どうして…黙ってたのかな…？フェイトちゃんを助けられそうな時とかわざと見逃してたんだよねそれって…そんなことする必要…ないよね…？…少し、オハナシしようか…？』

……先の事を考えるようになって、何だか胃が絞まるような思いが増えそうな気がしてきた…！

「だ、大丈夫ですかマスター？体が震えてますが…」

「あ、ああ、問題ない　ただの武者震いだ」

「心なしか顔も青い気が…」

「気のせいだ気のせい」

決して同い年の少女がとてつもなく怖いとか断じてない

そう、怖くなんかアリマセンヨ？

今は明日の決戦に備えて計画の確認だ確認

「アキラ？」

「あ、なんだサリィ」

「開けてもいい？」

「ああ、いいぞ」

キラキラと目を輝かせるサリィに頷く

早速開けようと手を伸ばして途中で止まった

「どうした？」

「やっぱり明日に開ける…皆と一緒の時に」

「そっか…もう寝る時間だから寝ような」

そういって三人でベッドに入る

今じゃ川の字で寝るのが当たり前になってるからな

サリィを挟むように寝そべり毛布をかける

「おやすみなさいアキラ、リニス」

「おやすみサリィ」

「おやすみなさい」

瞼を閉じれば直ぐに寝息が聞こえてくる

幸せそうな顔で眠る彼女を見て、余計に明日はしくじれないのだと再認識した

お前の思惑通りには絶対に行かないからな庵

机の上の携帯が振動する

手を伸ばして開けて見れば、フェイトからのメールが一件

内容は友達のお見舞い

クリスマス・イブのサプライズパーティに行くと

僅かな休息と来るべき運命の日へ（後書き）

シグナムＶＳフェイトに乱入のしようが無かったもので…こんな話になってしまいました

元々別の話があったのですが、ややこしくなるだけの話なのでやめました

ＶＳ亮、ＶＳなのはの主人公戦は空白期に持ち込みます

さて、次はクリスマス・イブの戦いになるのですがだいぶカオスになる可能性があります

譲一、亮の存在、庵の存在、そしてやけに大人しい仮面の男

はてさてどうなることやら

Ａ'ｓ編も終わりが見えてきた…けど、やっぱりマテリアル編までやるかも

聖夜の宵祭、開演（前書き）
闇の書を巡る決戦
開幕

聖夜の宵祭、開演

海鳴病院から離れた場所…

一体の異形が一点を見つめている

その視線の先にいるのは４人の少女達

「始マルナ…サテ…ドウ動クカ…巧ク立チ回ラナケレバナ」

そして視線は少女達の歩いていく姿とは別に歩く一人の少年へと移る

「彼女達ノ為ニ、邪魔者ハ排除スル…！」

異形の側から同じ姿の異形達が次々に現れると、先程の少年、富出庵に向かって駆け出した

舞台の幕開けは近い―…

ＳＩＤＥ　譲一

「はやてちゃんが…闇の書の主…それに藤城君がはやてちゃんの友達…」

「そうですね　結構前から長い付き合いですよ」

「それに、蒐集の時にいた…」

「はやてを救いたいから協力したまでです」

ビルの屋上で二人の少女と対峙する

高町なのは、フェイト・テスタロッサ

はっきり言って、失念していた

月村すずかと友人になるということは高町なのはらとも友達になるということ

そして彼女らがサプライズ・パーティのひとつやふたつやるぐらいわかっていたはずだ

おまけに今日の俺の服装は蒐集していた時に着ていたのと同じパーカーを着ていた

なのはの蒐集の時や黒い魔導師と戦った時に見られていただろうに
どうやら、完全にバレたようだ
なんて些細なミスをやらかしてんだよ俺のクソッタレが
シグナムやヴィータも相当ピリピリしてやがる

「…手詰まり…ですか…すみませんが僕らのやることを見逃してくれませんかねぇ？」

「な！そんなことできるわけ無い！」

「時間が無いんですよ　はやてを助けたいだけなんですから、ほんの少しだけ時間を下さい　お願いしますよ高町さん、テスタロッサさん…！」

「蒐集…するならダメだよ…藤城君」

「……はぁ…」

息をひとつ吐いて、空を仰ぎ見る
詰んでしまったのだ
ならば仕方がねぇことなんだよ

「…やれやれ、見逃してくれればこんな選択は取らなかったのですが…」

髪を撫で付けるようにかきあげ、両腕にひびをいれて睨み付ける

その俺の様子にシグナム達も構え、なのは達も身構えようとする

「お前らがはやての友達だから傷付けたくはなかった…一度蒐集した後なら戦う必要もねーし尚更だ　だから手詰まりなんだよぉ…高町なのは、フェイト・テスタロッサ…戦うという選択肢しかねぇんだから」

「そんな…！」

「…容赦はしねぇぜ？…ヴィータッ！！」

「はぁぁッ！！」

ヴィータがなのはに向けて飛び出す

「待って！話を聞いて！」

「闇の書を完成させちゃいけないんだ…！」

「何を今さら」

「闇の書を完成させちゃったらはやてちゃんが死んじゃうんだよ！」

「…何だと？」

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

「はあぁぁっ！！」

「ふははっ！無駄無駄ァッ！！」

槍と大剣がぶつかり火花が散る

そのまま鍔迫り合いに持ち込むことはせずに離脱し、魔力弾を撃ち込んでいく

「ほぅ？どうやら前より出力をあげてきたようだな？」

「お前に刃を突き立てる為にな…！！」

「はっ！あの傷でどうやって復活したか分からないが、今度こそ俺の手で消してくれる！」

譲一となのはが対峙するその少し前

メットではなく、バイザーと頬当を身に付けた紅い少年、亮は庵と戦っていた

庵が最後の決戦に乱入しようとした為、相手の思惑を台無しにしなければならない

ヒットアンドアウェイを繰り返す亮に代わり、もう一人の仮面を着けた女性が転移して現れ、魔力で出来た刀身の剣を降り下ろしてくる

「！おぉ、危ない危ない…気配がギリギリまで感じられないからやりづらいなホントに」

「…くっ…！」

「とりあえず恨みはねーけど、邪魔だから適当にのびてろよ…ディバインバスター！…」

黄金の一撃が亮と女性を飲み込むように放たれた

直撃し、爆音と閃光が上がる
だが庵は首を傾げた

「？なぜお前らがそいつを守るんだ…？」

煙が晴れた先には思わぬ人物達が亮を守ったからだ
彼らは庵の問いに対してバインドを仕掛けることで答える

「やはり魔法の腕前なら誰よりも上ということか…！厄介な…！」

バリアを片っ端からほどいていくそのバインドに脅威を感じた庵は
大剣を振るうことで砕いた

それを見ていた亮は舌打ちする

（まだ俺の技量では使えないから彼女らに任せたが…力業で簡単に
バインドを砕くなよな…）

「マスター…私が特攻します…その後にアレを撃ち込んでください」

「無茶を言うな！アレは奴の動きを止めなければ無理だぞ！？」

「何をごちゃごちゃと…かかってこいよ雑魚ども借りを何倍にして返してやらなきゃならないからなぁ」

「行きます…！お二方、援護を！」

「止せ！…っ！ブルーブレイズ！」

仮面を着けた女性、リニスは剣を構えて突貫する

何処か苦虫を噛み潰したような表情の亮は槍をクローに切り替えて構えた

カートリッジを何発も消費して、その中心には魔力が収束し、幾十もの魔力球が浮いている

「あの子達の、フェイト達の…邪魔は、させない！」

「庵ィィィッ！！」

リニスの素早い一撃を受け止め、バインド弾、魔力弾を巧みに掻い潜る庵に亮は挑みかかる

手にしたデバイスをつきだして魔力を解き放つ

辺りに暴風のように力がせめぎあい、辺りを火花が駆け巡っては炸裂した

そして――…

ＳＩＤＥ　譲一

「なんだよ…そりゃあ…」

なのはが告げた事実は俺には衝撃的だった

闇の書を完成させると主を吸収して辺り一帯を破壊するだと…？

「で、デタラメ言ってんじゃねぇ！」

ヴィータの叫びにこないだの会話が思い出された

ヴィータの言っていた、何か大事な事を忘れているのではという不安

頭に浮かんできたそれを打ち消したいために叫んだ

「闇の書にはやては侵食されてんだ！だったら完成させるしか助からないんだぞ！？」

「闇の書は歴代の主に悪意ある改変をされて壊れているの！」

「だからこのままじゃはやては助からない」

歴代の主による改変だと？

なにか、なにか嫌な予感が俺の中で次第に膨れ上がり続ける

「…シャマル…過去に闇の書の主になった人物はいるか？」

「え、えぇ…いるけれど」

「そんなことを聞いてどうしたのだ藤城」

「闇の書を完成させた時、その主はどうなった…？」

「それは…」

答えが、でない

シグナムもシャマルもヴィータも言葉を紡がない

いや、その様子は紡げないでいた

「どうして…何も思い出せない…」

「忘れている…のか…？」

「そもそも、どう完成させたのだ…我らは…」

代わりに彼女らには困惑した表情を浮かべるばかり

まさか…悪意ある改変ってのは、ヴォルケンリッターにまでおよんでいるのか？

ヴィータが思い出せないナニカ、なのはの言う改変、暴走

管理局なら過去の闇の書の記録があるというのならなのはの告げた言葉は、真実だってか？

「まさか…私達のしてきたことは無駄だった…？」

無駄

シャマルの言葉がストンとはまる

ふざけんなよ…俺達がしてきたことはいったい何なんだったんだ…？

「ぬぅ！？」

「きゃ！？」

「なっ！？」

「ッ！？」

突然、俺達にバインドがかかる

なのは達を見るが二人とも驚いているようで彼女らの仕業ではないようだ

「クソッ！いきなりなんなんだこりゃ！？」

「チッ！こんなんで抑えられるかってんだ！」

両腕のひびからスカーサファイアの腕を出して、バインドを手刀で切り裂く

直ぐに後ろを振り向いて、何故かバインドを脱することの出来ないでいるシグナム達の拘束を解こうと走り出そうとするのだが…

俺は背後にスカーサファイアを出して盾にすることでそれを防いだ

爆炎がスカーサファイアを襲うがなんてことねぇ

だが…何か違うような？なんなんだってんだこの違和感は…

「譲一！」

「藤城君！」

「大丈夫だ…それにしてもテメェ…いきなり何様のつもりだ？」

シャマルとなのはの呼ぶ声に答えて無事を伝える

俺は空に浮かぶそいつを見ていた

一目見れば印象に残りそうな紅い服、剣にも斧にも見える奇妙な槍、

そして表情の見えないそのフルフェイスメット

矢口亮が俺達を見下ろしていた

だがその姿は、かつて対峙した時とやはり何かが違う

なんというか気配が、亮とは違う…？

なんだ…？何かおかしいぞ奴は、この気配は、あの不愉快さはどこ

かで…！

「ふっ！」

「！！」

弾かれたかのようにとてつもない速度で奴は急降下してきた

スタンドを出す暇なく、かつて戦った時とは違う速度で目前まで迫り、得物を構える

そこには魔力球が眼前に並んでいた

「門で逃げ…！？」

後ろには、シグナム達がいる

転移は、出来ねぇ

そして肩に槍が深々と突き刺さった

激痛に思わず顔をしかめる

「魔力球がいねぇ…ブラフか…！」

刺さるデバイスを抜こうとするも、抜かないように深く突き刺してきている

おまけに何かが流れ込んできて、体を動かすどころかスタンドも出せない

つまんねぇ判断ミスをするとは…門で魔力球をどこかに飛ばして、俺は接近戦対策の門を纏えばよかったじゃねぇか…

闇の書の真実を知って思考が緩んじまったか？

突然の事態についていけないのは固まっていたが、フェイトは斧のようなデバイスを構えて亮を止めようとしているのが見えた

だが急に視界がブレていき、足に地がつかなくなる

自分が屋上の外に投げ出されたのだと気づくと同時に、肩に刺さった槍を持った亮がどこかのビルの屋上に叩きつけていく

「かっは…テメェ…ッ！！」

「――――」

「な…まさかお前、ぐぁッ！？」

耳元に囁かれた言葉に俺は辛うじて出したひびで切り裂こうとするが、体に衝撃が走ると意識が、薄れていく…

ダメだ…こいつを…こいつを…あいつらのもとに…いか、せて…は…

ひび、が…とど……か…な…

「く、そが、ぁ…」

「……フ」

ＳＩＤＥ　ｏｕｔ

聖夜の宵祭、開演（後書き）

連続投稿します

聖夜の宵祭、戯曲（前書き）

物語は悲劇へ

悲劇は絶望へ

「譲一、君…？」

「そんな…どうして…？」

シャマルは突然のことにフェイトは亮の凶行に青ざめていた
なのははレッドマンの所業にショックを受けている
譲一が立っていた場所には血溜まりだけが残っている

「う、うぅ、うあぁぁぁぁッ！！」

ヴィータはバインドを砕こうと必死になった
心のうちには亮に対する怒りと憎悪が渦巻いている
その頬には涙が伝って
シグナムもシャマルも直ぐにバインドを砕こうとする

「クソッ！クソッ！なんでっ、なんで壊れないんだよぉ！譲一が、譲一がぁっ！」

「くぅっ！なんなんだこのバインドは…！」

「硬すぎる…！」

「！フェイトちゃん！シグナムさん達のバインドを！」

「なのは…う、うん！」

なのははひとまずシグナム達にかけられたバインドを取り払おうと駆ける

先ずは彼女達を解放するのが先だと判断した

亮を追いたい気持ちを押さえてフェイトも作業に取りかかろうとした

しかし、彼女らもまたバインドの餌食になる

放ったのはまたしても亮だ

しかもご丁寧になのはやフェイトをクリスタルケージに閉じ込めて

「な！」

「どうしたの!?どうしてこんなことするの!?」

フェイトは名前を出かかりながらも亮にそう問わずにいられなかった

なんとしても彼を止めなければ

いつもとどこか違う彼を見てフェイトは脱出を試みようと図る

一方、シグナムらは目の前の相手に怒気と殺気の混ざった視線で睨み付けていた

離れた場所に譲一が生きているのをなんとか掴んだシャマルは皆に念話で伝える

ザフィーラも直ぐにそっちに向かうと連絡を入れた

後はバインドをほどき、目の前の少年を打ちのめす――……

譲一との交流が、主はやてとは違った絆で結ばれていた彼女達にとっていかに大切な人物だったか

ふと、シグナムは気付く

(なんだ…?この気配を私は知っている…?いったいどこで…)

亮は空いた手を差し出すとあるものを出す
それはここにいる一同を驚かせた

「そんな!?」

「馬鹿な…何故お前がそれを持っているんだ!?」

「こいつ…ぜってぇ潰すッ!!」

「うそ…」

「レッドマンが…どうして闇の書を持っているの!?」

なのは達にもその光景に驚く

確かにその手には闇の書が握られていたのだから

その姿には邪悪な気配が幻視される

シグナムはその姿にある人物が頭をよぎる

「お前のような奴がさわっていい代物ではない…!ハアァァァッ!!」

シグナムがさらに力を込めてバインドを力づくで破壊する
レヴァンティンを構えてシグナムは鬼気迫る勢いで亮に駆け出した
その表情にはどこか焦燥と怯えを浮かべて

「…フン」

「ハァッ！！」

フェイトと刃を交えた時とは比にならない剣速を持って袈裟斬りを放つ
対する亮は闇の書を浮かべて槍を構えると両手でしっかり持って受け止める

「…？」

フェイトにはその亮の姿がどこか違和感を感じた
何故感じたか分からない
ただ、彼らしくないというより別人のようにフェイトには見えた
鍔迫り合いをしてデバイスごと叩き斬ろうとしたシグナム

彼女のなかにある予想は確信に変わっていた

しかし、相当の力を込めて斬りつけて何故押し込みきれないのだろうか

そんななか、おもむろに亮は片手を放した

支える力を失ったシグナムは前につんのめる

軽い衝撃が胸元を襲う

シグナムはゆっくりと視線を下ろして、絶望した

「う、あ…」

亮の貫手が深々と突き刺さっていた

シャマルは悲鳴をあげ、ヴィータやなのは、フェイトはシグナムの名を叫ぶ

「闇の書は…残りわずかな頁を不要になった騎士達で埋めるそうだ…歴代の主達もやっていたやつもいたそうだ…理解したか？」

「ぐ、そうか…やはり、お前は…あの、時の…！」

「…さて蒐集の時間だ」

「うぁぁぁぁ…ッ！？」

「あぁぁぁぁ…っ！」

「ヴィー、タ…シャマル…！」

シャマルとヴィータのリンカーコアがむき出しなると魔力を蒐集していく

「ヴィータちゃん！酷い！あなただけは許さない！」

「こんなの…違う…あなたは…あなたを許すわけにはいかない！」

二人の少女は亮の行為に怒りを爆発させる

クリスタルケージをなんとしても脱出しようと試み始めた

途中まで蒐集したヴィータは崩れ落ち、シャマルは最期まで蒐集しつくされる

やがてシャマルは光の粒子になって消えていく

「次はお前だ烈火の将、シグナム！」

「ぐあぁぁぁぁッ！！」

「やめ、ろぉ…」

貫いていた手を引き抜けば手にはリンカーコアが浮かんでいる

そして間もなく蒐集され始めた

「…ヴィー…タ…逃げ…」

「シグ…ナム…」

シグナムもまたシャマルと同じように消えていく

シグナムが最期に見た光景は邪悪な笑みを浮かべた―…

「うおぉぉぉぉぉッ！！」

「盾か…でしゃばるなよ…」

ザフィーラが上空より亮に向かって奇襲をかける

しかし、その一撃は届くことはなくバリアに防がれる

激突音を辺りに響かせながら、なおも殴り続ける
しかし、そのバリアは生きているかのようにザフィーラを絡めとると動きを止める

「お前も消えろ」

「う、おぉぉぉぁぁぁっ！！」

ザフィーラも蒐集されていき、体が消え始める
それでも前進を止めない狼の牙は亮に届いた
しかし、突き立てることはない…

「あ、るじ…」

「……」

拳の触れた部分を払いながらヴィータに歩みを進める
なのはらはもう自分が何を言っているのか分からない叫びをあげていた
これ以上、蒐集させるわけにはいかないから

「知っているか？ただ頁を埋めただけでは意味が無いと…どうすれば闇の書を起動すればいい？」

「…？」

涙に濡れた顔を上げたヴィータには亮の顔がよく見えない

影がかかり、表情をうかがい知ることができないその姿は不気味だった

「それはな、主の絶望こそが覚醒への引き金なんだよ」

なのはとフェイトを離れた場所に移動させた亮は、魔方陣を出すとそこにある人物を召喚する

「…え？だ、誰ですか？ここ、どこなんですか…？」

「ようこそ…この舞台の主演女優…」

「は、はやて…！」

「ヴィー…タ？なに、してるん…？シグナムは…？シャマルは、どないしたんや…？」

「シグナムもシャマルもザフィーラも全部蒐集したよ　この俺が塵も残さずにな」

「…？なんや…どういう…？」

「消滅したんだよヴィータを残してな」

「え…？」

その顔には絶望が満ちていく

あと、ひと雫入れればそれは満たされ、溢れていくと

「今からヴィータも蒐集して、ヴォルケンリッターをコンプリートだ　よかったな八神はやて　闇の書は間もなく完成する」

「はや、て…逃げて…」

「あ、あかん…！完成なんて望んでない！」

「そういえば藤城譲一だったか？あいつも邪魔だったから眠らせてやった…」

「譲一君…？」

「そこの血溜まりを見なよ、それは譲一の血さ　奴の体をこの槍で

貫いてやったのさ…さっき適当に打ち捨ててやったから今頃は失血死してるんじゃないか?」

「あ、あぁ…」

「そうだ!いいぞその表情!絶望しているな!?さぁ仕上げといこうか!」

亮が告げる言葉一つ一つが、少女の心を蝕んでいく

そして亮は残ったヴィータをはやての前に連れ出していく

はやてとヴィータは互いに手を伸ばして…

ヴィータの手が地面に落ちていった

ヴィータの胸にはリンカーコアを手にした亮の腕が突き出て

「は、や…て…ごめ…ん…」

「いや、いやぁ…」

「蒐集、完了…さあ、目覚めろ闇の書よ…絶望を贄にして、主を災厄振り撒く器とするのだ…ッ!!」

亮は辺りに宣誓し転移して姿を消した

同時に脱出したなのはとフェイトが入れ替わるようにその場にやってくる

「はやてちゃん…」

「そんな…なんてことを…」

「いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

闇が、眠りより目覚める

ビルの一角にて現れた紅い少年

彼は遠くに生まれた暗黒を眺めている

「く、くくっくはは っ」

それは少年を知るものが見たら驚くほどに不愉快な笑い声だった

当たり前だ

何故なら彼は矢口亮ではないからである

姿がブレていき、やがて別の姿へと変貌する

紅いバリアジャケットは白いコート型バリアジャケットに槍は大剣

カオスキャリバーへ姿を歪ませていく

「ふはははははっ！！いいな！これはいい！いいぞいいぞぅッ！！変身魔法と幻覚魔法！中々の使い道があった！」

メットを脱いだその顔も矢口亮のものから富出庵のものへと変わる

メットを宙に投げて大剣で一閃すると霧となって消えていく

「これで亮は最低な人間としての評価がついた！無事にはやてを覚醒させられたし、後は俺が、闇の書の闇と戦えばいい！おまけに傷心したなのはやフェイト、はやてを慰めれば俺の評価はうなぎ登りだ！ふはっ！ふははっ！笑いが止まらなくなりそうだ！亮がフェイトにやった洗脳や刷り込みも裏切ったようにしてやったんだからなんとかなる！ああ！今日はクリスマス・イブ！俺に対するプレゼントにしては上等だ！ふはははははっ！！邪魔な亮をぶちのめして猫姉妹も黙らせられるなんて！こんなチャンスをくれるとは幸運ＭＡＸは伊達じゃないなぁッ！！」

おかしくてたまらないと笑うその姿は邪悪そのものである

物語は、次第に庵に侵食され始めていた

「さて、そろそろ闇の書が動き始める…なのは達を助けなきゃな…」

大剣を担ぎ上げて庵は飛び上がる

目指すは闇の中心へ、己の欲望のままに

聖夜の宵祭、戯曲（後書き）

連続投稿しました

そしてヴォルケンリッターのファンの皆様こんな酷い扱いしてごめんなさい

とりあえず今話の最後までに、偽亮だとするためにわざと表現をおかしくしてみたりしたけどどうでしょうか？

自信がねぇ…

亮達と一緒にいた二人が誰かもバレバレですね

亮達はどうなったのか、譲一はどうなったのか

そしてこのままスーパー庵タイムで本当に主人公の座を支配してしまうのか？

クリスマス・イブの決戦は混沌としたものになっていきます

そしてやっぱ４０話越えるなＡ'ｓ編

とはいえ最後も見えてきたし、そろそろオリジナルスタンド、転生者の募集を再開します

現状でもいいネタが一杯送られてるので空白期の構想が楽しくなってきた！

聖夜の宵祭、狂詩曲（前書き）

絶望の少し前…

聖夜の宵祭、狂詩曲

ＳＩＤＥ　亮

「庵ィィィッ！！」

手にしたデバイスをつきだして魔力を解き放つ

辺りに暴風のように力がせめぎあい、辺りを火花が駆け巡っては炸裂した

「小癪な！そんなもので俺のバリアを抜くつもりか！」

「なめんなぁぁっ！！」

無理矢理腕を押し込んで行くと僅かにだが小さなひびが入る

だがそこまでだ

バリアがゴムのように柔らかく凹み、力がうまく入らない

「クククククッ！なれない魔力の収束と回転を加えた出来損ないの魔法ではその程度だぞ！？」

バリアがまるで生き物のようにうねりデバイスから俺の腕にまとわりついてくる

だんだん万力のように締め付けてくる

「…こんなことまで出来るというのか…」

「恐ろしい才能だ…これで発展途上と言うのだしな…その芽を摘み取らなければならないということが悔やまれる」

「だが摘み取らなければ世界が終わってしまいます！」

「コチャゴチャとぉ…五月蝿いぞ雑魚どもォッ！！」

途端に俺のバリアから大量の光弾が発射される

結界内だからといってもやりすぎだこの馬鹿…！

辺りの建物を次々に貫く夥しい量の光弾を見て俺は空いている手を空に掲げ、魔法を放つ

光はリニスや助っ人の元に行くと円形のシールドを張り、光弾を防ぐ

「馬鹿な奴だなお前！わざわざ回りのやつを構うというのか！自分の置かれた状況すら省みないその行動！そんな偽善、不愉快だ！」

「うる、せぇ！ぐうぅ！」

「おまけになんだあのお粗末な構成のシールドは！俺を笑わせてくれているのか！？」

ある作業をするために動けないリニス達を守るために張ったそれは光弾が当たる度に欠けていく

ずっと受け続ければ砕けてしまうだろう

だがそれでも構わない

「時間さえ稼げりゃいいんだよこっちは！」

「ん？」

元の槍の形態に戻り、柄頭に魔力の噴射口になる魔方陣を出す

そして軋む腕をなんとか動かして僅かなひびに切っ先を合わせた

「オオオオッ！！」

魔方陣から魔力を出すことでそれを推進力にして槍を押し通す！

腕の激痛を歯を食い縛ることで耐えて、その先へ

「庵イィィィッ！！」

「ハハハッ！馬鹿みたいに吠えるだけしか能がないのかお前は！気合いや根性で俺をなんとか出来るなんて思うなよ亮ァッ！」

「ベラベラいつもうるさいお前は、そんなんだから！」

ビシリ

硝子がひび割れるような音がしたと思うと次は擦れる音がする

それはブルーブレイズがバリアを僅かに越えた証拠だ

「格下の俺にしてやられんだよ！」

「だからどうした！こんなもの！お前なんぞいくらでも叩き潰せる！」

「マスター！行きます！」

「？なに？」

リニス達が魔方陣を展開して一本のコードを放つ

それは庵を囲うバリアに張り付き発光を始める

すると庵の顔色が急に悪くなっていく

俺をにらみつけるということは異変に気付いたか

「貴様ァッ！俺の魔力を吸い上げるつもりかァッ！」

「自分の優位に浮かれて慢心ばかりするお前が間抜けでよかったよ！でなければこの一撃は放てないからな…！」

リニスが投げ寄越す一発の黒いカートリッジを受けとる

先ほど吸い上げた庵の魔力を込めたものだ

ブルーブレイズに挿入する

「貴様…放つというのかそれを！相容れない魔力を放つには己の魔力を減らして反発を減らすしかないぞ！？また懲りずに自爆技か！」

「何のために魔力を推進力にするなんて馬鹿な真似を働いたと思ってるんだ…自爆なんかしない！俺の命はもう俺だけではないのだか

ら！」

「！」

「お気楽野郎が、自分の先のことしか考えてないお前と違うんだよッ！！」

今は魔力を奪われて防御力の落ちたお前に自分の一撃は耐えられない！

そして、放つ…！

「受けてみろ…暴君の一撃を…！

タイラントォ…バスタァーッ！！」

ブルーブレイズが光り輝きだし、繰り出される

今の俺の魔力では満足な威力は出せないから相手の魔力を、今回は庵の魔力を使った

いずれは自力で撃てるようにしないと効率が悪いが…

高密度の魔力による破滅の光線だ

ブレイズキャノンを下地に組み上げた為にその特徴を色濃く受け継

いでいる

こいつの頑丈なバリアのせいで光は外に漏れずに暴れだす

「グゥアァァァァァッ！！」

元の何倍もの破壊力を持ったそれを流石に涼しい顔で受けきれないようだな

だが気を緩めない、容赦もしない

オーバーキルぐらいがこいつにはちょうどいいだろう

暫くはその奔流に身を委ね…

「ぐうぅ…！」

「ま、不味い…！」

「ま、ます…たー…」

「どうした！？」

「我々の魔力を…逆に吸い上げられている…！」

「やられた…！こいつ、僅かな時間でこの魔法を解析した！」

「お願いしますマスター…！このコードの切断を！」

「くそッ！あと一歩まで来てこれかッ！」

バリアからデバイスを引き抜いて皆のコードを撃ち抜く

とりあえず皆は魔力切れは免れたが、暫くは戦線に立てないだろう

だがなんだこの皆の疲弊具合は…？瀕死寸前まで奪ったのか…？なんでそこまで…

「く、くくっ、クハハハハハッ！！ＷＲＹＹＹＹＹＹ！！」

今のバリアを破壊して現れたのは無傷の庵だった

いや、バリアジャケットはズタズタの血塗れになっている…

「ダメージはあったはずなのにどうしてピンピンしていると…不思議そうな顔をしているな？」

「！そうか…ッ！お前、奪った魔力でアヴァロンを発動したのかッ！」

疲弊するほどに魔力を吸い上げることで強制睡眠も気絶も回避したのか…！？

「ピンポーンッ！大正解だ亮君！…正解したお前にはあの世への片道切符を…」

「うぅ、うあぁぁっ！！」

「だぁもう邪魔だッ！」

剣を振り上げたリニスの腕を押さえて、腹部に刺さるような蹴りを見舞う

急いで吹き飛ぶリニスの背後に回り、受け止める

その勢いは止まることはなくビルに激突、俺達は埋まった

「あー…時間がないからサクッと行くか…ほい」

「くぁっ！？」

「ッ！アリア！」

気絶してしまったリニス越しに俺を見ると助っ人の仮面の男…その片割れであるリーゼアリアが変身を解かれてその頭を掴まれていた

「う、うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？いやっ！いやぁぁぁぁッ！！」

「あ、アリア！？どうしたのアリア！！」

なんだか様子がおかしい…リーゼアリアが抜け出せない上に尋常じゃない悲鳴をあげている

その様子にもう一方の仮面の男に扮するリーゼロッテも異変に気付いたようだ

俺も急いで抜け出そうとするが

「なぁっ…こんなときに…！」

腹部に鉄の部品が突き刺さり、抜け出せない…

リニスには刺さってなかったが、少しでも動かせばこの部品がリニスに突き刺さってしまう

どうしてこんな肝心な時に…

「わ、たしのぉ、記憶を…覗か、ないでぇ…」

「アリアを放せぇっ！」
「ダメだ、ロッテ！下手に突撃するなぁ…っ！」

腹部の痛みに響くのを我慢して叫ぶ
変身魔法を解いたロッテがふらつく体で庵に突撃する

「はい、放した」

「え？」

「ふむ…こんな技術があるのか…どれ」

「なぁっ！アリアのバインド！？そんな、お前がなんで！？」

ロッテの四肢を止めたそれを見て驚く
術式の組み方が、庵のものとは全く違う

「リーゼアリアの記憶を隅から隅まで解析することでそいつの経験と技術を俺の糧としたのだ…！俺はこれで無限に進化するッ！！さぁ、今度はお前からは体術を糧にしてやろうッ！！」

「く、くそぉ…こんなやつに…！」

「安心しろ、俺は慈悲深いからな　廃人になるほどまで記憶は覗か

ん」

俺は見てるだけしかできないのか？

いや、違う…まだ使いたくは無かったが！やらせるかよ馬鹿野郎！

「くそったれが…！！やめろおぉぉぉッ！！アンブラァッ！Ａｃｔ２ッ！！」

俺の背後から忍び寄る数多の闇が、いや、ビルの隙間という隙間から庵に殺到する

その中心が闇により大爆発する

「くぅっ…なんなんだ…今のは…！？お前の仕業か亮ァッ！」

「はぁはぁ…ダメ、か…だが…」

「猫姉妹が居ない…いつもいつも余計なことを…まぁいい…十分痛め付けたし、後は…亮ァ…お前はここで沈めよォッ！！」

「ッ！！アンブラＡｃｔ１…！」

目の前を巨大な魔力球が突撃してくる

リニスを抱きしめてありったけの魔力でバリアを張る

さらにその上を巨大な腕が覆い被さった

「俺は…まだ死ねない…！生き残る…！」

「おい！おい亮！しっかりしろ！」

「マスター！マスタァッ！」

「う、あ…？」

あれ…俺は…何をやって…

リニス？なんでそんな泣いてるんだよ…

というかここはどこだ…？

なんでクロノとユーノがいるんだ?

「どうだユーノ?」

「なんとか持ち直したよ…ただ暫くはデバイスは握れないかな…」

そうだ…思い出した…

リニスが居るってことは生きてるんだな俺は…

早く…庵を追わないと

「リニス…起こしてくれないか…?腕が思うように動かせないんだ…」

「マスター!もう十分です!これ以上は戦わないでください!」

「悪いが亮、君はここで退場だ　デバイスも持てない程のボロボロの体では足手まといだ」

視線を下げれば応急措置なのか全身が包帯だらけになっている

両腕が、全然上がらない

意識もはっきりしてきた…どうやら、俺が埋まった場所から大分離

れた場所にいるらしいな…

「ユーノはアルフと先に行っていてくれ、僕はあとから行く　彼はアースラの医療スタッフが世話をするから心配するな」

「分かったよ」

飛んでいったユーノを見送ったところを見ると闇の書との戦いが始まったということか…

詳しく知るためにクロノに尋ねる

「クロノ…今、どういう状況なんだ?」

「…今、なのはとフェイト、そして庵が闇の書と戦ってるよ」

「そう…か…」

算段が、ぶち壊された

リーゼ達が居ないのに闇の書が覚醒したとなるとどうせ庵がろくでもないことをしたんだろう

無人世界で覚醒させるつもりだったのにあの馬鹿め…どうしてくれるんだか

「…まさか、君と仮面の男…いやリーゼ姉妹と繋がってたなんてね」

「…調べあげられちゃお手上げか…優秀な執務官だなほんとに…」

「今は尋問はしない…ただひとつ聞く」

クロノの真剣な目を見て、リニスは不安になったか俺の手を握ってくる

「君は…闇の書を…八神はやてをどうする気だったんだ？」

「…完全な破壊…闇の書の、夜天の書の奥に眠る積み重ねられた闇の排除…主、八神はやての救済」

「出来る…というのか？」

「ああ、してみせる…その算段はあった」

原作のコアをアルカンシェルで消滅させる方法

そしてそれに類似する方法

その為に、リーゼ達とグレアム提督と共謀をした

共謀をしなければ八神はやてを犠牲にすることになる
それを回避するために暗躍した…
最後の最後で水の泡になってしまったがな

「あの幽霊みたいな異形も君のスタンドだな？」

「どんだけ俺を見てんだよ…ああそうさ…アンブラＡｃｔ２…俺のスタンドの進化した姿だ…」

庵を倒す決定打には僅かに足りなかったがな
予め、用意し続けた分身達も使い果たしたし、今すぐにはあの数は出せない
本当に俺はここで退場…なのかな

ここまで響いてくる爆音に視線を向けると幾つかの光が軌道を描いてはぶつかっている
お前が、そこにいていいわけがない
もっと別の人物がそこに居るべきなのにな…

今すぐにでも加勢に行きそうなクロノを呼び止めておく
リニスに命じてあるものを託すために

「本当は俺の役目じゃないんだが…」

「これは？」

「名はデュランダル…グレアム提督が今回の件の為に用意したデバイスだ…持っていけよ」

「…これで主ごと氷付けにする魂胆だったのかい？」

「…お前はホントにどこまで調べあげたんだよ…優秀にも程があるだろ…」

「そうでもなきゃダメな世界、役職だからね」

「…俺も、もっと優秀だったらな…」

「亮…君は…」

「そら、用事はすんだんだ　ボサッとしてると世界が滅ぶぞ」

「……行ってくる」

僅かに漏れ出た弱音を今一度飲み込み、飛び立つクロノを見送った

さて…医療スタッフがくるそうだが…

「行かれるのですね？」

「まだ、希望はある…退場宣告されようが、スタンドがまだ使える以上、俺は止まらないさ　さぁ譲一を探すぞ…あいつの持ちうる可能性、それがこの事件を解決に導いてくれる」

リニスに支えられながら力を振り絞って立ち上がり、転移魔法を発動した

「座標は…ジョジョの元へ」

聖夜の宵祭、狂詩曲（後書き）

……なんか、亮ごめん

お前最近いいとこ無いよね…主人公その2なのに

おまけにまだＡｃｔ2の描写を持ってこれないんだ

アンブラが活躍するのは例のフルボッコですね

あとほぼオリジナルのマテリアル編、短いけど構想あるからそこで頑張ってもらうね

次はあまり皆さんには好感が持てなさそうな庵が活躍します

庵ＶＳ闇の書です

サブタイの～曲は適当にチョイスしてるだけなので深い意味は無いんだこれっぽっちも

あ、なのはとフェイトの原作主人公ズも活躍しますよ

というかもっと女の子分を出さないと…

聖夜の宵祭、独唱（前書き）

絶望に男が踊る

己が道化であると気づかぬままに

聖夜の宵祭、独唱

ＳＩＤＥ　庵

フハハハハッ！俺降臨！

闇の書と戦い始めた機を図ってかっこよくなのはとフェイトの前に出る

庇った俺はさぞかし輝いて見えるだろう

「大丈夫かい！？なのは、フェイト！」

「と、富出君！？どうやってここに！？」

「ふ、大切な人を守るためなら結界のひとつやふたつッ！俺の障害ではないッ！」

なのはとフェイトに向けて微笑む

が、なのははひきつった笑顔をフェイトは俺より僅かに距離を引いた

ん?やっぱ今の状況でこの笑顔は不謹慎だったかな?

まぁいい、そこは俺のお茶目と受け取ってくれると信じている

「お前は…」

「確か闇の書だったか?いけないな、そんな悲しそうな顔をして、わぁぁぁぁッ!?」

人が話してる最中にいきなり突撃して来てマジびびった!

厳重に張ったバリアを拳一発で何枚もぶち抜いてきてこのまま土手っ腹に穴を空けられるかと思ったわ…魔法使えよ!ロストロギアの癖に!

というか殺す気だろコイツ…しかも感じるこの感情は…怒りか?なぜこんなにも怒りに満ちているのか…

まぁいいや、ちょいと俺の活躍の為に噛ませになってもらうか

「ハァッ!」

相手の腹に高速の蹴りを入れて吹き飛ばす

物凄い勢いで飛ぶ彼女だが、空中で急停止すると右手を差し向けて

くる

急速に魔力が収束されると、爆裂し、魔力弾を大量にばらまいてきた

おいおい数撃ちゃ当たるってか？

バリアを簡単に凹ましてくるそれをみて流石に回避運動をする

「ほらほらぁ！当たらないぞ当たらないぞぉッ！」

「きゃあぁぁぁっ！ちょ、ちょっと富出くん！挑発しないでよ！」

「避けるのが精一杯…！」

やべ、自重しろ俺

久々に心踊る展開に浮かれすぎたな

なのは達を庇うように巨大なバリアを張って防ぐ

「街が…」

「大丈夫だフェイトこれくらいすぐ直せるさ」

「……」

崩れゆく街を見て、フェイトがポツリと溢したのでそう返す

だって仕方ないじゃないか

あんな攻撃に街ひとつ守りながら防げなんて言われても俺でも無理だ

そもそも戦いに回りを気にしてばかりいたら勝てる戦いも勝てなくなるというもの

とはいえフェイトには今の俺が非情に見えてしまっただろう

それにしても闇の書、なんだか原作より苛烈な気がするのは気のせいか？

とにかくバリアを押しだして前進

大剣を大きく振るい、突風を起こして魔力弾を吹き飛ばす

確か、闇の書の動きを止めればよかったか？

とにかく、今の闇の書の相手になのは達は危険であろう

なのは達のあの台詞を言わせる為には俺が戦うしかあるまい

「闇の書よ、お前のその因果、俺が断ってくれよう」

飛び出して一閃

バリア…いや、ラウンドシールドだろうか

片腕を上げて半ばで受け止めると闇の書が開き、発光し始める

だが詠唱される前に俺はストラグルバインドを発動して離脱した

やはり、リーゼアリアの経験と知識は役に立つな…魔法技術がすべて底上げされたのだから

まあ、それでも、四肢につくバインドを紙屑のように粉砕した闇の書の力は恐ろしい

おまけに無表情で蹴り飛ばそうとしてくる

だからなんで接近戦なんだよ…俺が何をしたというのだ

まるで俺に恨みがあるような攻撃に多少戸惑うが、主人公の俺が敗北してはいかんだろう

ブラッディダガーをディバインシューターで相殺すれば、再び雑多な魔力弾の撃ち合いが始まる

「いかんな…なのは達を巻き込みかねん…なのは！少し離れてろ！俺が戦闘不能にするッ！」

「え!?あ、ちょっと!」

「ブレイズキャノンッ!!」

リーゼアリアから引き出した魔法を炸裂させて海側近くへと飛んでいく

これで少しは戦いが楽になるだろうし、街の破壊も多少は軽減されるだろう

それにしてもこのブレイズキャノンとやらは中々使い勝手が良いな

それでも派手にとはいかないからやっぱ矢口亮やＫＹクロノのような才無き連中にはおあつらえ向きの魔法といったところか

「…何故」

「？」

「…何故、こんなにも怒りがこの身を焦がしているのか…ただわかっていることは…全てを壊す前にお前だけは必ず壊す…ある守護騎士の無念がある…」

まさか…俺のしたことを勘づいたというのか？

心当たりは一つだけ…

烈火の将、シグナム

守護騎士の中で唯一俺とまともな面識のある人物…

このままでは折角、俺が大活躍してハーレムを築くという機会を踏み出せるようにしたのが台無しになってしまう

ならば、計画を変更だ

これをすれば、亮と同類になるようなものだが、彼女のためだ

仕方ないことなのだ

直接、シグナムの記憶を弄る

ただ少し、少しだけだ

彼女の記憶、矢口亮に蒐集されたという確固たる記憶を

その為には…

「…ならば俺と思う存分戦ってその怒りを発散すればいい…ただし」

大剣に魔力を収束させる

刃は黄金の輝きを発し始める

この一撃であればなのはの砲撃に耐える闇の書であっても苦痛であるはず

まばゆい輝きを発するカオスキャリバーを構えて

「俺を倒せると思うなよ？」

「！！」

瞬きの間すらなく背後に回り込む

魔法を必要とせずにこれだけ早く動けるのは恐らく俺だけだろう

そしてついてくることが出きる者など、たとえ闇の書だろうと不可能だッ！！

「ふんッ！」

「くぅッ！？」

辺りに閃光を撒き散らし、衝撃波と突風が地形を変えていく

とっさのこととはいえ異様に頑丈なシールド、プロテクション、パンツァーガイスト等と張られていくのに驚いた

なんか、以前のジュエルシードの時の様にパワーアップしてるのか？

だからといってそんなことで怯む俺ではない

未完成とはいえこれで破れないとなるとやはり、なのは達だけにしか物語を進められないことになるのだろうか

いや、弱気になるな俺

かっこつけた手前、後退なんか出来ない

一撃でもクリーンヒットさせてやる

「ハァッ！」

「…っ」

続けざまに二撃

素早く切りつける

ラウンドシールドを叩き割り、プロテクションにひびを入れる

ひびに向けて俺は真っ直ぐに突きを…

「行け…」

「グゥォォッ！？」

が、どっかから延びてきた触手に絡めとられてしまい、ビルに叩きつけられる

バリアが作動してない僅かな瞬間を狙われたか…！

中々の衝撃に頭が揺さぶられたか、若干視界が定まらない

「富出君ッ！」

急に上空よりなのはとフェイトが降りてきた

あちゃぁ…情けないところを見られたかな？

「なのはか…カッコ悪いところを見せたね」

偉そうな事を言ってこの様だ…これでは矢口のヘタレ野郎と同じくらいだろう

しかし慰めどころか、かけられた言葉は怒りだった

「街を壊さないように戦ってよ！いくらなんでもこれは酷いよ！」

「…なのは、実力の高い相手と戦えば回りのことは気にしてなんか」

「そんな言い訳聞きたくない！もっとうまく戦えるはずなのに、こんなに被害が出るわけないもの！」

「なのは、だから」

「…あなたは、最低だ」

フェイトが、冷たい目で俺をにらむ

あれ？何かしたっけ？

「お、おいおい、いきなり最低だなんて言うなよ…俺だって必死に」

「…だったらなんで、あんなにも悲しそうな顔をしていた相手と笑って戦えるの？」

「笑う？笑ってなんか…」

「笑ってたよ…まるであなたは彼女の事を気にも留めてないかのように…いや、実際に留めてなんかない…あなたは、自分の力に酔ってるだけ…自分が、思う存分使える相手が現れたその嬉しさに笑っていた…！彼女は好きであんな力を振るってる訳じゃないのにッ！あなたの目には何も写ってないッ！！」

「富出君…本当に回りのことなんて気にしていられない？違うよ、あなたは気にすること以前に力をどうやって使うしか考えてないんだよ…あの子と戦うことが目的じゃないの…」

「おい、フェイト、なのは、いい加減に…」

「……闇に…沈め…」

呟くような、だがはっきり聞こえた声にハッとして顔を上げると闇の書が手をこっちに向けていた

膨大な闇と魔力が渦巻き始めたそれはさらに膨れ上がる

同時に紅の魔力刃が大量に出現し始めた

それが動きだすと同時に飛び立つ

だがそれは急に方向を変えてきた

標的は俺だ

「そんな芸当さえ無理矢理やるほどやるかよ！全部叩き落として…」

しかし全て目の前に飛んできたブラッディダガーは、ユーノとアルフが防いでくれた

「勘違いしないでよ…君ならバリアじゃなくて全部叩き落とそうとするから」

「これ以上フェイトに迷惑かけないでほしいんだけどねぇ…自分のやってること本当にわかってるのかい？」

確かに今、叩き落とそうとした

だが、いいじゃないか別に

それぐらいのことで怒りを覚えるなどと…理解に困る

どうせ管理局員が全部直すんだからいいじゃないか…なんで怒られなければならないのか理解に苦しむ

「目に写ってない何て言うけど、ちゃんと闇の書を止めるさ」

「止めるだけじゃダメなんだ」

「私達は、はやてちゃんと闇の書さんを助けるために戦ってる」

「もちろん俺だって助けようと」

「もういい、そんな言葉言わないで」

「後は私達がやるよ…行くよフェイトちゃん！ユーノ君！アルフさん！」

「あ、ちょ…」

おかしい…何故こんなことになってるんだ…

こんなに強く否定される理由となった、目に写ってないということ

そんなわけ無いだろうに

全く…なのは達はまだ子供ということか?それとも亮が要らないこ

とをなのは達に吹き込んでいるか…

「二人だけじゃ無理があるだろ?俺に任せろって」

「いいから下がっててよ!」

「無茶ばかりするなのは達が心配なんだよ俺は」

「回りを省みないあなたがそんなこと言っても説得力なんか無い!」

と、フェイト

これはまさか重症かフェイトは

亮の洗脳は正常な判断を奪っているな…俺にどこまでできるか…

状況は五対一、チームワークがなってないが問題ない
要は勝てばよかろうなのだ

「危ない！」

等と考えていると拳が目の前に

…へ？

「うべェェッ！？」

顔面を盛大に殴られたと気づいた時には既に遅し
闇の書はフェイトに攻撃しようと動きを見せたところで急激な方向転換してきたのだ
またバリアが張ってない時だったから思い切り綺麗に決まった
だからなんで魔法じゃなくて素手なんだ…
俺がぶっ飛んでいるときに何かが横を物凄い早さで横切る

なんだ今のは？

「藤城くんなの…？」

「なんだと！？そんな馬鹿な…！？」

なのはの震える声に俺は体を起こすと俺のパクリのような純白のバリアジャケットを着た藤城譲一が確かにそこにいた

「ふ、ふざけるな…なんでこんな…待て…なんで生きているんだ奴は…頭がかち割れたはずなのに…！！」

いや、そもそもなんでバリアジャケットなんか着ているんだ！？

あいつはデバイスなんか持って…

譲一の手に握られる一振りの剣

「！あの剣は…！猫の…！」

それは亮のそばにいた使い魔…奴のデバイスじゃないか

亮ァ…お前はどこまで俺の邪魔をするんだッ！

「クソッ！俺が主人公なんだ…お前が出しゃばるんじゃ…んグゥッ！？」

急に体が動かなくなる

バインドでもないこの奇妙な技…

下を見れば俺の影は貯水タンクの影の中…

「あ、亮…貴様ァァァッ！！」

「お前は…主人公なんかじゃないんだよ…！」

貯水タンクにもたれ掛かるように奴が立っていたのだった

聖夜の宵祭、独唱（後書き）

書いてみてそんなに無双してねぇじゃねーか庵

展開上仕方ないけど

庵本人の気付かぬ実績としてはアリサとすずかをなのは達が守るという過程等が無くなってますね…そこは次々話に描きます

次話に譲一がデバイスを手にいれた話がきて、次々話にやっと原作主人公と譲一の共闘になります

最終決戦で大分時間かかるなぁ…

マテリアル編は空白期に5話くらい…で終わるのが目標かな

空白期はやりたい放題やるので死人が一杯出そうだ…コワイ

あー、うん、スーパークロノタイムもマテリアル編に引っ越しやな…

ついでにもう1話連投します

聖夜の宵祭、交響曲（前書き）

黄金の精神は闇に眠る友の為に立ち上がる

聖夜の宵祭、交響曲

ＳＩＤＥ　譲一

「つ…あ…」

体の痛みで意識が覚醒してくる

何かが弾け、激突する音がさらに覚醒の速度を促してくれる

「はぁっ…あ…」

寝返り、なんとか踏ん張って立ち上がる

あいつはホントに馬鹿だ

スタンド使いはどういうわけか本体の能力を底上げしてくれるというのを知らねーのか？自然治癒が早くなるとか

頭を切ったり血が流れてるが、細かい傷は勝手に治っている

自分が倒れた場所を見れば蜘蛛の巣のようにひび割れ、肩と切れた頭の傷から流れ出た血溜まりが大変なことになってた

「こりゃ死んだって考えちまうか…？あー…体痛ぇー…」

失った血は流石に回復しないが、戦うにはまだ大丈夫かな…

腕とかちょっとひびが入ってんのかやたら痛いけど、スタンドが殴れんならまだ行ける

「それにしても…ありゃはやて…なのか？戦っているのは…庵か…」

なんか闇の書を持つ女性が見えたからたぶんそうなんだろう

なのはの言う、覚醒してしまった闇の書に取り込まれたはやての姿があれだとすると、シグナム達はどうなっちまったんだ？

そもそも頁は埋まってなかったはずなのにどうやって覚醒したんだ？

いや、今はどうでもいいことか…とにかく…あれを止めねーとならねぇ

だがその前に…

「悪趣味なメット脱いで…どの面下げて俺の前に来やがるんだお前は」

ボロボロになった亮が猫耳を生やしたこれまたボロボロな女性に支えられながら現れた

わかっちゃ居るんだが…ここはチョイと訪ねたくなる

突然殺気をぶつけられて猫耳ねーちゃんが身構えるが亮は平然と、それこそ俺にとっては望んだ答えをくれる

「…一体なんのことかさっぱりなんだが？」

「そうだな、本物だし」

「は？」

「なのは達と話してたらな、メットを着けたお前が出てきて俺を蹴散らしてくれたんだよ…お陰で服が真っ赤だ」

「おい、メットは壊れたからもうないぞ」

「知ってる…ありゃニセモンだからな」

そう、耳元でささやかれた言葉を俺はハッキリと聞き届けた

『お前も亮のもとへ逝け』

自分でそんなこと言い出しちまうとはどうも浮かれすぎてたみたいだなあいつは

今尚、覚醒したはやてとドンパチやってる馬鹿を見る

「マスター」

「ああ、あいつはホントに馬鹿だ…詰めが甘過ぎにも程があるだろう…」

何が楽しくて仕方ないのか分からねーが、満面の笑みを浮かべる庵はスッゲー馬鹿っぽい

なんか、あんなのにしてやられたってのはムカつく

「なあ、なんでこんなのになったかわかるか？」

「大体はな…闇の書が覚醒したのは恐らく庵の仕業だな…ヴォルケンリッターが見えないとなると、やはり闇の書の残りの頁を埋めるべく消滅するまで蒐集したからだろうな…」

「なんだと？あの野郎…はやての家族を手にかけやがったのか！？」

「闇の書のかつての歴代の所有者達の中には、不要になった守護騎

士で頁を埋めるような奴がいたと言う話だからな…」

随分とふざけた主も居たんだな…庵もそいつらと同列だ

欲のために他人の家族を犠牲にするような奴が同じ人間だとは返吐が出る

今すぐやつをぶっ倒してぇがまずははやてだ

ただの破壊者にしてたまるかよ

「待て、譲一」

「止めんじゃねぇぞ?はやてを助けなきゃならねぇんだからな」

「守護騎士は闇の書の一部でもあるんだ　八神はやてに闇の書を掌握させてやれば皆を生き返らせることが出来る」

「そいつは本当か?だったら尚更じゃねぇか」

「あれは闇の書そのもの…八神はやてはそのなかに眠りについているんだ　戦うだけじゃダメだ…呼び掛けろ、闇の向こうの彼女に…」

それだけ言って苦しそうに蹲る亮

紅くて分からなかったが、こいつ腹から血出してねぇか?

「お、おい…お前大丈夫かよ…」

「ちょっと馬鹿にやられただけだ…スタンド使いは早々に死なない…気にするな…リニス」

「譲一さんこれをお使いください」

猫耳ねーちゃんが手渡したのは一本の剣

いや、なんか違う…

「これって…デバイスか？」

「いくらお前でも…あいつのカオスキャリバーを捌ききるのは出来ないだろ？能力を使ってもダメだったんだ　こいつを使えばやりやすいだろ」

「そのデバイスには持ち主の魔力を活性化させる機能を持っています　彼に拳を当てられるあなたにちょうどいいでしょう」

握りしめると鍔に埋まっている核が答えるように光る

軽く振ってみれば、見た目ほど重いというわけでもないみたいだな

この幼い体に合わせてくれている…そんな感じだ

「俺なんかに渡しても良いのかよこれ？借りパクしちまうぜ？」

「デバイス、欲しいのか？」

「う、別に…羨ましくないし、こんなもん欲しくなんか…」

「…欲しいんだな」

「デバイスが使える皆が羨ましいと、図星ですね」

「うっせぇ馬鹿共」

ああ、欲しかったよチキショウが、悪いかよ？

シグナム達を見ててスッゴい羨ましかったですよーだ

「いいさ、お前にやるよそいつ」

「あ？今なんて言った？」

「ブリングブライト、その子の名前です　大事にしてくださいね」

「マジか？マジなのか？」

スッゴいニコニコしながら見つめてくる猫耳ねーちゃんと亮

なんだお前らその生暖かい視線は

子供あつかいしてんのかお前らは

実際子供だけど

『よろしくお願いしますマスター』

「あ、あぁ…なんつーかマスターは背中が痒くなるな…藤城か譲一でいいよ」

『それでは、ジョジョ、と』

ジョジョ…か

俺なんかがそんなやつなわけねーんだがなぁ

まぁ、なんというか、言われてみれば悪い気はしねぇからいいか

というかそこの二人

さっきからなんだその表情は

まるで我が子の旅立ちを見送ってるみてーなことになってんぞ

「本当にもらっちまうかんな!?後で返せって言われても返さねぇからな!?」

「ああ、構わない」

「その子の力は人を選びますが、あなたなら見事に使いこなせるでしょう」

「チッ!別にデバイス貰って嬉しいとか思ってねぇんだからな!勘違いすんなよ!バーカバーカ!」

「はいはい、ツンデレツンデレ」

なんか今の亮はすっげぇムカついた

怪我人だけど容赦なく殴りてぇ

自分の頬がひきつっているのがわかる…どうしようか?ブリングブライトの試し切りにしてやろうかコイツ

だが俺のちょっとしたムカつきは飛んできた魔力の波動を前に霧散する

それは庵と闇の書の戦いの余波だ

猫耳ねーちゃんが咄嗟に前に出て、バリアを張って防いでくれた

バリア越しに辺りの建物をぶっ壊していくそれらを見て怒りが沸い

てくる

「庵め…いくら結界内とはいえ、無闇に破壊するなよ…」

「富出庵…恐ろしい子供です」

惨状を眺めて、俺の心情と同じことを二人は呟く

やっぱ無駄に力を持った奴は回りすら見えなくしてしまうもんなのかねぇ

そんなことを考えていれば次に襲うは巨大な地響きと至るところから立つ火柱

「闇の書による滅びが始まったか…！だがこれは不味いな…俺の計算と違って始まるのが早すぎる…！」

「まさか…あの馬鹿…！」

世界を歪ませるほど次元が高まった庵の魂が、亮の計算を狂わせたんじゃないのか？

だとしたら庵を葬るか、一刻も早くはやてを起こさねぇとならねぇ

前者よりも後者、俺ははやてが大事だ

さっさと眠りから覚めて、元の日常を取り戻してやる

「時間もないみたいだからな…そろそろ俺は行くぜ」

「少し、お待ちください」

猫耳ねーちゃんが呼び止めたので立ち止まると淡い光が俺を包んだ

痛みが引いているので傷を治療してくれてんのか

痛みがあれば集中しづらいから能力の多用は控えるつもりだったが、

正直これは助かった

その代わりに今度は猫耳ねーちゃんが膝をつく

俺は駆け寄るが、彼女は笑って俺を止めた

「私に構っている時間なんてありませんよ」

「大丈夫だ　彼女は少し休めば元気になる」

「でもよ…」

「今なすべきことを間違えるなよ　最優先すべきはリニスじゃなくて八神はやてだろ、行ってこいジョジョ」

拳を強く握りしめて、剣を肩に担ぐ
亮の言う通りだ…今は、はやてだ
こいつらがしてくれたことを無駄になどしてはならないッ！

「ありがとな…二人とも…」

「デバイスを使うならバリアジャケットを纏っていけ！お前のダメージを少しは軽減するはずだ！」

俺はビルから飛び立つ
馴れない飛行魔法を何とか操り上空へ

「確かシグナム達が言ってたな…ブリングブライト！セットアップ！」

その言葉と共に俺はパーカーではなく、白い、学ランを改造したような服に変わっていた

とはいえ学ランの下はジョナサン・ジョースターの決戦服みたいになってるが

同時に、魔力の活性化と言っていたように体に力が溢れてきた
それに酔っていたいが、キッと前方を睨み付けた

「ブリングブライト！ちょっと足場作れるか！？」

返事を寄越すよりも足元に三角形みたいな陣が現れる
コイツは確か、シグナム達と同じだな…いいねぇお揃いでよ…
それを踏みしめて、俺に憑依しているかのようにスタンドを出す

「行くぜスカーサファイア、ブリングブライトッ！」

強く、強く蹴り出す
陣が壊れるほどの力で俺は真っ直ぐに飛び出す
闇の書と戦っていたはずの庵が吹き飛ばされるのと入れ替わるように突っ込んで俺は剣を振り抜いた
相手はバリアを出して防ぐと、入れ違いに蹴りを見舞ってくる
それをスタンドで蹴り返し、その反動で距離を取る

「よう、初めまして、だな闇の書さんよぅ」

「あなたは…」

なんか怒りに燃えていた瞳が驚愕しているのが見えた

後ろにいたなのはがまるで幽霊でも見てるような顔になる

「藤城くんなの…？」

「おう、藤城くんだぞ？この通り五体満足だぜ高町なのは　さて…と…」

俺は剣を構える

それに合わせるように闇の書の回りに闇が集まる

やれやれ、なんで、闇の書に、はやてに剣を向けることになってんだろうな俺は？

おまけに、闇の書の顔は涙で濡れてやがるし…無表情…だがお前のその無念と絶望、悲嘆という感情は俺にはバレバレだぞ？

「お前はどうやら今の状況をどうにかしたいみたいだな…」

「……」

「だんまりか…まぁいいぜ、お前もはやての家族でもあるからな…
そんな顔してるんなら、まとめて救ってやんよ」

「…ッ！」

一呼吸ついて、その闇の奥に眠る少女に向けて、万感の想いを込めて口にする

「待ってろよはやて…絶対に、お前の笑顔を、世界を取り戻してやるからなッ！」

聖夜の宵祭、交響曲（後書き）

ジョナサン・ジョースターの服＋承太郎の学ラン

なんというアンバランスッ！

袖からあの手袋が覗いてますな

ブリングブライトは第一部でジョナサンが譲り受けたあの剣の話から譲一に剣を持たせたくなったのです

Ａ' ｓが終われば設定で詳しく紹介する予定ですがブリングブライトはまだ試験段階のデバイスですＧＰ－０１です

というかネタ帳にブリングブライトで月光蝶とかどうしたんだろ自分…

月光蝶であるッ！！とかしたかったんだろうか？自分のことなのに思い出せないとはこれいかに

ブリングブライトの機能は第一部のあの力の再現です

ふるえるぞハート！

燃え尽きるほどヒート！

次話からなのはとの絡みが増えるよ！やったねじょういち！

出来れば今日クリスマスイブにA's編終わらせたかったなぁ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9864w/

スタンド使いもリリカルマジカルッ！

2011年12月24日09時45分発行